

蓼喰う虫

谷崎潤一郎

青空文庫

その一

美佐子は今朝からときどき夫に「どうなさる？ やっぱりいらつしやる？」ときいてみるのだが、夫は例の執方どっちつかずなあいまいな返辞をするばかりだし、彼女自身もそれならどうと云う心持もきまらないので、ついぐずぐずと昼過ぎになつてしまった。一時ごろに彼女は先へ風呂に這入はいつて、どっちになつてもいいように身支度だけはしておいてから、まだ寝ころんで新聞を読んでいる夫のそばへ「さあ」と云うように据すわつてみたけれど、それでも夫は何とも云い出さないのである。

「とにかくお風呂へお這入りにならない？」

「うむ、……………」

座布団ざぶとんを二枚腹の下へ敷いて畳の上に頬杖ほおづえをついていた要かなめは、

着飾った妻の化粧の匂においが身近にただようのを感じると、それを

避けるような風にかすかに顔をうしろへ引きながら、彼女の姿を、

と云うよりも衣裳いしやうの好みを、成るべく視線を合わせないように

して眺ながめた。彼は妻がどんな着物を選択したか、その工合で自分

の気持も定さだまるだろうと思つたのだが、生憎あいにくなことにはこの頃

妻の持ち物や衣類などに注意したことがないのだから、———ず

いぶん衣裳道楽の方で、月々何のかのと拵こしらえるらしいのだけれど

も、いつも相談あずかに与つたこともなければ、何を買つたか気をつけ

たこともないのだから、——今日の装いも、ただ花やかな、或る一人の当世風の奥様と云う感じより外には何とも判断の下しよ
うもなかった。

「お前は、しかし、どうする気なんだ」

「あたしは執方でも、……あなたがいらつしやれば行きますし、
……でなければ須磨すまへ行つてもいいんです」

「須磨の方にも約束があるのかね？」

「いいえ、別に。……彼方あつちは明日あしただつていいんですから」

美佐子はいつの間にかマニキュールの道具を出して、膝ひざの上でセ
ツセと爪つめを磨みがきながら、首は真つすぐに、夫の顔からわざと一二
尺上の方の空間に眼を据えていた。

出かけるとか出かけないとか、なかなか話がつかないのは今日に限ったことではないのだが、そう云う時に夫も妻も進んで決定しようとはせず、相手の心の動きようで自分の心をきめようと云う受け身な態度を守るので、ちょうど夫婦が両方から水盤の縁ふちをささえて、平らな水が自然と孰方かへ傾くのを待っているようなものであった。そんなふうにしてとうとう何もきまらない内に日が暮れてしまうこともあり、或る時間が来ると急に夫婦の心持がびったり合うこともあるのだけれど、要には今日は予覚があつて、結局二人で出かけるようになるだろうことは分っていた。が、分つていながら矢張受動的に、或る偶然がそうしてくれるのを待っていると云うのは、あながち彼が横着なせいばかりではなかつた。

第一に彼は妻と二人きりで外を歩く場合の、——ここ此処から道どうと
頓堀んぼりまでのほんの一時間ばかりではあるが、お互の氣づまりな
道中が思いやられた。それに、「須磨へ行くのは明日でもいい」
と妻はそう云っているものの、多分約束がしてあるのであろうし、
そうでないまでも、彼女に取っては面白くもない人形芝居を見せ
られるより、阿曾あその所へ行つた方がいいにきまつていることを察
してやらないのも氣が済まなかつた。

ゆうべ京都の妻の父から、「明日あした都合がよかつたら夫婦で弁天座
へ来るように」と云う電話があつたとき、一往妻に相談すべきで
あつたのだが、折あしく彼女が留守だったので、「大概ならばお
伺いたします」と、要はうっかり答えてしまった。それと云う

のが、「僕は長いこと文楽の人形を見たことがありませんので、今度おいでになる時には是非誘っていただきたい」と、いつぞや老人の機嫌きげんを取るために心にもないおあいそを云つたのを、老人の方ではよく覚えていてわざわざ知らしてくれたのであるから、彼としては断りにくい場合でもあつたし、それに人形芝居はとにかく、あの老人に付き合つてゆっくり話をするような機会が、ひよつとしたらもうこれつきり来ないであろうとも思えたからだつた。鹿ヶ谷ししの方たにに隠居所を作つて茶人じみた生活をしている六十近い年寄りとは、もちろん趣味が合う訳もなし、何かにつけてうるさく通つうを振りまかれるのにはいつも閉口するのだけれど、若い時に散々遊んだ人だけあつて何処か洒落しゃらくな、からつとしたとこ

ろのあるのが、もうその人とも親子の縁が切れるかと思えばさすがになつかしく、少し皮肉な云い方をすれば、妻よりもむしろこの老人に名残なごりが惜しまれて、せめて夫婦でいる間に一ぺんぐらいは親孝行をしておいてもと、柄にないことを考えたのだが、しかし独断で承知したのは手落ちと云えば手落ちである。いつもの彼なら妻の都合と云うことに気が廻はらない筈はずはないのである。ゆうべも勿論もちろんそれを思いはしたけれども、実は夕方、「ちよつと神戸まで買い物に」といって彼女が出かけて行ったのを、恐らく阿曾に会いに行つたものと推すしていた。ちようど老人から電話がかかった時分には、妻と阿曾とが腕を組み合つて須磨の海岸をぶらついている影絵が彼の脳裡のうりに描かれていたので、「今夜会つて

いるのなら明日は差支さしつかえないであろう」と、ふとそう思った訳なのであった。妻は従来かくし立てをしたことはなかつたから、ゆうべは事実買い物に行つたのかも知れない。それをそうでなく取つたのは彼の邪推であつたかも知れない。彼女はうそをつくことは嫌きらいであるし、又うそをつく必要はないにきまつているのだから。が、夫に取つて決して愉快でない筈のことをそうハッキリと云うまでもないから、「神戸へ買い物に行く」という言葉の裏に「阿曾に会いに行く」と云う意味が含まれていたものと解釈したのは、彼の立ち場からは自然であつて、悪く感づいた訳ではなかつた。妻の方でも要が邪推や意地悪をしたのでないことは分つているに違あひなかつた。或あるは彼女いは、ゆうべも会うことは会つて

いるのだが、今日も会いたいのであるかも知れない。最初は十日置き、一週間置きぐらいだったのが、近頃は大分頻ひんぱん繁はんになつて、二日も三日もつづけて会うことが珍しくないのであるから。

「あなたはどうなの、御覧になりたいの？」

要は妻が這入つたあとの風呂へ漬つかつて、湯上りの肌はだへバスローブを引っかけながら十分ばかりで戻つて来たが、美佐子はその時もぼんやり空くうを見張つたまま機械的に爪をこすつていた。彼女は縁側に立ちながら手鏡で髪をさばいている夫の方へは眼をやらずに、三角に切られた左の拇おやゆび指の爪の、ぴかぴか光る尖せんたん瑞んを間近く鼻先へ寄せながら云つた。

「僕もあんまり見たくはないんだが、見たいツて云つちまつたん

でね。………」

「いつ？」

「いつだったか、そう云ったことがあるんだよ。ひどく熱心に人形芝居を讚美するもんだから、つい老人を喜ばすつもりで合づちい槌づちを打ってしまったんだ」

「ふふ」

と彼女は、あかの他人に対するようなあいそ笑いを笑った。

「そんなことを仰おつしやるから悪いんじゃないの。いつもお父さんに付き合つたことなんか癒いに」

「まあとにかく、ちよつとだけでも行つた方がいいんだけれどな」
「文楽座つて一体どこなの？」

「文楽座じゃあないんだよ。文楽座は焼けちまつたんで、道頓堀の弁天座という小屋なんだそうだ」

「それじゃどうせ据わるんでしよう？ 敵かなわないわ、あたし、――

――あとで膝が痛くなっちまうわ」

「そりゃあ茶人の行くところだから仕方がないやね。――お前のお父さんも先せんにはあんじゃあなかつたし、活動写真が好きだった時代もあつたんだが、だんだん年を取るに連れて趣味が皮肉になつて行くんだね。この間或る所で聞いたんだが、若い時分に女遊びをした人間ほど、老人になるときまつて骨董こつとう好きになる。書画だの茶器だのをいじくるのはつまり性慾せいよくの変形だと云うんだ」

「でもお父さんは性慾の方もまだ変形していないんじゃないの。今日だつてお久が附いているでしょう」

「ああ云う女を好くというのがやっぱりいくらか骨董趣味だよ。あれはまるで人形のような女だからな」

「行けばきつとアテられてよ」

「仕方がない、それも親孝行だと思つて、一時間か二時間アテられに行くさ」

ふと要は、妻が何となく出洩るのは外に理由があるんじゃないかな、とその時感じたが、

「では今日は和服になさる？」

と、彼女は立って、たんす箆笥ひきだの抽出しから、たとうに包まった幾組か

の夫の衣類を取り出すのであった。

着物にかけては要も妻に負けない程の贅ぜいたく沢屋で、この羽織にはこの着物にこの帯と云う風に幾通りとなく揃そろえてあつて、それが細かい物にまでも、——時計とか、鎖とか、羽織の紐ひもとか、シガーケースとか、財布とか、そんな物にまでおよんでいた。それを一々呑み込んでいて、「あれ」と云えば直ぐその一と組を揃えることの出来るものは美佐子より外にないのであるから、この頃のように夫を置いて一人で外へ出がちの彼女は、出かける時に夫のために衣類を揃えて行くことが多かつた。要に取つて現在の妻が實際妻らしい役目をし、彼女でなければならぬ必要を覚えるのは、ただこの場合だけであるので、そう云う時にいつでも彼は

変にちぐはぐな思いをした。殊ことに今日のように、うしろから襦じゆば
 袷んを着せてくれたり、襟えりを直してくれたりされると、自分たち
 夫婦と云うものの随分不思議な矛盾した関係が、はつきり感ぜら
 れるのであった。誰がこう云う場面を見たら、自分たちを夫婦で
 ないと思うであろう。現に家にいる小間使にしても下女にしても、
 夢にも疑つてはいないであろう。彼自身ですら、こうして下着や
 足袋たびの面倒までも見て貰もらつている自分を顧みれば、これでどうし
 て夫婦でないのかと云うような気がする。何も閨房けいぼうの語らえば
 かりが夫婦を成り立たせているのではない。一夜妻ならば要は過
 去に多くの女を知っている。が、こういう細かい身の周りの世話
 や心づくしの間にこそ夫婦らしさが存するのではないか。これが

夫婦の本来の姿ではないのか。そうしてみれば、彼は彼女に不足を感じる何ものもないのである。……

両手を腰の上へ廻してつづれの帯を結びながら、彼はしやがんでいる妻の襟足を見た。妻の膝の上には彼が好んで着るところの黒八丈の無双むその羽織がひろがっていた。妻はその羽織へ刀の下げ緒おの模様もように染めた平打ちの紐を着けようとして、毛ピンの脚あしを乳ちへ通しているのである。彼女の白いてのひらは、それが握っている細い毛ピンをひとすじの黒さにくつきりと際きわ立たせていた。研みがき立ての光沢つやのいい爪が、指頭と指頭のカチ合う毎ごとに尖とがった先をキキと甲斐絹かいきのように鳴らした。長い間の習慣で夫の気持を鋭く反射する彼女は、自分も同じ感傷ひに惹ひき込まれるのを恐れるかのよ

うに殊ことごと更ら隙間なく身を動かして、妻たるものなすべき仕事を
 さつさと手際よく、事務的に運んでいるのであるが、それだけに
 要は、彼女と視線を合わせることなく余所よそながら名残なごりを惜しむ
 心で偷ぬすみ視みることが出来るのであった。立っている彼には襟足の
 奥の背すじが見えた。肌襦袢の蔭に包まれている豊かな肩のふく
 らみが見えた。豊の上を膝でずっている裾すそさばきの袴ふきの下から、
 東京好みの、木型のような堅い白足袋をぴちりと箠はめた足あし頸くびが
 一寸ばかり見えた。そう云う風にちらと眼に触れる肉体のところ
 どころは、三十に近い歳としのわりには若くもあり水々しくもあり、
 これが他人の妻であつたら彼とても美しいと感ずるであろう。今
 でも彼はこの肉体を嘗かつて夜な夜なそうしたように抱きしめてやり

たい親切はある。ただ悲しいのは、彼に取ってはそれが殆ど結婚の最初から性慾的に何等の魅力もないことだった。そうして今の水々しさも若々しさも、実は彼女に数年の間後家ごけと同じ生活をさせた必然の結果であることを思うと、哀れと云うよりは不思議な寒気を覚えるのであった。

「ほんとうに今日は——」

そう云いながら美佐子は立って、羽織を着せるために夫の背中の方へ廻った。

「——いいお天気じゃありませんか。芝居なんぞには勿体もったいないくらいだわ」

要は二三度彼女の指が項うなじのあたりをかすめたのを感じたが、その

肌触りにはまるで理髪師の指のような職業的な冷めたさしかなかつた。

「お前、電話をかけて置かなくつてもいいのかね？」
と、彼は妻の言葉の裏を尋ねた。

「ええ、……………」

「かけてお置きよ、でないと僕も気が済まないから、……………」

「それにも及ばないんだけれど、……………」

「しかし、……………待っていると思いはじやないか」

「そうね、——」

彼女はちよつとためらつてから云つた。

「——何時頃に帰れますかしら？」

「今から行けば、仮りに一と幕だけとしても五時か六時にはなるだろうな」

「それからじゃあんまり遅いでしょか？」

「そんなことは差支えないが、何しろ今日はお父さんの都合でどうなるか分りやしないぜ。一緒に晩飯を付き合えとでも云われたら断る訳にも行かないし、……………ま、明日にした方が間違いがないよ」

そう云っている時、小間使いのお小夜さよが襖ふすまを開けた。

「あのお、須磨から奥様にお電話でございます」

その二

電話口の話は三十分もかかったけれども、それでも漸く須磨ようやの方は明日にすると云うことになって、一層浮かぬ顔つきをしながら、彼女が夫と珍しく連れ立って出たのは、もう二時半を過ぎた頃だった。

たまに日曜の折などに、小学校の四年へ行っている弘ひろしを中に挟みはさながら、親子三人で出かけることはないでもないが、それは近頃、うすうす父と母との間に何事かが醸かもされつつあるのを感じいたらしい子供の恐怖を取り除のけるため、今日のように夫婦が二人で出歩くことはほんとうにもう幾月ぶりか分らなかつた。弘が学校から帰って来て、父と母とが手を携えて出たことを聞いたら、自

分が置いて行かれたのを淋さびしがるよりも、実はどんなに喜ぶであろう。——しかし要かなめは、それが子供にいい事だか悪い事だか判断に迷った。ぜんたい「子供々々」と云うが、既に十歳以上になれば、氣の廻り方は格別大人と変ったことはないのである。彼は美佐子が、「外の者は氣が附かないのに、弘は知っているらしいんですよ、とても敏感なんですから」と云つたりするのを、「そんなことは子供としては当り前だよ。それを感心するなんかは親馬鹿と云うもんだ」と、そう云つて笑うのが常であつた。それ故ゆゑ彼は、いざと云う時は大人に対すると同じように、すべての事情を子供に打ち明ける覺悟をしていた。父も母も、孰方どっちが悪いと云うのではない、もしも悪いと云う者があれば、それは現代に通用

しない古い道德とらに囚とらわれた見方だ、これからの子供はそんなことを耻はじてはいけない、父と母とがどうなるうともお前は永久に二人の子だ、そうしていつでも好きな時に父の家へも母の家へも行くことが出来る、——彼はそう云う風に話して子供の理性に訴えるつもりでいた。それを子供が聴き分けない筈はないと思つた。子供だからと云つていい加減なうそをつくのは、大人を欺あざむくのと同じ罪悪だと考えていた。ただ万一にも別れないで済む場合が想像せられるし、別れるとしてもまだその時機がきまつたと云う訳ではないので、成るべくならば余計な心配をさせたくない、話はいつでも出来るのだからと、そう思い思いつい延び延びになつてゐる結果は、やはり子供を安心させたさに惹ひき擦ずられて、喜ぶ顔

が見たいために妻と馴れ合いで睦ましい風を装うこともあるのである。しかし子供は子供の方で、二人が馴れ合いで芝居をしていることまでも感づいて、なかなか気を許してはいないらしい。うわべはいかにも嬉しそうにして見せるけれども、それも事に依ると親たちの苦慮を察して、子供の方があべこべに二人を安心させようと努めているのかも知れない。子供の本能と云うものはそう云う時に案外深い洞察力を働かすもののように思える。だから要は親子三人で散策に出ると、父は父、母は母、子は子と云う風に、三人が三人ながらバラバラな気持を隠しつつ心にもない笑顔を作っている状態に、我から慄然りっぜんとすることがあった。つまり三人はもうお互いに欺かれぬ、夫婦の馴れ合いが今では親子の馴

れ合いになり、三人で世間を欺いている。——なんで子供にまでそんな真似まねをさせなければならぬのか、それが彼にはひとしお罪深く、不憫ふびんに感ぜられるのであった。

彼はもちろん自分たちの夫婦関係を新道德の先駆者のような態度を以て社会へ触れ廻る勇氣はなかつた。自分の行っていることには多少の恃たのむところもあり、良心に耻じる点はないのであるから、まさかの場合には敢然として反抗しないものでもないが、そうかと云つて、強しいて自分を不利な立ち場に置きたくはなかつた。父の代ほどではないにもせよまだ幾らかの資産もあり、名義だけでも会社の重役という地位もあり、かつかつながら有閑階級の一員として暮して行くことの出来る身として、なるべくならば社会の隅すみ

に小さく、つつましく、あまり人目に立たないように、そして先祖の位牌いはいにも傷をつけないようにして安穩あんのんに生きて行きたかった。仮りに自分は親戚なぞの干渉を恐れるところはないにしても、自分より一層誤解され易い妻やすの立ち場を庇かばってやらなければ、結局夫婦は身動きが取れなくなる。たとえばこの頃の妻の行為があのままに京都の父親にでも知れたら、いかに物分りのいい老人でも世間の手まえ娘ふらちの不埒ふらちを許しては置けないであろう。もしそうなれば彼女は要と別れたとしても、思い通りに阿曾の所へ行けるかどうかも疑問である。「親や親類の圧迫なんかあたしちつとも恐くはないわ、みんなに義絶されたって構わない積りです。ですから」と、いつもはそう云っているけれども、事実そんなこ

とが出来るかどうか。彼女について事前に悪い噂うわさが立てば、阿曾の方にも親や兄弟がある以上、そう云う方面からの故障も予想せられた。そればかりでなく、母が日蔭者のようになっては、それが子供の将来に及ぼす影響も考えなければならぬ。要はいろいろの事情を思うと、別れた後にも互が幸福に行けるようにするには、余程上手に周囲の人たちの理解を求める必要があるので、平素から用心深く世間に気取られないようにしていた。夫婦はそのために少しずつ交際の範囲を狭くし、努めて牆かきの内を覗のぞかれないようにさえした。が、それでも矢張対社会的に夫婦らしさを装わなければならぬ場合が生じて来ると、いつもあんまり好い心持はしないのであった。

思うに美佐子がさつきから変に出涉っていたのも、一つはそれが厭いやなのであろう。気の弱い性質なのではあるが、何処か奥の方にカチリと堅い芯しんを持っている彼女は、古い習慣とか、義理とか、情実とか、そう云うものに対してはむしろ要よりも勇敢であつた。彼女は夫と子供のため出来るだけ慎しんではいるものの、しかも今日のような時に進んで人の前へ出てまで芝居をするには及ばないと云う風な、かすかな不平を抱いだいているに違ちがいなかつた。なぜなら彼女にしてみれば己おのれを欺あざむき世を欺あざむくのが不愉快であるばかりでなく、阿曾の感情をも考えなければならぬからだつた。阿曾も事情は認めているにしろ、彼女が夫と道頓堀へ出かけたと聞いたらとにかく愉快である筈はない。真しんに己やむを得ない場合の外

は、そう云うことは遠慮して欲しいに違いない。夫はそこまでの
 思いやりがないのか、察していてもそんなことにまで気がねをし
 てはいられないと云う腹なのか、そうとはつきり口へ出しては云
 えないだけに彼女はもどかしく感ずるのであった。夫は何故に今
 ごろになつて老人の機嫌を取ろうとするのか。彼女の父が夫に取
 つても永久に父であり得るならば知らぬこと、もう近ちかぢか々に「父」
 と呼ぶことも出来なくなるのに、それを今更附き合つたところで
 無益ではないか。なまじ孝行の真似などをすれば後で事実が知れ
 た時に一層怒らせるようなものではないか。

夫婦はそんなふうに別々の心を抱いて阪急の豊中から梅田行きの
 電車に乗つた。三月末の彼岸ひがんぎくらが綻ほころびそめる時分のこと、

きらきらしい日ざしの底にまだ何処となく肌寒さが感ぜられたが、要はうすい春外がいと套たもとの袂たもとの外へこぼれている黒八丈の羽織きじの生地きじが、窓の明りで干潟ひがたの沙すなのように光るのを見た。和服の時は寒中でもシャツを着けないのを身だしなみの一つにしている彼は、長襦袢はらの裏と皮膚とのあわいに清涼な風の孕はらむのを覚えながら内ぶところへ両手を入れていた。車の中は時間が半ばであるせいまばか疎まばらな客がめいめいゆつくりと席を取り、真新しい白ペンキの天井の下は空気が隅まで透とおき徹とおつていて、並んでいる人たちの顔までが皆健康そうに、朗らかに明るい。美佐子はそれらの顔の中にわがと夫と向い側にかけて鼻のあたまを毛皮の襟巻みなわのふかふかとした中へ埋める程にして、縮刷本の水沫集みなわを読んでいるのである。

買立の白クロースの、ブリキのようにピンと尖った表紙の背を掴つかんでいる指には網目に編んだサファイア色の絹の手袋が簾はまつていて、こまかい網の目の隙間すきまから、研みがかれた爪がチラチラと覗のぞいていた。

電車の中で彼女がこう云う位置を取るの、それが殆どほとん二人で外出する時の習慣のようになっていた。子供がいればその右左へかけるけれども、そうでなかったら大概の場合、一人が腰をおろすのを待って一人が反対の側の方へ席を求め。夫婦は互きぬに衣きぬを隔むしてて体温を感じ合うことが窮屈であるばかりでなく、今では寧ろしてはならないことのように、不道德なようにさえ思うのである。そして一つの車室のうちは向い合って置かれるだけでも相手の顔

が邪魔になるので、美佐子はいつも眼の向けどころを作るために何かしら読む物を用意していて、席がきまると直ぐに自分の鼻先へ屏風びようぶを立ててしまうのである。二人は梅田の終点で降りて別々に持っている回数券を渡して、申し合わせたように二三歩離れて歩きながら駅の前の広場へ出ると、夫が先に、妻がその後から黙ってタキシューの箱の中へ収まって、始めて夫婦らしく肩を並べた。もし第三者が四つのガラス窓の中に閉じ込められた彼等を見たなら、二つの横顔が額と額と、鼻と鼻と、頤あごと頤とを押絵のように重なり合わせて双方が脇眼をふることなく、じつと正面を切ったままで車に揺られつつ行くさまに気づいたであろう。

「何をやっているんですの、一体？」

「ゆうべの電話では小春治兵衛と、それから何だとか云っていた
つげが、……………」

互に長い沈黙に押し出されたような工合に、一と言ずつ口をきいた。けれども矢張正面を切つたままだつた。妻には夫の、夫には妻の、鼻の頭あたまだけが灰白ほのしろく映つた。

弁天座のありかを知らない美佐子は、戎橋えびすばしで乗り物を捨ててから再び黙つて附いて行くより外はなかつたが、夫は電話で委くわしく教わつたものと見えて、道頓堀のとある芝居茶屋を訪ねて、そこから仲居に送られて行くのである。いよいよ父の前へ出て妻の役目をしなければならぬ、そう思うと彼女は一層気が重くなつた。土間へ陣取つて娘よりも若いお久を相手に、杯のふちをなめ

ては舞台の方を見入っている年寄りの姿が眼に浮かんだ。父もうつとうしいけれども、それよりお久がいやであつた。京都生れのおつとりとした、何を云われても「へいへい」云つている魂のなような女であるのが、東京ツ児の彼女と肌が合わないせいもあるであらう。が、お久と云うものを傍へ置そばくとき、父が何だか父らしくなく、浅ましい爺じじいのように見えて来るのがこの上もなく不愉快なのである。

「あたし一と幕だけ見たら帰るわよ」

と、彼女は木戸口を這はい入りながら、そこまでびんびんと響いて来る時代後おくれな太棹ふとざおの余韻に反抗するような気持で云つた。

茶屋の女に送られて芝居小屋へ来ると云うことが、既に何年ぶり

であろう。要は下駄を脱ぎ捨てて足袋の底に冷めたい廊下のすべ
 すべした板を踏ふんだとき、一瞬間遠い昔の母のおもかげが心をか
 すめた。蔵くらまえ前の家から俾くるまの上を母の膝に乗せられて木挽こびきちよう町へ
 行つた五つか六つの頃、茶屋から母に手を曳ひかれて福草履を突つ
 かけながら、歌舞伎座の廊下へ上るときがちようどこんな工合で
 あつた。子供の彼は矢張足袋の底に冷めたい板の間を踏んだ。そ
 う云えば旧式の芝居小屋は木戸口をくぐつた時の空気が妙に肌寒
 い。いつも晴れ着の裾たもとや袂たもとからすうツと風が薄荷はっかのように体しへ沁
 みたのを未いまだに記憶しているが、その肌寒さはあたかも梅見頃の
 陽気さわの爽やかさに似てぞくぞくしながらもこちよく、「もう幕
 が開いているんですよ」と母に促がされて小さな胸をときめかせ

つつ走って行ったものであった。

けれども今日の寒さばかりは廊下よりも客席の方がひとしおで、夫婦は花道を伝って行くときに何とは知らずに手足が引き締まるような気がした。見わたしたところ、小屋は相当の広さであるのに四分通りしか入りがないので、場内の空気は街頭を流れるすうすうした風と変りがなく、舞台に動いている人形までが首をちぢめて、淋しく、あじきなく、見るから哀れに、それが太夫たゆうの沈んだ声と三さん絃げんの音色ねいろとに不思議な調和を保っていた。殆ど平土間ほとんの三分の二まではガラあ空きになっていてほんの舞台に近い方がかたまっている中に、顱ろちようぶ頂部の禿はげた老人の頭とつやつやしいお久の円まるまげ鬚まげとが遠くの方から眼についていたが、渡りを渡つ

て降りて来る二人にお久はそれと心づくつと、

「お越しやす」

と小声で云いながら居ずまいを直して、場を塞いでいる蒔絵まきえの提ふさげ重を、一つ一つ丁寧に積み重ねて自分の膝の前に寄せた。

「お越しやすたえ」

美佐子のために老人の右の席をあけて、自分ほうしるかしこに畏まつているお久は、そう云つて耳打ちをしたけれども、老人はちよつと振り返つて、

「やあ」

と云つたきり、一心に舞台の方へ首を伸べていた。何と云う色か、緑系統には違いないが、ちようど人形の衣裳のように派手で渋い

ところのある色合いの、昔の人が十徳じつとくにでも着そうな石摺いしずりの羽織をぼつてりと着込んで、風通ふうつう大嶋おおしまの袷あわせの下に黄八丈の下着を見せ、袂の中から升ますのしきりへ肘ひじをついている左の腕をそのまま背中へ廻しているの、自然と抜き衣紋えもんになつていて、ためか猫背が一層円々と見える、——着附きつけと云い、姿勢と云い、そう云う爺じじくさ臭い風をするのがこの老人の好みであつて、「老人は老人らしく」と云うのを口癖くちべしのようにしているのである。思うにこの羽織の色合いなども「五十を過ぎたら派手なものを着る方が却かえつてふけて見える」と云う信条を、実行しているつもりなのであらう。要が常に滑稽こっけいに感じるのは、「老人々々」と云うもののこの父親はまだそれほど歳のではない、二十五とかに結婚して、

今は亡なくなつたその連れ合いが長女の美佐子を生んだとすると、恐らく五十五六より取つてはいない筈である。父の性慾はまだ変形していないと云う美佐子の観察はそれを裏書きするもので、

「お前のお父さんの老人ぶるのは、あれは一つの趣味なんだよ」と、彼もかねがね云つていたのである。

「奥おく様、おみあが痛いことおへんか？ どうぞ此方こつちへお出しやして、……」

気のいいお久は窮屈な升の中でまめまめしく茶を入れたり、菓子すすめたり、何を云つても振り向きもしない美佐子を相手にと きどき話しかけたりして、その合い間には、うしろへ右の腕を伸ばして煙草盆の角に載せられた杯のふちへ手をかけている老人に、

なくなる頃を見はからつてはそうつと酒を注いでやっている。老人は近頃「酒は塗り物に限る」と云い出して、その杯も朱塗りに東海道五十三次の蒔絵のある三つ組のうちの一つであった。御殿女中が花見にでも行くようにこう云うものを研ぎ出しの提げ重の抽出しへ入れて、飲み物から摘まみ物までわざわざ京都から運んで来るのでは、茶屋に取つても有り難くない客であろうが、お久もずいぶん気骨が折れるに違いあるまい。

「お一つどうぞす？」

そう云つて彼女は、新たに抽出しから出した杯を要にさした。

「有り難う、僕は昼間は飲まないんだが、………外套を脱いだら何だかうすら寒いから、少うしばかり戴きましよう」

髪かみの油か、何か分らないが、忍びやかな丁ちようじ子このにおいに似たものが、彼女の鬢びんの毛けと共にかすかに彼の頬ほおにさわった。彼は己おのれの手の中にある杯さかずきの、なみなみと湛たえた液体たいていの底そこに金色きんいろに盛り上あっている富士ふじの絵えを視み詰めめた。富士ふじの下したには広ひろ重しげ風の町まちの景色けいせきの密画みつががあつて、横よこに「沼津ぬまづ」と記ししてある。

「これで飲ひんだら、品ひんが好このすぎて頼たのりないような気がきがしますね」
 「さうどすやろ」

彼女かのじよが笑わらうと、京都きよとの女おんなが愛あいらしいものものの一つひとつに数かずえる茄子なす齒びばが見みえた。二枚ふたまいの門かど齒かみの根ねの方が鉄漿かねを染そめたやうに黒くろく、右みぎの犬いぬ齒かみの上うへに八重やえ齒かみが一つ、上うわ唇くちびるの裏うらへ引ひつかかるほどほどに尖とつていて、それをあどけないと云いう人もあろうが、公平くわいひんに云いえば決かし

て美しい口もとではない。不潔で野蛮な感じがすると云う美佐子の批評も酷だけれども、そう云う非衛生的な歯を治療しようともしないとところに無智な女の哀れさがあつた。

「この御馳走は家から^{こしら}掬^えて来るんですか」

要は彼女が小皿の上へ取ってくれる玉子焼の^{のりまき}海苔巻をつまみながら云つた。

「そうです」

「こんな重箱を提げて来るんじや大変だな、又帰りにはこいつを持って行くんですか」

「そうです、芝居のものは味のうてよう食べんお云やすよつて、

……………」

美佐子がちらと二人の方を振り返ったが、すぐまた顔を舞台に向けた。

要はさつきから、彼女がときどき足を伸ばしては、足袋の先が夫の膝頭に触れると急いでそれを引つ込めるのに気が付いて、こう云う狭い升の中に入れられた自分たち夫婦の人目を忍ぶ心づかいを、ひそかに自ら苦笑しないではいられなかった。彼はその氣持まぎを紛らすために、

「どうだい、面白いかい？」
と、うしろから妻に声をかけた。

「いっつも面白いものをたんと見ておいでやすよって、たまには人形もよろしおすやろ」

「あたしきつきから義太夫語りの顔つきばかり見ているの、あの
方がよつぽど面白いわ」

その話ごえが耳につくらしく、

「えへん」

と、老人が咳せきばら払いした。そして眼だけは舞台から放さずに、手
さぐりで膝の下敷きになつた猿手ざるでの金唐革きんからかわの煙草入れを捜しあ
てたが、煙管きせるのありが分らないでしきりにその辺まを間さぐつて
いるのを、気がついたお久きくが座布団ざぶとんの下から見つけ出して、火を
つけてから手のひらの上へ載せてやつて、自分も思い出したよう
に帯の間にある紅い琥珀こはくの吹かますを抜き取ると、こはぜの附いた蓋ふたの
下へ白い小さな手の甲を入れた。

成るほど、人形浄瑠璃じょうろうりと云うものは妾めかけの傍そばで酒を飲みながら見るもんだな。——要はみんなが黙り込んでしまったあと、ひとりそんなことを考えながら仕様ことなしに舞台の上の「河庄」の場へ、ほんのりと微醺びくんを帯びた眼を向けていた。普通の猪口ちよくよりやや大ぶりな杯に一杯傾けたのが利きいて来て、少しちらちらするせいか、舞台がずっと遠いところにあるように感ぜられ、人形の顔や衣裳の柄を見定めるのに骨が折れる。彼はじいっと瞳ひとみを凝らして、上手にすわっている小春を眺めた。治兵衛の顔にも能の面に似た一種の味わいはあるけれども、立って動いている人形は、長い胴の下に両脚がぶらんぶらんしているのが見馴れない者には親しみにくく、何もしないでうつむいている小春の姿が一番うつ

くしい。不釣合ふつりあいに太ふい着物の袴ふきが、すわっていないながら膝の前へ垂れているのが不自然であるが、それは間もなく忘れられた。老人はこの人形をダークの操あやつりに比較して、西洋のやり方は宙に吊つっているのだから腰がきまらない、手足が動くことは動いても生きた人間のそれらしい弾力やねばりがなく、従って着物の下に筋肉が張り切っている感じがない。文楽の方は、人形使いの手がそのまま人形の胴へ這入はいっているのです、真に人間の筋肉が衣裳の中で生きて波打っているのである。これは日本の着物の様式を巧みに利用したもので、西洋でこのやり方を真似まねようにも洋服の人形では応用の道がない。だから文楽のは独得であつて、このくらいよく考えてあるものはないと云うのだが、そう云えばそうに違

いない。立つて激しく活動をする人形がへんに不恰好ぶかつこうなのは、
 そうすると下半身が宙に浮くことを防ぎきれないで、いくらかダ
 ークの操りの弊に陥るからであろう。老人の議論を押し詰めて行
 くと、矢張据わっている時の方がねばりの感じが表わせる訳で、
 動くとしても肩でかすかな息をするとか、ほのかなしなを作ると
 か、ほんの僅わずかに動くしぐさが却って不気味なくらいにまで生き
 生きとしている。要は番附けを手を取って、小春を使っている人
 形使いの名を搜した。そうしてこれがその道の人に名人と云われ
 ている文五郎であるのを知った。そう思つて見ると、いかにも柔
 和な、品のいい、名人らしい相をしている。絶えず落ち着きのあ
 るほほえみを浮かべて、我が児をいつくしむような慈愛のこもつ

たまなごしを手を抱いている人形の髪かたちに送りながら、自分の芸を楽しんでいる風があるのは、そぞろにこの老芸人の境涯の羨ましさを覚えさせる。要はふとピーターパンの映画の中で見たフェアリーを想い出した。小春はちようど、人間の姿を備えて人間よりはずつと小さいあのフェアリーの一種で、それが肩衣かたぎぬを着た文五郎の腕に留まっているのであった。

「僕には義太夫ぎだゆうは分らないが、小春の形はいいですな」

——半分ひとりごとのように云ったのが、お久には聞えた筈だけれど、誰も合い槌づちを打つ者もない。視力をはつきりさせるために要はたびたび眼ばたきをしたが、一としきり身の内のぬくまった酔いがだんだん醒さめて来るにつれて、小春の顔が次第に刻明な

輪^{りんかく}廓を取つて映つた。彼女は左の手を内ぶところへ、右の手を火鉢にかざしながら、襟^{えり}の間へ頤^{あご}を落して物思いに沈んだ姿のまま、もうさつきから可なりの時間をじつと身動きもしないのである。それを根気よく視つめていると、人形使いもしまいには眼に入らなくなつて、小春は今や文五郎の手に抱かれているフエアリ―ではなく、しつかり畳に腰を据えて生きていた。だがそれにしても、俳優^{ふん}が扮する感じとも違う。梅幸や福助のはいくら巧くても「梅幸だな」「福助だな」と云う氣がするのにな、この小春は純粹に小春以外の何者でもない。俳優のような表情のないのが物足りない^りと云えば云うものの、思うに昔の遊里の女は芝居でやるよ^うな著しい喜怒哀樂を色に出しはしなかつたであろう。元^{げん}禄^{ろく}の

時代に生きていた小春は恐らく「人形のような女」であつたらう。事實はそうでないとしても、とにかく浄瑠璃を聴きに来る人たちの夢みる小春は梅幸や福助のそれではなくて、この人形の姿である。昔の人の理想とする美人は、容易に個性をあらわさない、慎しみ深い女であつたのに違いないから、この人形でいい訳なので、これ以上に特長があつては寧ろ妨げになるかも知れない。昔の人は小春も梅川うめがわも三勝さんかつもおしゆんも皆同じ顔に考えていたかも知れない。つまりこの人形の小春こそ日本人の伝統の中にある「永遠女性」のおもかげではないのか。……

十年ほど前に御ご霊りょうの文楽座を覗いた時には何の興味も湧わかなかつた要は、ただその折にひどく退屈した記憶ばかりが残っていた

ので、今日は始めから期待するところもなく義理で見物に来たのであるのに、知らず識しらず舞台の世界へ惹き込まれて行く自分を見ることは意外であつた。十年のあいだにやっぱり歳を取つたんだなど、思わずにはいられなかつた。この調子だと京都の老人の茶人ぶりも馬鹿には出来ない。更に十年も立つうちには自分もそつくりこの老人の歩んだ道たどを辿るようになるのではないか。そしてお久のような妾を置いて、腰きんにからかわ金唐革の煙草入れを提げ、蒔絵の弁当箱を持って芝居見物に来るようなふうに、……いや事に依ると十年を待たないかも知れない。自分は若い時分から老成ぶる癖があつたから、人一倍早く年を取る傾向があるのだ。――

――要は下しもぶく膨れの頬を見せているお久の横よこびん鬚と、舞台の小春と

を等分に眺めた。いつもは眠いような、ものうげな顔の持ち主であるお久の何処やらに小春と共通なもののあるのが感ぜられた。

同時に彼の胸の中に矛盾した二つの情緒がせめいだ、——老境に入ることは必ずしも悲しくはない、老境には老境でおのずからなる楽しみがある、と云う気持と、そんなことを考えるのが既に老境に入ろうとする兆^{きざし}だ、夫婦別れをしようと云うのは、自分も美佐子ももう一度自由に復^{かえ}つて、青春を生きようたためではないのか、今の自分は妻への意地でも年を取ってはならない場合だ、と云う気持と。——

その三

「ゆうべはわざわざ電話を戴きまして有り難う存じました。……

……」

幕あいになるとぐるりと此方こつちへ向きを変えた老人に、要は改めて
 挨拶あいさつしながら、

「お蔭さまで今日はまことに面白うございます。全くお世辞でなく、いい所がありますな」

「私が人形使いじゃあないからお世辞を云われる事はないがね」
 と、老人は女物の古裂こぎれで作った色のさめたお納戸なんどちりめん縮緬えりまきの襟巻
 の中へ寒そうに首をちぢめて、やに下った形で云った。

「まあ、あなたがたを誘ってもどうせ退屈だらうけれど、しかし

一遍は見て置くといいと思っただんで、……………」

「いいえ、なかなか面白いですよ、この前見た時とはまるで感じが違うんで、非常に思いの外なんです」

「もうお前さん、今あの治兵衛だの小春だのを使った おおあたまかぶ 大頭株

の人形使いがいなくなったら、どうなるか分りやしないんだから、……………」

美佐子はそろそろお談義が初まったと云うように下唇で薄笑いを か 噛みしめながら、てのひらの間にコムパクトを隠してパツフで鼻をたたいていた。

「こう入りがないのは気の毒なようですが、日曜や土曜にはまさかこんなでもないんでしょうか」

「なあに、いつでもこんなもん、………これで今日きょうらは来ている方です。ぜんたいこの小屋じゃあ広過ぎるんで、先せんの文楽座ぐらいの方が、小ぢんまりしていいんだけど、………」

「あれは再築を許可されないらしいですね、新聞で見ますと」

「それより何より、この客足じゃあ引き合わないから松竹が金を出しやあしない。こんな物こそむずかしく云うと大阪の郷土芸術なんだから、誰か篤志家が出て来なけりやあならないんだが」

「どう、お父さんがお出しになつたら？」

と、横あいから美佐子が交まぜつ返した。老人は真顔で受けながら、「私は大阪人じゃあないから、………これはやつぱり大阪人の義務だと思ふよ」

「でも大阪の芸術に感心していらっしやるんじゃないの？ まあ大阪に降参しちやつたようなもんだわ」

「お前はそうすると西洋音楽に降参の口かね？」

「そうとも限らないんだけど、あたし義太夫と云うものはイヤなの、騒々しくって。——」

「騒々しいと云やあこの間或る所で聴いたんだが、あのジャズ・バンドと云うものは、ありやあ何だい？ まるで西洋の馬鹿ばや騒しだが、あんなものが流行はやるなんて、あれなら昔から日本にもある。—— テケレツテ、テットンドンと云う、つまりあれだ」

「きっと低級な活動小屋のジャズでもお聴きになったんじゃないの」

「あれにも高級があるのかい？」

「あるわ、そりやあ、……：ジャズだつて馬鹿になりやしないわ」
 「どうも今時の若い者のすることは分らんよ。第一女が身だしなみの法を知らない。たとえばお前のその手の中にあるのは、そりやあ何というもんだね」

「これ？ これはコムパクトというもんよ」

「近頃それが流行るはやのはいいが、人中でも何でも構わずそれを開けて見ては顔を直すんだから、ちつとも奥床しさというものが無い、お久もそいつを持っていたんでこの間叱しかつてやったんだがね」
 「でもこれは便利なもんよ」

と美佐子はわざと悠ゆうゆう々と明るい方へ小さな鏡を向けながら、キ

ツス・プルーフを唇へあてて丹念に紅を引いた。

「それ、その恰好がよくないよ。堅儀な娘や女房はそう云う形を人前で見せなかつたもんだがね」

「今は誰でも見せるんだから仕方がないわ。わたしの知っている奥様で、会の時にテーブルへ着いてからきつとコムパクトを持ち出すんで有名な人があるくらいだわ。お皿が眼の前に出ているのを其方除けにして顔を直しているもんだから、その人のお蔭でコースがちつとも^{はかど}捗らないの、ああなられても極端だけれど」

「誰だい、それは？」

と、要がきいた。

「中川さんの奥様、——あなたの知らない方」

「お久、ちよつとこの火を見ておくれ。——」

と、老人は下腹から懐炉かいろの包みを取り出して、

「小屋が広いのに入りがないせいか、どうも冷えてかなわない」と、つぶやくように云った。お久が懐炉灰の火を直すので、手が塞すきがっている隙すきに、要は氣を利かして、

「いかがです、胃袋の方へもう少し懐炉をお入れになつたら」と、これも御持参の錫すずの銚ちようし子を取り上げて云った。

舞台の方ではもう次の幕が開きそうなけはいなのに、夫がのんきらしく、キツカケを作ってくれないので、美佐子はさつきからじりじりしてゐた。出がけに須磨から電話があつたとき、彼女は実は「自分はちつとも氣が進まないのだから、芝居の方は成るだけ

早く切り上げる。そして出来たら七時頃までに会いに行くようにする」と云つて置いたのである。尤も都合で分らないから、アテにしないでいてくれるとは云つたけれども、………

「明日^{あした}一日、きつと此^{ここ}処が痛いだろうと思つてわ」

彼女は膝頭を揉^もんで見せた。

「幕が開くまでそこに腰かけていたらいい」

そう云いながら夫が眼交ぜで、「まあ、今直ぐ帰るとも云いかねるから」と訴えているらしいのが分ると、それが何がなしに癩^{かん}に触れてならなかつた。

「廊下をひと廻り運動して来たらどうかね」と、老人が云つた。

「廊下に何か面白いものでもあつて？」

半分皮肉に云いかけてから、彼女は冗談に紛らしながら、

「あたしも大阪の芸術には降参しちやつたわ。たった一と幕だけでお父さん以上に降参したわ」

「ふふ」

と、お久が鼻の奥で笑つた。

「どうなさる？ あなた、——」

「さあ、僕は孰方どっちでもいいんだが、………」

要の方は要の方で、例のあいまいな返辞をしながら、今日に限つてそうしつツこく「帰る帰らない」を問題にする妻の態度に、淡い不満を蔽おほい隠すことが出来なかつた。自分も彼女が長居をした

くないことは知っている、云われなくても潮時を見て器用に切り上げるつもりだけれども、折角呼ばれて来ているものを、せめて父親の手前だけは機嫌きげんよくして、夫の処置そちに任せてくれたら、——それくらいは夫婦らしく、気を揃そろえてくれたらいいのに。

「今からだ、ちようど時間の都合もいいし、——」
彼女は夫の顔色には頓とんじやく着やくなく、七宝しっぽう入りの両りようぶた蓋たの時計をキラリと胸のところところで開いた。

「来たついでだから、松竹へ行つて御覧ごらんにならない？」

「まあお前、要まさんは面白おもしろいと云うんだから、——」
と、老人は何処どこかだだツ兎うじみた感じの現れる気短まゆかそうな眉まゆを寄よせた。

「——そう云わないでもう少し付き合ったらいいだろうに。松竹なんか又出直しても済むんだから」

「ええ、要が見たいって云うのなら見てもいいんですけれど」

「それにお前、お久がゆうべからかかって弁当を^{こしら}えて来たんだから、そいつをたべて行っておくれ。こんなにあつちやあ私たちがじゃあたべ切れやしない」

「何お云やす、わざわざ上っていただくほどおいしいことおへんえ」

三人の言葉の取りやりを子供が大人の傍にいるように無関係に聞き過していたお久は、そう云つてきまり悪そうに、はすかいに載っていた組重の蓋を直して、四角な入れ物へモザイクのように詰

まっている色どりを隠した。が、高野豆腐を一つ煮るのにもなかなか面倒な講釈をする老人は、この歳の若い妾を仕込むのに煮焚きの道をやかましく云って、今ではお久の料理でなければ口に合わないと云うほどなので、それを二人に是非ともたべさせたいのであった。

「松竹はもう遅いだろう。明日あしたにおしよ」

と、要は「松竹」と云う中へ「須磨」を含ませて云った。

「まあもう一と幕見て、お久さんの心づくしを戴いてからの都合にしようよ」

けれども妙に間が合わなくなった夫婦の気持は、二た幕目の「治兵衛内の場うち」を見ている内に一層変にさせられてしまった。たと

い人形の演ずる劇であり、奇怪な誇張に充ちている浄瑠璃の物語であるとは云え、治兵衛とおさんとの夫婦関係には、二人がそつと相顧みて苦笑を余儀なくするものがあつた。要は、「女房のふところには鬼が栖すむか蛇じゃが栖すむか」と云う文句を聞くと、それがいかにも性慾的めおとにかけ離れてしまつた女夫の秘事を婉えんきよく曲まがながら適切に現わしているのに気づいて、暫しばらく胸の奥の方が疼うずくのを感じた。彼は義太夫の「天てんの網あみ島しま」は巢そうりんし林子の原作でなく、半二か誰かの改作であるのをぼんやり記憶していたが、きつところの文句は原作の方にあるのだろう、老人が浄瑠璃の文章を褒ほめて「今の小説なんかとても及ばない」と云っているのは、こう云うところを指すのだろうと思うと、ふと又気がかりなことが浮かん

だ。今にこの幕が済んだあとで、老人がこの文句を持ち出しはしないか。「鬼が栖むか蛇が栖むかとは、昔の人は実にうまいことを云ったもんだね」と、例の口調で皆に同感を求めはしないか。この場合を想像すると居たたまらないような気がして、やっぱり妻の云うことを聴いておけばよかつたと思つた。

しかし一方、ややともするとその不愉快を打ち忘れて、再び舞台の表現にうつとりさせられる瞬間があつた。前の幕ではひとり小春の姿にばかり心を惹かひれたのに、今度の幕では治兵衛もよし、おさんもいい。紅殻塗りの框かまちを見せた二重の上で定規じようぎを枕まくらに炬燵こたつに足を入れながら、おさんの口説くどきをじつと聞き入っている間の治兵衛。——若い男には誰しもある、黄昏たそがれ時の色町の灯

を恋いしたうそこはかとなない心もち。——太夫の語る文句の中に夕暮の描写はないようだけれども、要は何がなしに夕暮に違いないような気がして、格子の外の宵闇にこもり蝙蝠の飛ぶ町のありさまを、——昔の大阪のあきゆうど商人町を胸にえがいた。風ふう通か小紋ちりめんのようなものらしい着附を着ているおさんの顔だちが、人形ながら何処か小春に比べるとさび淋しみが勝つてあでやかさに乏しいのも、そう云う男にうとまれる堅儀な町女房の感じがある。そのほか舞台一杯に暴れ廻る太兵衛も善六も、見みな馴れたせいかな脚のぶらんぶらんするのが前の幕ほど眼ざわりでなく、だんだん自然に見えて来るのも不思議であった。そしてこれだけの人間が、ののし罵り、わめ喚き、いが唾み、あざけ嘲るのが、——太兵衛の如きは大声を上げ

てわいわいと泣いたりするのが、——みんな一人の小春を中心にして、その女の美しさが異様に高められていた。成るほど義太夫の騒々しさも使い方に依つて下品ではない。騒々しいのが却つて悲劇を高揚させる効果を挙げている。……要が義太夫を好まないのは、何を措おいてもその語り口の下品なのが厭いやなのであつた。義太夫を通じて現れる大阪人の、へんにずうずうしい、臆面のない、目的のためには思う存分な事をする流儀が、妻と同じく東京の生れである彼には、鼻持ちがならない気がしていた。ぜんたい東京の人間は皆少しづつはにかみ屋である。電車や汽車の中などで知らない人に無遠慮に話しかけ、甚はなはだしきはその人の持ち物の値段を聞いたり、買った店を尋ねたりするよう

な大阪人の心やすさを、東京人は持ち合わせない。東京の人間は
 そう云うやり方を不作法であり、無^{ぶしつけ}躰であるとする。それだけ
 東京人の方がよく云えば常識が円満に発達しているのだが、しか
 しあまり円満に過ぎて見えとか外聞とかに囚^{とら}われる結果は、いき
 おい引つ込み思案になり消極的になることは免^{いと}れられない。とに
 かく義太夫の語り口には、この東京人の最も厭^{いと}う無躰なところが
 露骨に發揮されている。いかに感情の激越を表現するのでも、あ
 ままでぶざまに顔を引き歪^{ゆが}めたり、唇を曲げたり、仰^のけ反^ぞつたり、
 もがいたりしないでもいい。ああまでにしなないと表わすことが出
 来ないような感情なら、東京人はむしろそんなものは表わさない
 で、あつさり洒^{しやれ}落にしてしまう。要は妻が長^{なが}唄^{うた}仕込みで、この

頃もよく人知れぬ憂さを紛らすために弾ひいているのが耳にあるせいか、まだあの冴さえた撥ぼちの音の方が淡いながらもなつかしく聞いている。老人に云わせると長唄の三味線は余程の名人が弾かない限り、撥が皮に打ぶつかる音ばかりカチャカチャ響いて、かんじんの絃の音色が消されてしまう。そこへ行くと上方の方は浄瑠璃でも地唄でも東京のように撥を激しく打つけない。だから余韻と円みがあると云うのだが、要も美佐子もこれには反対で、日本の楽器はどうせ単純なのだから、軽快を主とする江戸流の方が悪く毒々しい力がないだけ、邪魔にならないと云うのであった。そして夫婦は音おんぎよく曲きょくのことで老人を向うへ廻す時は、いつでも趣味が一致していた。

老人は二た言目には「今の若い者は」を口にして、西洋かぶれのしたものは何に限らずダークのあやつりと同じように腰がきまらない、うすつぺらだと云つてしまう。尤も老人の言い草には常に多少の掛け値があつて、一と昔前はそう云う御自身が齒の浮くよ
うなハイカラ振りに身を窶やつしていた時代もあるのだが、日本の樂器は単純だなどと云おうものなら躍起になつて得意のお談義が始まるのである。そうなる则要はつい面倒で好い加減に引き退つてしまふけれども、心のうちでは一概にうすつぺら扱いされるのに平らかでないものがあつた。彼は自分のハイカラは、今の日本趣味の大部分を占めている徳川時代の趣味と云うものが何となく氣に食わないで、その反感から来ていることは自分にはよく分つて

いながら、それを老人に納得させる段になると、何と説明したらいいか云い現わしように困るのであった。彼の頭の中にある漠然とした物足らなさは、つづめて云えば徳川時代の文明は調子が低い、町人が生んだものであるから、何処まで行っても下町情調が抜け切れない、と云うところにあるかも知れない。東京の下町に育った彼が下町の気分を嫌う筈はきざなく、思い出としてはなつかしいものに違いないが、一面には又、下町ツ児であるが故に土地のゆえ空氣が鼻に附いて卑俗な感じがする訳でもある。そう云う彼は反動的に、下町趣味とは遠くかけ離れた宗教的なもの、理想的なものをを思慕する癖がついていた。美しいもの、愛らしいもの、可憐かれんなものである以上に、何かしら光りがやかしい精神、崇高な感

激を与えられるものでなければ、——自分がその前にひざまず跪いて礼拝するような心持になれるか、高く空の上へ引き上げられるような興奮を覚えるものでなければ飽き足らなかつた。これは芸術ばかりでなく、異性に対してもそうであつて、その点に於いて彼は一種の女性崇拜者であると云える。もちろん彼は今までにそう云う恋愛なり芸術的感興なりを味わつたことはなく、ただぼんやりした夢を抱いだいていただけけれども、それだけひとしお眼に見えぬものに憧あこがれの心を寄せていた。そして西洋の小説や音楽や映画などに接すると、まだいくらかはその憧れが満たされるような気がした。と云うのは西洋には昔から女性崇拜の精神がある。西洋の男は己おのれの恋する女人の姿に希臘ギリシヤ神話の女神を見、聖母の像

を空想する。この心持が広くいろいろな習慣に付き纏まとつて、芸術の中にも反映しているせいであろうと、要はそんなふうを考え、その心持の欠けている日本人の人情風俗に云いようなない淋しさを覚えた。それでも仏教を背景にしていた中古のものや能楽などには古典的ないかめしさに伴う崇高な感じがないでもないが、徳川時代に降つて来て仏教の影響を離れば離れるほど、だんだん低調になるばかりである。西さいかく鶴や近松の描く女性は、いじらしく、やさしく、男の膝に泣きくずおれる女であつても、男の方から膝を屈して仰ぎ視るような女ではない。だから要は歌舞伎芝居を見るよりも、ロス・アンジェルズで拵こしらえるフィルムの方が好きであつた。絶えず新しい女性の美を創造し、女性に媚こびることは

かりを考えているアメリカの絵の世界の方が、俗悪ながら彼の夢に近かった。そして嫌いなものの中でも、東京の芝居や音曲にはさすが江戸人のきびきびとしたスマートな気風が出ているのに、義太夫は飽くまで太ふてぶて々ふてぶてしく徳川時代趣味に執着しているところが、到底ていば傍へも寄りつけないように思えたのであった。

それが今日はどう云う訳か最初に舞台を見入った時からそう反感を起すでもなく、自然にすらすらと浄曲の世界へいぎなわれて、あの重苦しい三絃の音までがいつとはなしに心のうちへ食い入って行くようなのである。そして落ち着いて味わって見ると、彼のきらいな町人社会の痴情の中にも日頃のあこがれを満たすに足るものがないでもない。暖簾のれんを垂らした瓦燈がとうぐち口に紅殻塗りの上り

框がまち、

——世話格子ごうしで下手を仕切ったお定まりの舞台装置を見る

と、暗くじめじめした下町の臭いに厭気いやげを催したものであったが、

そのじめじめした暗さの中に何かお寺の内陣に似た奥深さがあり、
厨子ずしに入れたられた古い仏像の円光のようにくすんだ底光りを放つ

ものがある。しかしアメリカの映画のような晴れ晴れしい明るさ
とは違って、うっかりしていれば見過してしまふほど、何百年も
の伝統の埃ほこりの中に埋まって侘わびしくふるえている光だけれども。

……

「さあ、どうぞす、お腹空すいてましたらたべとおくれやす、ほん
まに味のうおすけれど、……」

幕が終るとお久がそう云って重箱の物をめいめに取ってくれた

が、要はまだ眼にちらついている小春やおさんのおもかげに名残りを惜しまれる一方、老人のお談義が直きに例の「鬼が栖むか蛇が栖むか」へ落ちて行ききそうな形勢なので、幕の内を摘まむあいだも気が気でなかった。

「それではあの、戴き立ちで甚だ勝手はなはなんです、……」

「もう、お帰りやすか、ほんまに」

「僕はもつと見てもいいんですが、やっぱりちよつと松竹座へ行って見たいんだそうですから。……」

「そらなあ、奥様」

と、取りなすようにお久は云つて、老人と美佐子とを半々に見た。二人はそれをいいしおに、次の幕の口上が始まりかけたのを聞き

ながら、廊下までお久に送られて出た。

「あんまり親孝行にもならなかつたわね」

道頓堀の夜の灯の街へ吐き出されたとき、美佐子はほつとしたように云つて、それには答えず えびすばし 戎橋の方へ足を向けかけた夫を呼んだ。

「あなた、そつちじやあないことよ」

「そうか」

と、要は引つ返して にっぽんばし 日本橋の方へ、こころもち急ぎ足で行く彼女のとに追いつきながら、

「いや、あつちへ行つた方がいい車が拾えると思つたんだ」

「もう何時？」

「六時半だよ」

「どうしようかしら、……………」

妻は袂たもとから手袋を出して、それを箠はめながら歩いていった。

「行くならおいでな。行って行けないと云う時間でもない。……………」

……

「此処からだど、梅田から汽車で行った方が早いでしょうか」

「早いことを云やあ、阪急で行って上筒井かみついいから自動車の方がい

いだろう。——しかしそうすると、此処で別れてもいい訳なん

だな」

「あなたは？」

「僕は心齋橋筋をぶらついて帰る」

「じゃあ、……もしか先にお帰りになつたら、十一時に迎えに出ているように仰おつしやつて下さらない？　電話をかけるつもりだけれど」

「うむ」

要は妻のためを通りかかりのニュー・フォードを止めた。そしてガラスの窓の中に彼女の横顔が収まるのを見届けてから、再び道頓堀の人波の中へ引返して行つた。

その四

弘サン

学校ハイツカラ休ミデスカ、モウ試験ハ済ミマシタカ、僕ハチヨウド君ノ学校ガ休ミノ時分ニソチラヘ行キマス。

御土産^{みやげ}ハ何ニシヨウ。御注文ノ広東^{カントン}犬ハコノ間カラ搜シテイ

マスガナカナカ見ツカラナイ。同ジ支那^{しな}デモ上海^{シャンハイ}ト広東ト

ハマルデ国ガ違ウヨウニ離レテイマス、目下当地デハ「グレイハウンド」ガ流行デス、ソレデヨケレバ持ツテ行キマス、ドウイウ犬カ君ハ多分知ツテイルデシヨウガ、参考ノタメ「グレイハウンド」ノ写真ヲ此^{ここ}処ニ入レテ置キマス。

写真デ思イツイタガ写真機ガ欲シクハナイデスカ、「パテエ・ベビイ」ハイカガ？ 犬トドツチガイイカ、返事ヲ下サイ。オ父サンニハ約束ノ「アラビアン・ナイト」ガ「ケリー・ウォル

シユ」ニアツタカラ持つて行クト云ツテ下サイ、コレハ大人おとなノ
 読ム「アラビアン・ナイト」デス。子供ノ読ム「アラビアン・
 ナイト」デハアリマセン。

才母サンニハ緞子どんすト呉紹ごろうノ帯地ヲ持つて行クト云ツテ下サイ、
 ドウセ僕ノ才見立テダカラ例ニ依ツテ悪口ヲ云ワレルカモ知レ
 ナイ、君ノ犬ヨリコノ方ガ心配ダト云ツテ下サイ。

荷物ガ沢山持チキレナイホドアリマス、犬ヲツレテイタラ電報
 ヲ打ツカラ誰カ船マデ受ケ取りニ来テ下サイ。

大概二十六日ノ上海丸ノ予定デス。

高夏秀夫

斯波弘しばひろし様

その二十六日の午頃ひる、父につれられて出迎えに行つた弘は、船の廊下を尋ね廻つていち早く船室を捜しあてると、

「小父さん、犬は？」

と、真つ先にきいた。

「犬か、——犬は彼方あつちに置いてあるよ」

白っぽいホームスパンの上衣うわぎの下に鼠ねずみのスウエーターを見せて、

同じ鼠ねずみのフランネルのパンツを穿はいた高夏は、狭い室内で彼方あつち此方こち荷つちまとめをするあいだも絶えず葉巻を手から口へ、口から手へと持ち変えながら、そのために一層気ぜわしそうに働いていた。

「大分荷物が多いじゃないか、今度は幾日ぐらい居るんだ」

「今度は少し東京に用があるんだ、君ん所にも五六日はいるつもりだが」

「これは何だ」

「それは酒だ。——非常に古い紹興酒だと云うんだが、欲しければ一と瓶分けてもいい」

「その辺にある細かい物を寄越したらどうだい、じいやが下で待っているから、あれを呼んで持たしてやろう」

「犬は、お父さん？ 犬はどうするの？」

と、弘が云った。

「——じいやは犬を連れて行くんですよ、お父さん」

「なあに、おとなしい犬だから大丈夫だよ、弘君でも連れて行か

れるよ」

「^か噛まない？ 小父さん」

「絶対に噛まない、どんな事をしたって平気なもんだ。君が行つたら直ぐ飛び着いてお世辞を使うよ」

「何という名？」

「リンデー。——リンドバーグのことだよ、ハイカラな名だろう？」

「小父さんがお附けになつたの？」

「西洋人が持っていたんで、前からそんな名が附いていたのさ」

「弘」

要は、犬の話で夢中になっている子供を呼んだ。

「お前はちよつと下へ行つてじいやを連れておいで。ボーイだけでは手が足りないから」

「元氣じゃないか、見たところでは。——」

何か嵩張かさばつた重そうな包みを寢台の下からずるずる引きずり出しながら、出て行く弘のうしろかげへ眼をやつて高夏は云つた。

「そりや子供だから、元氣は元氣だが、あれでなかなか神経質になつてゐるんだ。手紙にそんなところはなかつたかね」

「なかつたね、別に」

「尤もつともそりやあ、まだどうと云つて形を取つた心配がある訳では

なし、子供としては何とも書きようはない筈はずだけれど、……」

「ただ最近、前より頻ひんぱん繁ばんに手紙を寄越すようになってはいた。

やっぱり何かしら淋さびしい気持ちでしたのかも知れない。……さて、これでよしと」

ほっとしたように高夏は寝台の端に腰をおろして、葉巻の煙を始めてふかふかと味わうのであった。

「じゃ、まだ子供には何も話してないんだね?——」

「うむ」

「そう云う点が君と僕とは考が違うな、いつも云うことなだけれど」

「もしも子供に尋ねられたら、僕は正直に云うだろう」

「だって、親の方から云わなかつたら、子供がそんなことを切り出せる訳がないじゃないか」

「だからつまり話さないと云う結果になるのさ」

「よくないがなあ、ほんとうに。……いよいよと云う時に突然打ち明けるよりも、前からぼつぼつ因果をふくめて置く方が、却かえつてその間に覚悟が出来ていいんだがなあ」

「しかし、もううすうすは気が付いているんだよ。僕等も話こそしないが、気が付かれるだけのことは子供の前で見せているんだから、こう云う事があるかも知れない——ぐらいな覚悟は案外ついているかとも思う」

「それなら尚なおさら更話すのに楽じゃないか。黙っていられるといういろなふうに気を廻して、最悪な場合を想像したりするもんだから、それで神経質になるんだ。——もしも君、もうお母さんに

会えなくなるんじゃないかと云うような余計な心配をしていたとしたら、話をするに却つて安心するかも知れんぜ」

「僕もそう考えなくもないんだがね、……ただどうも、親の身になると子供に打撃を与えるのが厭いやだもんだから、ついぐずぐずに延ばしてしまつて、……」

「君が恐れるほど打撃を受けはしないんだがなあ。——子供と云うものは強いもんだぜ。大人の心で子供を推し測るもんだから可哀そうに思えるんだが、子供自身はこれから成長するのだから、そのくらいな打撃に堪たえる力は持っているんだぜ。よく分るよ、うに云つて聴かしたらあきらめるところはちやんとあきらめて、理解するに違いないんだが、……」

「それは僕にも分っているんだよ。君の考える通りのことを僕も一と通りは考えたんだ」

ありていに云うと、要はこの従弟が上海から来てくれる日を、半ばは心待ちにもし、半ばは荷厄介にもしていた。不愉快なことは一日延ばしに先へ延ばして土壇場へ追い詰められるまでは云い出し得ない自分の弱い性質を思うと、従弟が早く来てくれたら自然いやいやながらも前のめり押し出されてカタが付きそうな気がしていたのだが、面と向ってその問題を持ち出されてみると、遠い所に置いてあったものが急に眼の前へ迫った感じで、励まされるよりは怯気がついて、臀込みするようになるのであった。

「で、どうする今日は？ 真つ直ぐ僕の家へ来るか」

と、彼は別なことを尋ねた。

「どうしてもいい。大阪に用があるんだけれど、今日でなくつても差さしつか支えない」

「じゃ、一と先ず落ち着いたらどうかね」

「美佐子さんは？」

「さあ、……………僕が出かける時までは居たが、……………」

「今日は、僕を待っていやしないか」

「或はわざと気を利きかして出たかも知れんね、自分がいない方がいいと云う風に、——少くともそれを口実にして」

「うん、まあ、それは、——美佐子さんにもいろいろ聞いてみたいんだけど、その前によく君の方の腹をたしかめて置く必要

があるんだ。いったい、いくら近しい間柄でも夫婦の別れ話の中へ他人が這入るのは間違ってるんだが、君たちばかりは自分自分の始末が付かない夫婦なんだから、……」

「君、昼飯は済んでいるのか」

と、要はもう一度別なことを尋ねた。

「いや、まだだ」

「神戸で飯を食って行こうか、子供は犬がいるんだから先へ帰るよ」

「小父さん、犬を見て来ましたよ」

そう云いながら、そこへ弘が戻つて来た。

「素敵すてきだなあ、あれは。まるで鹿みたいな感じだなあ」

「うん、走らしたら非常に速いぞ。汽車より速いと云うくらいで、あれを運動させるには自転車へ乗って引つ張るのが一番いいんだ。何しろ競馬に出る犬だから」

「競馬じゃあないでしょ、競犬でしょ小父さん」

「やられたね、一本」

「けれどあの犬、デイステムペアは済んでるかしら？」

「済んでるよ勿論、もちろんもうあの犬は一年と七箇月になるんだ。――

――それよりあれをどうして家へ連れて行くかが問題だな、大阪まで汽車で、それから自動車でも行くか」

「そんなことをしないでだって阪急は平気なんですよ。ちよつと頭から風呂敷か何か被せてやれば、人間と一緒に乗せてくれるんで

す」

「へえ、そりやハイカラだなあ、日本にもそんな電車があるのか」

「日本だって馬鹿に出来ないでしょう、どうだす、小父さん？」

「そうだったか」

「おかしいや、小父さんの大阪弁は。それじゃアクセントが違つてらあ」

「弘の奴は大阪弁がうまくなつちやつて困るんだよ、学校と家とで使い分けをやるんだから、——」

「そらなあ、僕かつて標準語使え云うたら使わんことないけど、学校やったら誰かってみんな大阪弁ばかりやさかい……」

「弘」

と、要は凶に乗ってしやべりつづけようとする子供を制した。

「お前、犬を受け取ったらじいやを連れて先へお帰り、小父さんは神戸に用があるそうだし、……………」

「お父さんは？」

「お父さんも小父さんと一緒だ。小父さんは実は、久しぶりで神戸のすき焼がたべたいと云うんで、これから三ツ輪へ出かけるんだよ。お前は朝がおそかったからそんなに減ってやしないだろう？ それにお父さんは少し小父さんと話もあるし、……………」

「ああ、そう」

子供は意味を悟ったらしく、顔を擡あげて恐る恐る父の眼の色を見た。

その五

「とにかく弘君の一件はどうする気なんだ。話した方がいいにはいいが、話しにくいと云うのだったら、僕が話してやってもいいぜ」

せつかちと云うほどでもないが、テキパキ事務を運んで行く習慣のついている高夏は、三ツ輪の座敷に足を伸ばすとすき焼の鍋なべの煮えるあいだも無駄に放っては置けないのであつた。

「それはいかん、やっぱり僕から話す方が本当じゃないかな」

「そりやあそうに違いないさ、ただその本当のことを君がなかな

か実行しそもないからさ」

「まあいい、そう云わんで子供のことは僕の勝手にさせてくれ給え。何と云つても彼奴あいつの性質は僕が一番よく知つてゐるんだから。

——今日だつて君は気がつくまいが、弘の態度は余程いつもと違つてゐるんだよ」

「どう云う風に？」

「ふだんはあんな風に人の前で大阪弁を使つてみせたり、揚げ足を取つたりするようなことはめつたにないんだ。いくら君と親しいからつて、あんなにはしやぐ筈はないんだ」

「僕も少うし元氣過ぎると思つたんだが、………じゃ、わざとはしやいでいたのかね」

「そうだよ、きつと」

「どうしてだろう？ 無理にもはしゃいで見せなければ僕に悪いと云う風に思つたのかしら？」

「それも多少はあるかも知れない、が、弘は実は君を恐れているんだよ。君が好きではあるんだが、同時にいくらか恐ろしくもあるんだ」

「なぜ？」

「子供は僕等の夫婦関係が何処どこまで切迫しているのかは知るよしもないが、君が来たと云うことは何かしら形勢に変化が起る前兆だと思つているんだ。君が来なければ容易にわれわれはカタが付かない、そこへ君がカタをつけに来たと、そう思つているんだよ」

「成るほど、じゃあ僕が来るのはあまり有り難くない訳なんだな」
 「そりやあいろいろ土産物を貰もらうのは嬉しいし、君に会いたいには会いたいんだ。つまり君は好きなんだが、君の来ると言うことが恐ろしいんだよ。そう云うところは僕も弘も全く同じ気持なん
 で、さっきの話す話さないの一件なんでも、僕が話すのを厭がるように子供の方でも聞かされるのを厭がっているのは、あれの様子に見えているんだ。弘にしてみると、君と云う人は何を云い出すか分らない、お父さんが云わないでいることを、今に君から宣告されやしないかと、そんなところまで感ぐっているんじゃないかと思う」

「そうか、それでその恐ろしさを胡麻ごま化かすためにはしやいでいた

のか」

「要するに、僕も、美佐子も、弘も、三人ながら同じように気が弱いんだ。そうして今では三人共に同じ状態にとどまっているんだ。——正直を云うと、僕にしたって君の来るのが恐ろしくないことはないんだから」

「じゃ、放つて置いたらどうなるんだ」

「放つて置かれたらなお困るんだ。恐ろしいことは恐ろしいが、何とかカタがついた方がいいには違いないんだから」

「弱つたな、どうも。——阿曾と云う男は何と云っているんだ。君等が駄目なら、その男に積極的に出てもらったら、却って解決が早くはないかな」

「ところがその男もやっぱり同じらしいんだよ。美佐子の方から極めてくれなければ、自分はどうともする訳に行かないと云うんだそうだ」

「まあ、男の立ち場としてはそういうのが当然ではある。でなければ、自分が人の家庭を破壊することになるんだから」

「それにもともとの話は何処までも三人が合意の上のことにして、阿曾にも、美佐子にも、僕にも、みんなに都合のいい時を待とうと、そう云う約束なんだからね」

「けれども都合のいい時なんて、一体いつになったら来るんだ。誰か一人が決然たる処置を取らなかつたら、そんな時は永久に来るもんじゃない」

「いや、そうでないよ、——たとえばこの三月の学校の休みなんかも、実は一つの機会ではあった。と云うのは、僕は子供が胸一杯に悲しい思いを包みながら、学校の教室なんぞで不意にはらはらと涙をこぼしたりすることを想うと、そいつがとてもたまらないんだ。だから学校が休みでさえあれば、旅行にでも連れて行ってやるとか、活動写真でも見に行くとか、何とでもして紛らわしてやる事が出来るだろうし、そのうちには少しずつ忘れて行くようになると思うんだ」

「じゃあ、なぜそうしないんだ」

「今月は阿曾が困ると云うんだ。阿曾の兄が来月初旬に洋行するんで、出先にごたごたを起すのもいやだし、兄が日本に居ない方

が故障が少いと云う訳なんだ」

「すると今度は夏の休みまで機会がないんだね」

「うん、夏だはずっと休みの期間も長いしするから、……………」

「そう云うことを云っているんじゃない、実際際限がないんだがなあ。夏になったら又どんな事情が湧くかも知れんし、……………」

肉はないけれども骨太の上にじょうみやく静脈のグリグリしている、男性

的にや瘦せた高夏の手が、酒のせいか重い物をじつと持ちこたえて

いる時のようにふるえていた。彼はその手を鍋の下へ伸ばして、

はぼたん葉牡丹のように重なった葉巻の灰の層をどさりとこんろ焔炉の水に落し

た。

こうしてたまに、二た月に一度か三月に一度ずつ帰って来る従弟

を迎えるたびに、常に感じることに云うのは、要は口でこそ「別れる」を問題にしているようなものの、まだほんとうは「別れるか別れないか」さえしつかり決断がついていないのである。それを従弟が別れることに極めてしまつて、ひたすら時機ばかりを考慮のうちに入れてるのは、従弟自身が「別れてしまえ」と云う強硬な意見だからではなく、別れることは最早や動かす可からざる決定であるとして、ただその手段についてのみ相談を受けるからなのである。要は決して心にもない強がりを云うのではないのだが、いつも従弟の顔を見るとその男らしい果敢な気風にかぶれるせいも、自然と自分にも勇気が出て来て、既に覚悟がついているような話しぶりになるのであつた。そればかりで

なく、彼が従弟の来るのを迎える気持の中には自分で自分の運命もてあそを弄ぶことを楽しむ心も手伝っていた。もつと打ち明けて云えば、実行するにはあまりに意志の弱い彼は、別れた場合の空想にばかり耽ふけっているのです、その空想が従弟に会うと非常に活潑に、実感を帯びて来ることが愉快なのである。が、そうかと云つて、全然従弟を空想の道具に使うつもりではなく、アワよくばその空想から次第に現実を誘導したくもあるものであった。

誰しも離別は悲しいものにきまっている。それは相手が何者であろうとも、離別と云うこと自身のうちに悲しみがあるのである。別れるのに都合のいい時を、手をこまぬいて待つていたとてそんな時が来るものでないと云う高夏の言葉は、その通りに違いある

まい。さすがに高夏は嘗て彼自身^{かつ}が前の妻を離別した時は、要の
ようにぐずぐずしてはいなかった。別れることに決心すると、或
る朝彼は妻を一と間のうちへ呼んで、晩までかかつて事細かに理
由を述べた。そうして離縁を云い渡して置いてから、最後の別れ
を惜しむためにその晩じゆう妻と相抱いて泣いた。「女房も泣い
たし、僕もおいおい声を放つて泣いたよ」と、彼はそのあとで要
に語った。今度の事件で要が彼をたよりにするのは、一つには彼
にそう云う経験があり、その時の彼のやり方を傍^{そば}で見ている^{うらや}羨ま
しく思ったからではあるが、——成る程、高夏のように悲劇に
直面することが出来、泣きたい時には思うさま泣ける性質だった
ら、定めし後がさっぱりするだろう、あれでなければ離別は出来

ないをつくづく思ったからではあるが、しかし要にその真似まねはや
 れないのである。東京人の見えや外聞を気にする癖がそう云うと
 ころへまで附いて廻つて、義太夫語りの態度を醜いと感ずる彼は、
 顔をゆがめて泣きわめく世話場の中へ自分を置くことに同じ醜さ
 を感ずるのである。彼は何処までも涙で顔をよごさずに、きれい
 に事を運びたかつた。妻の心緒しんしよと自分の心緒とが一つの脳髓の
 作用のように理解し合つて別れたかつた。それが必ずしも不可能
 なことでなく思えるのは、彼の場合は高夏の場合と違うからであ
 る。彼は去つて行く妻に対して何の悪い感情も持たない。二人は
 互に性的には愛し合うことが出来ないけれども、その他の点では、
 趣味も、思想も、合わないところはないのである。夫には妻が

「女」でなく、妻には夫が「男」でないと云う関係、——夫婦でないものが夫婦になっていると云う意識が氣づまりな思いをさせるのであつて、もし二人が友達であつたら却つて仲よく行つたかも知れない。それゆえ要は去つてからでも附き合ひをしないと云うのではない。相当の年所をさえ経たなら、過去の記憶に煩わづらいされるところなく、阿曾の妻として、弘の母なる人として、ずいぶん心やすく往復されそうにも感ずるのである。尤もその時になつてみると阿曾の手前や世間の眼もあつてそうは出来にくいにしてからが、少くとも二人がそういう見透しを持って別れられたら、「別れる」と云う悲しみをどんなに軽くするか知れない。「弘が重い病氣にでもなつたら、きつと知らして下さるでしょうね。そ

んな時には見舞いに行つてもいいことにして下さらないじゃ困るわ。阿曾も承知なんですから」と美佐子が云うのは、弘の父の病気の場合をも含めているに違いないし、要の方でも彼女の身に就いて望むところは同じであつた。夫婦としては不仕合わせなお互であつたにもせよ、とにもかくにも十年に余る歳月のあいだ起き伏しを共にし、子をまで儲けた二人ではないか。それが一旦別れたからと云つて、路傍の人を視るみようにしなればならないとは—— お互の身に万一のことがあつた場合に臨終にさえ会つてならないとは、—— そんな理由は何処にあらう。要も美佐子も、別れる時はその心持でありたかつた。やがてめいめいが新しい配偶者を持ち、新しい子を儲けるとしたら、その心持がいつまでつ

づくか分らないにしても、さしあたってはそれが一番氣を樂にさせる方法だと思つた。

「実は何だよ、こんなことを云うと笑われるかも知れないが、この三月にしようかと云つたのは子供のためばかりではなかつたんだよ」

「ふむ？」

と云つて高夏は、鍋の中へ眼を落してきまり悪そうに唇で微笑くちびるしている要を視つめた。

「都合のいい時と云う中には季候のことも考慮しているんだよ。つまりその時の季候の工合で悲しみの程度が余程違う。何と云つても秋に別れるのは一番いけない、一番悲しみの度が強い。いよ

いよ別れると云う時に、『これからだんだん寒くもなりますし……』と、泣きながら女房がそう云つたんで急に別れるのを止めてしまった男があるんだが、実際そんなことは有り得ると思う」

「誰だい、その男は？」

「いや、そんな話もあると云うことを聞いただけなんだが」

「は、は、君はいろいろそう云う例を方々で聞いて来ると見えるね」

「こう云う時に人はどうするかと思うもんだから、聞くつもりはなくつても耳に這入るようになるんだよ。尤も僕等のような場合はあまり世間に例がないんで、参考になるのは少いんだけど」

「で、別れるのには今頃の暖かい陽気が一番いいと云うのかい？」

「うん、まあそうなんだ。まだこの頃はうすら寒いことは寒いけれども、しかしだんだん暖かくなる一方だし、そのうちには桜が咲き初めるし、直きに新緑の季節にもなるし、……そう云うコンディションがあつたら、比較的悲しみが軽いだらうと思うんだ」

「と云うのは、君の意見なのか？」

「美佐子も僕と同意見なんだよ、『別れるのなら春がいいわね』
って、——」

「そりや大変だ、すると来年の春まで待たなきやならないのか」

「夏だつてそりやあ悪くはないがね、……ただ僕の母親が亡なくなったのが、あれが七月だつたらう？ 僕はあの時に覚えがあるんだが、夏の景色と云うものはすべてが明るく生き生きとしてい

て、眼に触れるものがみんな晴れやかな筈なんだけれど、あの年ぐらい夏を悲しいと思ったことはなかった。僕は青葉の蒸し蒸しと繁しげっているのを眺ながめただけでも涙ぐまれて仕方がなかった。：

……」

「それ見給え。だから春だつて同じことなんだ。悲しい時には桜の花の咲くのを見たつて涙が出るんだ」

「恐らく僕もそうなんだろうとは思つてゐるんだが、そう考えるといよいよ時機がなくなつてしまつて、身動きが出来なくなるものだから、………」

「結局こいつは、別れないで済むことになるんじゃないかな」

「君はそう云う気がするかね？」

「僕より君はどうなんだ？」

「僕にはどうなるか全く分らない。分っているのは、別れなければならぬ理由は余りに明かに備わっている、これまででさえうまく行かなかつたものが、阿曾との関係が出来てしまった今となつて、——それも僕から寧ろむしすすめてそれを許した今となつて、——夫婦でいられる訳はないし、すでに夫婦ではなくなつていゝ、と云う事実だ。僕も美佐子もこの事実を前に置いて、一時の悲しみを忍ぶか永久の苦痛に堪えるか、どつちとも決断が附かずにいる、——決断は附いているんだが、それを実行する勇氣がないので迷つているんだ」

「君、こう云う風に考えることは出来ないかしらん？——すで

に夫婦でないものなら、別れる別れないと云うことは、云いかえると一緒の家に住むか住まないかと云うだけのことだ、——そう考えたらよつぽど楽になりはしないか」

「もちろん僕は出来るだけそう考えているんだよ、そう考えていてやっぱりなかなか楽でないだよ」

「尤も子供と云うものもあるからなんだが、子供にしたつて父と母とが別々に住むようになるだけで、母を母と呼べなくなると云うんじゃないんだから、……」

「そりゃあね、幾らも世間にはあることなんで、外交官や地方長官なら夫だけが外国へ行つていたり、子供を東京の親戚へ預けたりするのがざらにあるんだし、そうでなくつたつて中学校もない

ような田舎の子供はみんな親の傍を離れてるんだから、それを考えたら何でもない、……と、そう思うことは思うんだけど、……」

「つまり君のはただ君自身の心持が悲しいんだよ。事實は君が感じるほどに悲しくはないんだ」

「だって、悲しみというものは結局みんなそうなんじゃないか、どうせ主観的なものなんだから。……僕等のはお互に憎み合うことの出来ないのがいけないんだね。憎み合えたら楽なんだろうが、両方が両方を尤もだと思ってるんだから始末に悪い」

「なまじ君に相談しないで、二人が駈^かけ落ちしちまうと一番面倒がなかったんだな」

「まだこうならない前のことだが、いつそそうしようかって阿曾
 が云ったことがあるそうだよ。しかし美佐子は、あたしにそんな
 真似はとても出来ない、何か麻酔剤でも嗅^かがしてもらって寝てい
 るあいだに担^かぎ出してでもくれなかつたら駄目だと云って笑った
 そうだが、……………」

「わざと喧嘩^{けんか}を吹っかけてみたらどんなもんだ」

「そいつも駄目だね。お互に芝居をしてるのが分ってるんじゃない、

『出て行け』『出て行きます』と云うようなことを口先でばかり
 云い合つたつて、いざと云う時急に泣き出しちまうだろうね」

「何しろ手数のかかる夫婦だよ、別れるのにまでいろいろ贅^{ぜい}沢^{たく}
 を云うんだから。……………」

「何かこう、心理的に麻酔剤の役をするものがあればいいんだが、……君はあの時分に芳子さんを心から憎むことが出来たんだらうね」

「憎くもあつたが哀れでもあつたさ。徹底的に憎み通すと云うよ
うなことは男同士の間でなけりやないことだからな」

「しかし、こう云うと変だが、くろうとの女は別れるのに別れ易くはないかな。ああ云うぱつぱつとした性質の人だし、過去にも君以外に幾人かの男を知っているんだし、一人になれば気楽に前の商売に帰って行けるんだし、……」

「やっぱり別れる身になつてみるとそうも行かんね」

眉の間をかすかに曇らせた高夏は、すぐ又もとの調子で云つた。

「それも季候とおんなじ事だよ、別れるのに都合のいい女だの悪い女だのつてあるもんじゃないよ」

「そうかしらん？ 僕にはどうも娼婦しょうふ型の女は別れ易くつて、母婦型の女は別れにくいような気がするんだが、そう思うのは身勝手かしらん？」

「娼婦型は案外本人が平気なだけに、一層哀れなところもある。立派なところへ縁づいてでもくれるんならいいが、又のこのこと花柳界へ戻つて行かれちゃ、それだけ此方こつちも世間が狭くなるからな。僕はそんなことは超越してるが、そう云う風に考えたら貞女も淫婦いんぷも悲しくないなんて女はないさ」

ひとしきり執方どつちも黙り込んで鍋の物を突ツついていた。酒は二人

で二本と飲んではいなかったが、その浅い酔いが却っていつまでも顔に火照ほてつて、へんに春らしい鈍重な気分だった。

「そろそろ飯にしようじゃないか」

「うむ」

要かなめはむツつりしてベルを押した。

「一体しかし、——」

と、高夏が云った。

「——近代の女はみんないくらかずつ娼婦型になりつつあるんじゃないのかな。美佐子さんなんぞも全然母婦型とは云いにくいな」

「あれは元来は母婦型なんだよ、母婦型の魂を娼婦型の化粧で包

んでいるんだ」

「そうかも知れない。——一つにはたしかに化粧のせいだ。この頃の女の顔の作りは多少ともアメリカの映画女優の影響を受けているんだから、どうしたって娼婦型になる。上海なんぞでもやっぱりそうだが」

「それに美佐子のは、僕がなるべく娼婦型にさせるように仕向けた傾きもないことはないんだ」

「そりゃあ君が女性崇拜者フェミニストのせいなんだろう、フェミニストと云う者は母婦型よりも娼婦型を喜ぶんだから」

「いいや、そうじゃないんだよ。つまり何なんだ、——又問題が前に戻るが、娼婦型にさせた方が別れるのに楽だと思ったんだ。

しかしそいつが大違いで、腹からなり切れちまえばいいんだが、
附つけ焼やき刃ばだから肝心な時に母婦の地じ金かねが出て来るんで、なお不
自然いやな厭いやな気がするんだ」

「美佐子さん自身はどう思っているだろう？」

「自分はたしかに悪くなった、昔のように純粹でなくなつたと云
つている。——それはそうに違いないんだが、一半の責任は僕
にあるんだ」

何の事はない、彼女と結婚してからのこの歳月と云うものを、自
分は如何いかにして離縁すべきかと云うことばかり考えつづけて暮ら
して来たのだ、別れよう別れようの一念しかない夫だったのだ。

——ふとそう思うと、要は自分の冷酷な姿がありありと自分に

見えるのであった。自分は妻を愛し得ない代りには、決して侮辱を与えないように心がけていたつもりだけれど、女に取つてこれが最も大いなる侮辱でなくて何であろう。こういう夫を持たされた妻の寂しさは、娼婦にも母婦にも、勝気な者にも内気な者にも、何として堪^たえることが出来よう。……

「實際あれがほんとうの娼婦型だったら、僕には文句はないんだがな」

「どうだか、それもアテにはならんな。芳子のような真似をされたら君だって我慢が出来やしないぜ」

「そりゃあ、そう云つちやあ悪いが、ほんとうに商売をしたことのある女はいかな。それに僕は芸者タイプは好かないんだ。ハ

イカラな、智的な娼婦型がいいんだ」

「それにしたつて、女房になつてから娼婦的行為を實行されたら困るじゃないか」

「智的な奴なら、そこは自制力を持つてるだろう」

「君の云うことはどこまでも勝手だよ。そんな虫のいい注文に箆はまるような女があるもんか。——フェミニストと云う者は結局独身で通すより外仕方がないんだ、どんな女を持ったところで気に入る筈はないんだから」

「僕も實際結婚には懲こりたよ。今度別れたらまあ当分は、——或は一生貰わないでしまふかも知れない」

「そう云いながら、又貰つては失敗するのがフェミニストでもあ

るんだがね」

二人の会話は、仲居が給仕に這入はいつて来たのでそれきり途切れた。

その六

朝も十時近くになつて布団の中で眼を開いた美佐子は、庭の方で子供と犬とが戯れている声を、いつになくのんびりとした心持で聞いていた。「リンデー！　リンデー！」「ピオニー！　ピオニー！」と、子供はしきりに犬を呼んでいる。ピオニーと云うのは前から飼っているコリー種の牝めすで、去年の五月に神戸の犬屋から買った時にちょうど花壇に咲いていた牡丹ぼたんにちなんで名をつけ

たのだが、弘は早速みやげ土産のグレイハウンドを曳ひき出して、そのピ
オニーと友達にさせようとしているらしい。

「いかん、いかん、そう君のように急に仲好くさせようたって
駄目だ。放つて置けば自然に好くなるよ」

そう云っているのは高夏である。

「だって小父さん、牝めまおす牡おすなら喧嘩けんかしないって云うじゃありませ
んか」

「それにしたってまだ昨日来たばかりだから駄目だ」

「喧嘩どっちしたら孰方どっちが強いかしら？」

「そうだな、ほんとに。——ちようど両方同じくらいな大きさ
なんでいけないんだな。孰方か小さいと大きい方が相手にしない

んで直ぐに仲好くなるんだがな」

その間も二頭の犬は代る代る吠ほえていた。ゆうべ帰りがおそかった美佐子は、旅の疲れで睡そうにしていた高夏と二三十分しやべつたばかりで、土産の犬はまだ見ていないのだが、あのひいひいと風邪声かぜいこえのようなかすれた声で啼ないている方がピオニーであろう。彼女は夫や弘ほどに犬好きではないのだけれど、このピオニーはいつも帰りが十時過ぎになる時には、じいやと一緒に停留所まで迎えに出ていてくれるのである。そして彼女が改札口から現れると、鎖の音をちやりん！ と云わして、いきなり跳とび着こうとするのである。彼女はそんな時、じいやを叱しかつて着物に附いた泥足の痕あとを払いながらも、だんだん犬が前ほどは嫌きらいでなく、この頃

では気が向くと撫でてやったり、ミルクを与えたりなぞしていた。ゆうべ電車を降りた時にも、「ピオニーや、今日はお前のお友達が来たんじゃないの」と、そう云って跳び着いて来る頭をさすつた。どうかすると、誰より先に自分の帰りを喜んで迎えるこのピオニーが、夫の家の代表者のように思えもした。

雨戸は気を利かして締めてあるのだが、欄間の障子にぎらぎらしている日ざしの様子では、外は桃の花の咲きそうなららかな天氣になつていゝらしい。そう云えば今年のお節句には雛人形を飾つたものかどうであろう。彼女は初節句の祝いに人形好きの父親が特別に京都の丸平で拵えてくれた古風な雛を、結婚の時道具と一緒に斯波家へ持って来ているのである。そして関西へ移つてか

らは土地の風習に従つて一と月おくれの四月の三日を節句にして
 いた。女の子のない家庭ではあり、彼女自身はそんなものに今で
 は大した愛着もないのであるから、そう昔風なしきたりを固守す
 るまでもないのだけれど、実を云うと、京都が近くなつたために
 毎年父親が節句になるとその人形をなつかしがつて、わざわざ見
 に来てやるのである。現に去年も一昨年おとしもそうであつたから、
 今年も多分忘れてはいないであらう。それを思うと、物置きの奥
 から一年間の埃のたまつた幾つもの箱を引きずり出す面倒は忍ぶ
 としても、又この間の弁天座の時のような窮屈な場面が想像せら
 れて気が重くなつて来るのであつた。どうかして今年は飾らない
 で済ませる法はないかしらん？ 夫に相談して見ようかしらん？

一体あの雛を自分はこの家を出る時に再び持って行ったものか
どうであろう？ 残して置かれたら夫は迷惑するのではなからう
か？……………

今になって急にそんなことが気にかかり出したと云うのは、多分
今年の桃の節句にはもうこの家にはいないであろうとぼんやり思っ
ていたからなのだが、それがこうして寝室の中に籠こもっていてさえ
そぞろに春が感ぜられる暖かい陽気になってしまった。美佐子は
仰向きに枕へつむりを載せたまま、暫しばらく欄間に映っている明るい
日かげへ眼をやっていた。久しぶりに十分な眠りを貪むきほったので睡
気は残っていないのだけれど、手足を伸び伸びとさせているのが
いつまでもでも好い心持で、ちよつとは蓐しとねのぬくもりを捨てること

が出来ない。彼女の隣りには弘の蓐が、もう一つ隣りの床の間寄りには夫の蓐が敷いてありながら、その二つともとうに空っぽになつていて、瑠璃色の古伊万里の壺つぼに椿つばきの花の活いけてあるのが、夫の枕の向うに見える。今日は高夏と云う客もあるのだし、もう起きなければ悪いのであるが、しかし彼女がこんなにゆつくり朝寝坊をしていられることはめつたにないのである。なぜなら夫婦は弘の中にはさんで眠る習慣を、その児が生れた時分から今日までずるずるに改めずにいて、子供が起きると必ず孰方かが起きないではいかなかった。そして大概の場合には、夫を寝かして置いために彼女が先に起きるからだつた。日曜の朝なぞ少しはゆつくり寝かして置いてもらいたいのには、学校がなくてもやはり弘は七時

に起きてしまうので、彼女も一旦は起きなければならぬ。尤も二三年この方、だんだん体が肥こえて来る傾きがあるので、睡眠時間を減らした方がいいと思つてゐるのだし、眼に借りの出来るのはそうまで苦痛に感じてゐないようなものの、朝寝の快感は又おのずから別である。あまり眠りが足りな過ぎるのも不安になつて、たまには睡眠剤の力で昼寝をしようとすることもあるけれども、却つて頭が冴さえてしまつておちおちと睡れない。一週に一度大阪の事務所へ顔を出す日に、夫がわざと氣を利かして子供と一緒に出かけてくれるようなことは、月に二三度あるかないかである。とにかく寝ても寝られないでも、こうして一人寢室を占領していただけるのは、近頃珍しいのである。

犬の啼きごえはまだ聞えている。「リンディー」「ピオニー」と、弘は相変らず呼んでいる。その騒々しいのが、いかにも春らしくのどかにひびいて、この五六日好晴をつづけている空の色が想いやられた。いずれ今日のうちには高夏を相手に話さなければならぬのだが、それさえ今の彼女には雛人形の程度以上には気苦労の種にならなかつた。心配をすれば際限がないから、すべてのことを雛人形を扱うように扱って、いつでも今日のお天気のようにうらかな気分でありたい。彼女はふと、リンディーと云うのはどんな犬かしらと、子供のような好奇心を感じた。そしてようよう、その好奇心に免じて起きようと云う気になった。

「お早う！」

と、ひじかけまど肘掛窓の雨戸を一枚だけ開けて、彼女は子供に負けない程の声で叫んだ。

「お早う、——いつまで寝てるんです？」

「何時、もう？」

「十二時」

「うそよ、そんなじゃあないことよ、まだやつと十時頃よ」

「驚いたなあ、このお天気によく今時分まで寝ていられるなあ」

「ふ、ふ、——寝坊をするのにもいいお天気よ」

「第一お客様に対して失礼じゃないですか」

「お客様だと思っていないから大丈夫だわ」

「いいから早く顔を洗って降りていらっしやい。あなたにもお土

産があるんだから」

窓を見上げている高夏の顔は、梅の枝に遮さいえぎられていた。

「その犬？」

「うん、こいつが目下上シャンハイ海で大流行の奴なんだ」

「素敵でしょ、お母さん、この犬はほんとうはお母さんが連れて歩くといいんですって」

「どうして？」

「グレイハウンドという奴は、西洋では婦人の裝飾犬になつてい
るんだ。つまり此こいつ奴を引つ張つて歩くと一層美人に見えるんだな」

「あたしでも美人に見えて？」

「もちろん見えます、請け合います」

「だけど随分きやしやな犬ねえ。そんなのを連れて歩いたら、尚更此方が太つちよに見えちまうわ」

「犬の方でそう云うだろう、この奥様は吾輩わがはいの裝飾になるって」
「覚えてらっしゃい」

「あはははは」

と、弘も一緒になつて笑つた。

庭には梅の樹が五六株あつた。以前この辺が百姓家の庭であつた頃からのもので、早いのは二月の初めから順々に花を持ちつづけ、て三月中は次から次へ咲いていたのが、今ではあらかた散り果てた中にまだ二三輪は真つ白な粒を光らしていた。二頭の犬は噛かみ合いをしない程度の隔たりを置いて、その梅の幹へそれぞれつな

がれているのである。ピオニーの方もリンデイーの方も吠え疲れ
 たと云う形で、スフィンクスのような姿勢で下腹をぺったり土へ
 つけたまま、向い合つて睨めくらにらをしていた。梅の枝が幾つも交
 錯しているのはつきり見定めにくいけれど、夫は洋館のヴェラ
 ンダにいるらしい。紅茶の茶碗を前にして籐椅子とういすに凭りながら大
 型の洋書のページをめくつているのが分る。寝間着の上は大島の
 羽織まとを纏つて、メリヤスのパツチの端を無ぶ恰好かっこうに素足の踵かかとまで
 引つ張つている高夏は、庭先へ椅子を持ち出していた。

「そこに繋つないで置いて頂戴、今すぐ下へ見に行きますから」
 彼女はざつと朝の風呂に漬つかつてからヴェランダへ出た。

「どうなすつたの、もう御飯はお済みになつたの？」

「済んじまったよ。待ってたんだがなかなか起きそうもないもんだから」

夫は片手で茶碗を空くうにささげながら、膝ひざの上にある本を見い見い茶をすすった。

「奥様、お風呂が沸いていますぜ」

と、高夏が云った。

「此処ここの家じゃあ、奥様は一向あいそがないが、女中の方は感心だ、吾輩のために朝早くから風呂を焚たきつけてくれるんだから。僕の這入った跡でもよけりやあ這入ってらっしやい」

「這入って来たのよ、今、——あなたの跡だと知らなかったもんだから」

「へえ、それにしちやあ早かつたな」

「大丈夫？　高夏さん？——」

「何が？」

「あなたの跡でも支那しなの病気がうつらないこと？」

「冗談でしょう、そりやあ僕よりか斯波君の方だ」

「僕のは内地仕込みだからな、君の奴ほど危険じゃあないよ」

「お母さん、お母さん」

と、庭で弘の呼ぶ声がした。

「リンデイーを見にいらつしやいよ」

「見るのはいいけど、今朝はお前と犬のお蔭で眼がさめちやつたのよ、お母さんは。——朝っぱらから、高夏さんまで一緒にな

つて大きな声で怒鳴るんだもの」

「僕はこう見えてもビジネススマンだからね。上海にいと朝は五時に起きて、オフィスへ出るまでに北四川路きたしせんろから江湾キャンワンの方までギャロップして来るんだよ」

「今でも馬をやっているのかい？」

「うん、どんな寒い日でも一遍ぐるツと廻つて来ないと気持ちが悪いね」

「犬を此方こっちへ連れて来させたらいいじゃないか」

要はヴェランダの日だまりを動くのが厭だという形で、梅の樹の方へ立つて行く二人に云った。

「弘や、お父さんがリンデイーを連れていらっしやいッて」

「リンデイー！」

繁みの向うの梅の枝がざわざわと揺いで、ピオニーの方が突然ひいひいしやがれ声を立てた。

「これ！ ピオニー、これ！——小父さん、小父さん、ピオニーが邪魔をして仕様がなから、連れに来て下さいよ」

「いやだよ、ピオニー！ ま、そう跳び着いちゃ……いやだつたら！」

頬ほおを舐なめられそうになった美佐子は、庭下駄のまま慌あわててヴェランダへ駈かけ上りながら云った。

「お前はしつツこいからいやさ、ほんとに。——ピオニーなんか連れて来ないでもよかったのに」

「だってお母さん、騒いで仕様がななんですよ」

「犬と云う奴はひどく焼き餅もち焼きだからね。——」

階段の下に立っているリンディーの傍にしゃがんで、高夏は平手でしきりに犬の喉のどくび頸を撫でていた。

「何をしてるんだ。だにでもいるのか？」

「いや、此処をこうしてさすって見給え、実に妙だよ」

「何が妙なんだ」

「こうしているとね、この喉頸のところの手ざわりが、全然人間の此処と同じなんだよ」

高夏は自分の喉を撫でてみては、又犬の喉を撫でた。

「美佐子さん、ちよいと触って御覧なさいよ、うそじゃないから」

「僕触つて見よう」

と、母親より先に弘がしゃがんだ。

「やあ、ほんとうだあ、——ちよいとお母さんの喉に触らして、

——」

「何だよ、弘、犬とお母さんと一緒にする人がありますか」

「ありますかつて、君のお母さんの肌なんぞとてもこんなにすべすべしちやいないぜ。この犬に似てたら大したもんだぜ」

「じゃあ高夏さん、私の喉に触つてみて頂戴」

「まあ、まあ、一ぺんこの犬をためして御覧なさい。——どうです？　ほら？　不思議でしょう？」

「ふーん、不思議ね、全く。うそじゃないことね。——あなた

触つて御覧にならない？」

「どれ、どれ」

と云つて要も降りて来た。

「成る程、こりやあ妙だな、人間にそっくりで変な気がするな」

「ね、新発見だらう？」

「毛が短くつて縹しゆす子のようだもんだから、殆ど毛ほとんの感じがしない

んだね」

「それに頸の太さがちようど人間ぐらいなのね。あたしの頸と孰ど方つちかしら？」

美佐子は両方の手で輪を作つて、犬の頸と自分の頸とを測りくらべた。

「でもあたしより太いんだわ。長くつてきやしやだもんだから、細いように見えるけれど」

「や、僕と同じだ」

と、高夏が云った。

「カラーだったら十四半だな」

「じゃ、高夏さんに会いたくなったらこの犬の喉を撫でたらいいのね」

「小父さん、小父さん」

弘がわざとそう呼びながら、もう一度犬の傍にしやがんだ。

「あはははは、『リンデー』を止めて『小父さん』にするか。
なあ、弘」

「そうしましよようよ、お父さん。——小父さん小父さん！」

「高夏さん、この犬はあたしの所より、何処か外へ持って行ったら喜ぶ人がありそうだわね」

「なぜ？」

「お分りにならない？ あたしちやあんとは知っているのよ。きつとこの喉を撫でてばかりいる人がある人はしなくって？」

「おい、おい、間違いじゃあないのかい、僕の所へ持って来たのは？」

「どうも君たちは怪しからん。子供の前でそう云うことを云うもんじゃないよ。だから子供が生意気になって仕様がなない」

「あ、そう云えばお父さん、昨日神戸から連れて来る時に、この

犬を見ておかしなことを云った人があるんですよ」

と、弘が話の風向きを変えた。

「へえ、何だつて？」

「じいやと二人で海岸通りを歩いていたら、酔っ払いのような人が珍しさうに附いて来て、なんや、けつたいな犬やなあ、はも鱧みたいな犬やなあつて、——」

「あははははは」

「あははははは」

「考えたねえ、鱧とは。——成る程鱧の感じだよ。リンディー、お前は鱧だとよ」

「鱧のお蔭で小父さんの方は助かったらしいね」

要が小声で交ぜつ返した。

「だけど、顔の長いところはピオニーもリンディーもよく似ているのね」

「コリーとグレイハウンドとは顔も体つきも大体同じものなんだ。ただコリーの方は散毛でグレイハウンドの方は短毛なんだ。犬の智識のない人にちよつと説明しておきますがね」

「喉はどうなの？」

「喉の話はもう止めます、あまり愉快な発見でなかつたから」

「こうして二匹が石段の下に並んでいるところは三越のようね」

「三越にこんなものがあるんですか、お母さん」

「困るなあ、君は。江戸っ児の癖に東京の三越を知らないなんて。」

それだから大阪弁がうまい訳だよ」

「だって小父さん、東京にいたのは僕が六つの時ですもの」

「へえ、もうそうなるかねえ、早いもんだね。それきり君は東京へ行かないのか」

「ええ。行きたいんだけど、いつもお父さん一人だけで、お母さんと僕はおいてき堀なんです」

「小父さんと一緒に行かないか、ちようど学校はお休みだし、……三越を見せてやるぜ」

「いつ？」

「明日あしたか明後日あさってあたり」

「さあ、どうしようかなあ」

それまで愉快にしゃべっていた子供の顔に、ひよいと不安の影がさした。

「行ったらいいじゃないか、弘」

「行きたいことは行きたいんだけど、まだ宿題がやってないしなあ。……」

「だから宿題を早く済ましておしまいなさいって、この間からお母さんが云ってるじゃないの。一日かかったら出来るだろうから今日じゆうにセッセとやっておしまい。そして小父さんに連れて行ってお戴き。よ、そうおし、そうおし」

「なあに、宿題なんか汽車の中だつてやれる、小父さんが手伝つてやるよ」

「幾日向うにいるんです？ 小父さん」

「君の学校が始まるまでに帰る」

「何処へ泊まるの？」

「帝国ホテル」

「でも小父さんはいろいろ用がおりになるんじゃないんですか」

「まあ、いやだ、この児は。——折角連れて行って下さるって云うのに、何のかんのもって文句を云うことはないじゃないか。ほんとに、高夏さん、御迷惑でも連れて行ってやって下さいよ。二三日いでくれた方がうるさくなくっていいんですよ」

そう云う母の眼のうちを見ながら、弘は少し青ざめた顔でにやにやしていた。東京へ連れて行くと云う話は、偶然ここで持ち上つ

たに過ぎないのであるが、それを弘はそう取らないで、あらかじめしめ謀し合わせておかれたように感じているのに違ひなかつた。ほんとうに自分を喜ばしてくるためなら、無論行きたくないことはない。が、東京から帰る汽車の中でこの小父さんが何を云い出すかも知れない。「弘君、今日帰ってももうお母さんは家にいないのだよ。小父さんは君にそのことを話すようにお父さんから頼まれて来たのだ。……」と、そう云われるのじやないかしらん？——何だかそれが恐ろしくもあり、と云つてあまり子供らしい馬鹿げた想像のようでもあり、大人の心を測りかねて妙にうじうじしているのであつた。

「小父さんはどうしても東京へいらつしやる用があるんですか？」

「なぜ？」

「用がなかったら、家にいつまでも泊まっていらっしゃるといいんだがなあ。その方がみんなが面白いじゃありませんか、お父さんだってお母さんだって」

「家の方にはリンディーがいるからいいじゃないか。お父さんとお母さんは毎日喉を撫でているときさ」

「リンディーじゃあ口をきかないから駄目だあ。ねえ、リンディー、リンディー！ お前には小父さんの代りは出来ないねえ」

弘は照れ隠しに又犬の前にしゃがんで、喉をさすってやりながらその横腹へ顔をあてて頬ずりをした。声の調子とその様子とが少し変だった。泣いているのかも知れないと大人たちは思った。家

庭の中にどう云う事件が差し迫っているにもせよ、高夏がいるとみんなが呑気に冗談を云える心持になるのは事実であつた。それは高夏がそう云う風に仕向けてくれるせいもあるのだが、一つには高夏だけが総べての事情を知っていてくれる、この人の前では芝居をするには及ばないと云うことが、夫婦の胸を軽くしてくれるせいでもあつた。美佐子はほんとうに幾月ぶりで夫の高笑いを聞くのであろう。南を受けたヴェランダに差し向いの椅子に凭よりかかり、子供と犬との戯れるのを眺めながら日を浴びているこの平和さ、——夫が語り、妻が応じて、遠来の客を迎えつつあるこのまどかさは、世間を欺くと云う必要が除かれたために、却つて自然の夫婦らしさがまだ幾らかは残っていることを示していた。

そして夫婦は、これがいつまでつづくものではないにしても、こう云う場面に暫く自分たちを休らわせて、ほつと一と息入れたいのであった。

「面白いのかい、その本は？　大分熱心じゃないか」

「面白いよ、なかなか、………」

要は一旦テーブルの上に伏せた洋書を取り出して、それを自分だけに見えるように顔の前へ立てていた。開いたところの一方のページに裸体の女群が遊んでいるハレムか何かの銅版の挿絵さしえがあるのである。

「何しろそいつを手に入れるにやあケリー・ウォルシュへ何度掛け合いに行ったか知れんぜ。ようようイギリスから取り寄せたと

云うんで出かけて行くと、先は足もとを見やがったのか二百ドルが鏹びたもん一文も負からない、この本は目下ロンドンにだって二部とはない、それを負けるなんてお前が無理だと抜かすんだ。此方こっちは本の相場なんてものは一向知らんのだし、まあまあそれもそうだろうがと云う訳で、さんざ押し問答をした揚句、やっと一割引かしたんだが、金はその代りキャツシユで即座に払えと云うんだ」

「まあ、そんなに高い本なの？」

「だってお前、これ一冊じゃあないんだぜ、全部で十七冊あるんだぜ」

「その十七冊もある奴を、持って来るのが又一と苦勞だったんだよ。オブシーン・ブックだと云う話だし、イラストレーションも

あると云うんで、税関に見付かったら厄介だと思つて、トランクの中へ押し込んで来たのはいいんだが、そいつが馬鹿に重いもんだから持ち運びが大変で、どのくらい骨を折ったか知れんね。よつぽど駄賃を貰もらわなけりやあ合わん仕事だよ」

「大人の読むアラビアン・ナイトつて、子供のとまるきり違うんですか、お父さん」

高夏の言葉におぼろげながら好奇心を感じたらしい弘は、さつきから父の手の蔭になつた挿絵の方へ探るような眼を光らしていた。「違ふところもあるし、同じところもある。——アラビアン・ナイトと云うものは全体大人の読む本なんだよ。その中から子供が読んでもいいよはなしうな噺はなしだけを集めたのが、お前たちの持つてい

る奴さ」

「じゃあ、アリババの話はある？」

「ある」

「アラデインと不思議なランプは？」

「ある」

「『開け、胡麻』は？」

「ある。——お前の知っている噺はみんなある」

「英語だとむずかしくはない？ お父さんはそれをお読みになるのに幾日ぐらいかかるんです」

「お父さんだつて此奴をみんな読みはしないよ。面白そうな所だけを捜して読むんだ」

「しかし読むから感心だよ。僕なんかとんと忘れちまったね。英語なんてものは商売の外には使う時がないんだから」

「それが君、こういう本だと誰でも読む気になるから奇妙だよ、こつこつ字引きを引きながらでも。………」

「いずれ君のような閑^{ひまじん}人のやる事だな。僕みたいな貧乏人にはとてもそんな時間はないよ」

「だって、高夏さんは成金だって云う話じゃないの？」

「ところが折角儲^{もう}けたと思つたら、又損をしちやつた」

「どうして？」

「ドルの相場で」

「そう、そう、百八十ドルはいくらになるんだい？　忘れないう

ちに払って置こうか」

「いいんでしょう？　これはお土産なんでしょう？」

「馬鹿云つちやいけない！　そんな高いお土産があるもんか。これは抑そもそも頼まれて買って来たんですよ」

「じゃあ、あたしのお土産は？　高夏さん」

「や、そいつをすっかり忘れていたつけ。ちよつと彼方あっちへ見に来ませんか。どれでもあの中で好いのを上げます」

二人は高夏の部屋に充あてられた洋館の二階へ上った。

その七

「まあ、臭い！」

部屋へ這入ると、美佐子はばたばたと袂たもとでその辺の空気をハタいた。そしてその袖そでで顔をおさえて急いであるだけの窓を開いた。

「臭いわ、ほんとうに、高夏さんは。——今でもあれを召し上げるの？」

「ええ、たべますよ。その代り始終この通り上等の葉巻を吸っているんだ」

「葉巻の匂においがごつちやになつてからなお変なんだわ。まあ、ほんとうに、部屋じゆうに籠こもつちまつて、何ていう臭さだろう。

こんな匂いをさせるんなら、うちの寝間着を着ないで頂戴よ」

「なあに、洗濯をすりやあ直ぐに落ちますよ。着てしまったもの

を今更脱いだつておんなじ事さ」

庭では別段気がつくほどではなかったのだが、締め切つてあつた洋室の中には一と晩じゆうよど澱んでいた葉巻の匂いと大蒜にんにくの匂いとが、むつと鼻を刺すばかりに交つていた。「支那しなに住んだら支那人と同じように盛んに大蒜をたべるに限る。大蒜さえたべていたら風土病にかかる心配はない」——と、そう云うのが高夏の持論で、上海の彼の厨ちゆうぼう房では、毎日必ず大蒜入りの支那料理を欠かしたことがないのである。「支那人だつたらきつと料理に大蒜を使う。大蒜の匂わない支那料理なんて支那料理のような気がしない」と云つて、彼は内地へ帰るのにも乾した大蒜を持って歩いて、ときどきそれをナイフで削つてはオブラートへ包んだり

して、持薬のように飲んでいた。胃腸を強くするばかりでなく、エネルギーになるんだから止められないと云うのであったが、「高夏が先の女房に逃げられたのは、あんまり大蒜臭かつたせいだぜ」と、要は冗談にそう云い云いした。

「後生ですから、もう少し向うへ行つていて頂戴」

「臭かつたら、鼻を摘まんでいらつしやいよ」

そう云つて片手でぱつぱつと煙を吐きながら、もう好い加減屑屋へ売つても惜しくなさそうな旅行擦れのしたスーツケースを、寝台の上へ一杯にひろげた。

「まあ、随分買ひ込んでいらしたのね、まるで呉服屋の番頭みたいな。」

「ええ、今度は東京へ行くもんだからね。…………お気に召したのがあればいいんだが、どうせ又悪口じゃあないのかな」

「あたしに幾つ下さるの？」

「二本か三本に願いたいね。……………どうです、これは？」

「地味だわ、そんなの」

「これが地味かなあ。——一体いくつになるんですよ。老ろうきゆ

九章うしやうの番頭の説じや、二十二三のお嬢様か若奥様向きだつて云つてたんだが」

「そんな、支那人の番頭の云うことなんかアテになりやしないわ」

「支那人て云うけれど、日本人が大勢買いに行く店で、日本人の好みはよく知っているんですぜ。僕ンところの奴なんかいつでも

此処の番頭に相談するんだ」

「でも、あたし、そんなのは厭いや。——第一それは呉紹ごしょうじゃあな

いの」

「慾張どんすつてるなあ。——呉紹なら三本だが、椀どんす子なら二本しか上げられませんよ」

「じゃあ椀どんす子を戴くわ、まだその方がいくらか得だから。——
どう？　これは？」

「それか？」

「それか？——ツて、何よ？」

「そいつは麻布の一番下の妹にやる積りだつたんだ」

「まあ、驚いた、そりや鈴子さんがお可哀そうだわ」

「驚いたとは僕の方で云うこツてすよ。こんな派手な帯をしようなんて、色気違いだな」

「ふ、ふ、どうせあたしは色気違いよ」

はつと高夏が思った時はもう遅かったが、美佐子はその場を救うためにわざとずうずうしく笑った。

「や、失言、失言。今のは本員の過あやまちでありました。唯今の言葉は取り消しますから、速記録へは載せないように願います」

「駄目よ、今更取り消したつて。もう速記録へ載つてしまつてよ」

「本員は決して悪意で申したのではない。しかし故ゆえなく淑女の名譽きずつを傷けたるのみならず、妄みだりに議場を騒がしたる罪は謹んで陳

謝いたします」

「ふ、ふ、あんまり淑女でもないんだけれど、……………」

「では取り消さないでもいいですか」

「いいわ、どうせ。———いづれ傷のつく名誉なんだから」

「そう云ったもんでもないでしょう。傷をつけないようにと云うんで、いろいろ苦心してるんでしょう」

「それは要はそうなんですけれど、そんなことを云ったって無理だと思わ。———昨日何かお話しになったの？」

「うん」

「どう云うんでしょう、要の方は？」

「例によって一向要領を得ないんだ。……………」

二人は花やかな帯地の裂きれが取り散らかされたスーツケースを中に

挟はさんで、寢台の両端に腰をかけた。

「あなたの方はどう云うんです？」

「どうって、そりゃあ、……：……：そう一と口には云えやしないわ」

「だから一と口でなくてもいい、二た口にでも三口にでもして云つてみたら」

「高夏さんは、今日はお暇なの？」

「今日は一日空あけてあるんです、その積りで昨日の午後に大阪の用を済まして来たんだから」

「要は今日は？」

「午ひるから弘君を連れて宝塚へでも出かけようかって云ってました

ぜ」

「弘には宿題をやらせましようよ。そうして東京へ連れて行って下さらない？」

「連れて行くのは構わないが、さつき素振りがおかしかったな、泣いていたんじやなかったのかな」

「そうよ、きつと、あれはああ云う風なんですから。——あたし、どう云う気持になるものか、二三日の間でもいいから一遍子供と云うものを自分の傍から放してみたいの」

「それもいいかも知れないな、その間に斯波君とも十分話し合ってみるこつたな」

「要の考は高夏さんから聞かして下さる方がいいわ。二人で鼻を突き合わせると、どうしても思うように口がきけないの、或る程

度まではいいけれど、それ以上に深入りすると涙ばかり出て来ちまっつて」

「一体しかし、阿曾君の所へ行けることは確かなんですか」

「そりや確かだわ。結局のところは二人の決心次第だと思うわ」

「向うの親や兄弟はなんにも知っていないのかしらん」

「うすうすは知っているらしいの」

「どう云う程度に？」

「まあ、要が承知でときどき会っているらしいと云うくらいな程度に」

「見て見ないふりをしてるんですね」

「そうなんでしょう。それより仕方がないんでしょう」

「じゃ、もし問題が現在以上に進んで来たら？」

「それも、まあ、——此方の方が円満に別れたあとの事ならば故障は云わないだろう、お母さんは自分の心持を分っていてくれるからツて、——」

再び庭で二頭の犬がいがみ合いを始めたらしく、きやんきやんと啼いた。

「まあ、又！」

と美佐子はちよつと舌打ちをして、膝の上でいじくっていた帯地の巻物をだらりと投げると、立つて窓まど際ぎわの方へ行つた。

「弘や、犬を彼方あっちへ連れて行つたらいいじゃないの。うるさくつて仕様が有りやしない」

「ええ、今連れて行くところなんですよ」

「お父さんは？」

「お父さんはヴェランダ。——アラビアン・ナイトを読んでいらつしやいます」

「お前、宿題を早くやっておしまい、遊んでいないで」

「小父さんはまだ？」

「小父さんを待っていないだってよござんす。小父さん小父さんてまるで自分の友達のように心得ているんだね、お前は」

「だって、宿題を手伝って下さるって仰おつしやったから——」

「駄目、駄目。何のための宿題です、自分でやらなけりやいけません！」

「はい」

と云つて、犬と一緒にばたばた駈けて行く足音が聞えた。

「弘君にはお母さんの方が恐いらしいな」

「ええ、要はなんにも云わないんですもの。——けど、別れるとなつたら、父親よりも母親の方に別れづらくはないかしら？」

「そりやお母さんは女の身一つで出て行くんだから、それだけ同情が寄るかも知れんな」

「そう思う？ 高夏さんは。——同情はあたし、要の方に集まると思うの。形の上ではあたしが要を捨てたように見えるんだから、世間はあたしを悪く云うでしょうし、子供にしてもそんな噂うわさが耳に這入ればあたしを恨みはしないでしょうか」

「しかし、大きくなれば自然に正しい判断を下すようになりますよ。子供の記憶は確かなものだから、成人してから小さい時の事をもう一度はつきり取り出してみて、これはこうだった、あれはああだったと云う風に、その時の智慧ちえで解釈する。だから子供は油断がならない、いずれ大人になる時があるんだから」

美佐子はそれには答えないでまだ窓際にたたずんだままぼんやり外を眺めていた。梅の木の間を小鳥が一羽、枝から枝へ飛び移っている。うぐいす鶯かしら？ せきれい鶺鴒かしら？ と思いつつ、暫くそれ

を眼で追っていた。梅の向うの野菜畑で、じいやがフレームの蓋ふたを開けて、何かの苗を畑へ植えているのが見える。二階からは海は望めなかったが、青々と晴れた海の方角の空を視みつめると、何

がなしにほつと重苦しいためいきが出た。

「今日は須磨へは行かなくつてもいいんですか」

「ふふ」

と彼女は、顔は見せないで、苦笑いで答えた。

「この頃は殆ど毎日だそうじゃないですか」

「ええ」

「会いたいなら行ってらっしゃい」

「あたし、そんなに擦れっからしに見えて？」

「見えると云った方が気に入るのか、孰方かな」

「正直のことを云って頂戴」

「やはり幾らか娼婦型だ、だんだんそうなりつつあると云うこと

に、昨日意見が一致したんだ」

「自分でもそれは認めているの。——でも今日はいいのよ、高夏さんがいらつしやるからつてそう云つてあるの。——第一お客さまを放つて置いちや、このお土産に対しても失礼だわ」

「よくそんなことが云えるなあ、昨日は一日いなかつた癖に」

「昨日はそりやあ、要が話があるだろうと思つたから。……」

「それじゃ今日は奥様デーか」

「とにかくあつちの日本間の方へいらつしやらない？ あたしお腹が減つているのよ。上らないでもあなたも見物に来て頂戴」

「帯はどれにきめるんです」

「まだきめてないのよ。あとでゆつくり見せて戴くから、店を拡

げてお置きなさいよ。——あなた方は御飯が済んだんだからい

いでしようけれど、あたしはペコペコなんだから。……」

梯子段はしごだんを降りしなに階下したの洋室を覗のぞいて見ると、要はいつかヴ

エランダから其処そこへ移つてソファへ仰向けあおむになりながら、まだ熱

心にさっきの本を読みつづけていたが、廊下づたいに日本間の方へ行く足音に、

「どうしたい、いいのがあつたかい」

と、気のなさそうな声をかけた。

「駄目なのよ。高夏さんは。お土産お土産つて触れ込みばかり大きくなって、そりやあしみつたれなんだから」

「しみつたれなもんか、あなたが慾張り過ぎるんだよ」

「だって、呉紹なら三本だが、緞子なら二本だなんて、——」
 「それで厭なら、たつて差し上げようとは申しません。此方こつちも大
 きに助かる訳だ」

「ふ、ふ」

半分は上の空らしいあいそ笑いをしただけで、しずかにページを
 繰る音が聞えた。

「当分はあれに夢中らしいな」
 と、廊下を曲りながら高夏が云った。

「ええ、何でも珍しいうちだけで、長つづきはしないのよ。子供
 に玩具おもちゃをあてがったようなものなんですから」

美佐子は八畳の茶の間へ這入ると、夫のすわる座布団ざぶとんの上へ客を

請じて、自分は紫檀したんのチャブ台の前にすわりながら、

「お小夜さよや、トーストを持って来ておくれ」

と、台所の方へ云いつけておいて、うしろの桑ちやだんすの茶箆ちやだんす筒すをあけた。

「紅茶がいい？ 日本茶がいい？」

「どっちでもいい。何かお菓子のうまいのはないですか」

「西洋菓子なら、ここにユーハイムのがあるわ」

「それで結構。人の食うのをただ見ていたってつまらんからな」

「ああ、ここへ来たんでせいせいしたけれど、でもまだ何だか臭いようね」

「幾らかあなたにも移ったか知れんね。まあ何と云うか、明日出

かけて御覧なさい」

「高夏さんと付き合っているうちは来てくれるなつて云われそうね」

「だがほんとうに惚れ合つた仲なら、大蒜にんにくの匂いぐらい何でも
ない筈だがな。それでなけりやあうそですよ」

「御馳走様。何を奢おごつて下さるの？」

「そう先廻りをされちやあ困る。ま、トーストでも上つて下さい」
「だけど、この匂いが好きになつた方があつて？」

「ありましたとも。——芳子なんぞはそうでしたよ」

「へーえ、じやあ臭いんで逃げられたつて云うのはうそ？」

「そりやあ斯波君の出鱈目でたらめだ。今でも大蒜の匂いを嗅かぐと、僕の

ことを想い出すつて云うそうですよ」

「あなたは想い出さない？」

「出さなくもないが、ありやあ遊ぶには面白いけれど女房にする女じゃない」

「娼婦型？」

「うん」

「じゃあ、あたしとおんなじね」

「あなたのは腹からの娼婦じゃあない。娼婦と見えるのは上ツ^{うわ}面^{つら}で、しんは良妻賢母だそうだ」

「そうかしらん？」

空つ惚^{とぼ}けているのかどうか、たべる方に余念もないと云う様子で、

即席のサンドウイツチを拵こしらえるのにかまけている彼女は、縦に二つに切つてある酢漬すづけの胡瓜きゅうりを細かに刻きざんでは、それと腸詰とをパンの間へ挟はさみながら器用な手つきで口の中へ運んだ。

「うまそうだな、それは」

「ええ。うまいわよ、なかなか」

「その小さいのは何だろう」

「これ？ これは肝臓レヴァのソーセージ。神戸の独逸人ドイツの店のよ」

「お客様にはそんな御馳走が出なかつたぜ」

「そりやあそうだわ。いつもあたしの朝のおかずにかまってるんですもの」

「それを僕にひとときれ下さい。菓子よりその方が欲しくなつた」

「意地きたなねえ。さあ、口をあーんと開いて。——」

「あーん」

「ああ、臭！ フォークにさわらないようにして、パンだけ巧く取って頂戴。……………どう？」

「うまい」

「もう上げないわよ、あたしのがなくなっちまうから」

「フォークを持って来させたらいいのに。手ずから人の口の中へ突っ込むなんか、そう云うところが娼婦なんだな」

「文句を云うなら、人の物なんかたべないで頂戴よ」

「しかし昔はこんな無作法がやれる人じゃあなかつたんだが、：

……………随分しとやかで、慎しみ深くって、……………」

「ええ、ええ、そうでしょうとも」

「あなたのはつまり腹からじゃあなくなつて、一種の虚栄心なんだな？」

「虚栄心？」

「ああ」

「分らないわ、あたし。……………」

「斯波君に云わせると、あなたを娼婦型にしたのは自分が仕向けたんだから、自分に責任があると云うんだが、僕はそうばかりも云えないと思う。……………」

「要にそんな責任を負つて貰いたくないわ。やっぱり自分の生れつきにそう云うところがあるんだと思うわ」

「そりやあ、どんな良妻賢母だって全然娼婦的の性質がないこと
はないさ。けどあなたのは今の結婚生活から来ていやしないか。
つまり人から淋^{さび}しい女だと思われのが厭なんで、努めて花やか
にしようとした結果じゃあないのかな」

「それが虚栄心？」

「やつぱり虚栄心の一種さ。夫に愛せられないのを人に知られた
くないと云う……そこまで云っちゃあ悪いかも知れないけれど、
……」

「いいえ、ちつとも構いません。どうぞ遠慮なく仰っしゃって頂
戴」

「あなたは弱味を見せまいとして強^しいて花やかにはしているけれ

ど、ときどき生地きじのさびしいところが出ることもある。外の人は気が付かないでも、斯波君にはそれが分るんじゃないのかな」

「要がいると妙にあたしは不自然になるのよ。要がいる時といない時とで、あたしの態度がいくらか違うとお思いにならない」

「斯波君がいないと、あなたは寧ろむし荒すざんで見えるね」

「高夏さんでさえそうお感じになるくらいだから、きつと厭な気がするだろうと思って、要の前ではどうしても固くなってしまふの。それはどうも仕方がないわ」

「阿曾君の前では無論娼婦型の方が出るんだらうな」

「そうでしよう、きつと」

「夫婦になると、それが案外そうでなくなりはしないかしらん？」

「阿曾とだったら、そんなことはないと思うわ」

「けど、人の細君であるうちは妙によく見えるもんなんだ。今のあなたがたは遊戯の気分でいるんだからな」

「結婚したって遊戯の気分でいられやしない？」

「それがそう行けばいいけれどね」

「そう行くつもりよ、あたしは。——結婚と云うものを非常に真面目まじめに考え過ぎるからいけないんじゃない？」

「じゃあ飽きたらば又別れるか」

「そうなる訳ね、理窟りくつの上では」

「理窟の上でなく、あなた自身の場合には？——」

フオークを動かしていた彼女の手が、胡瓜のときれを突き刺し

たまま急に皿の上で止まった。

「——飽きる時があると思うんですか？」

「あたしは飽きないつもりなの」

「阿曾君は？」

「飽きないとは思うけれど、『飽きない』と云う約束をするのは困ると云うの」

「それでもいいんですか、あなたは？」

「あたしにはその気持はよく分るのよ。そりや『飽きない』って云ってしまえばいいんだけど、自分は恋愛の経験は今度が始めてなんだから、今のところでは永久に変らないような気がしていても、実際それがどうなるものか、先のことは自分にも分ってい

ない。自分に分らないことを約束したって無意味だし、うそをつくのは不愉快だからって云うんですの」

「しかしそう云うもんじやないがな。先のことなんか考えないで、一途に『飽きない』と云い切れるだけの真剣さがなけりや、……」

「それは性質じやあないかしら。いくら真剣でも、自分を解剖するたちの人だったら、なかなかそうは云えないんじやない？」

「僕だったら、結果はうそをつくことになってもその時はちゃんと約束するな」

「阿曾は又、なまじ約束なんかすると、それがあつたために却つていつも、『飽きやしないか、飽きやしないか』と云う気がするに

違うない。自分の性質ではきつとそうなるからって、それを恐れ
ているんですの。だからお互に約束をしないで現在のままで一緒
になるのが一番いい。自分の気持を縛らないでくれた方が結局永
くつづくからって——」

「そうかも知れないが、どうも少し………」

「何なの？」

「遊戯気分が過ぎるようだな」

「あたしには性格が分っているから、そう云われた方が安心なん
だけれど」

「斯波君にはそれを話したんですか」

「話さないわ。今日までこんな話が出る機会もなかったし、話し

たつて無駄なんですから。……………」

「だけでも、そりゃあ乱暴だなあ、将来の保証もなしに別れると云うのは。……………」

自然と声が激して来るのをこらえながらそう云いかけた高夏は、その時両手を膝に置いてしずかに両眼をしばだたいている美佐子に気づいた。

「……………僕はそんなじやあないと思つた。……………そう云つちやあ失礼だが、夫を捨てて行くと云う以上は、もう少し真面目なんだろうと思つていたんだ」

「不真面目じやあないことよ、あたし。……………どっち孰方にしたつて別れた方がいいんですから。……………」

「だからこうなる前にもっとよく考えりやあよかつたんだ」

「考えたつておんなじ事だわ。夫婦でもないのに此処つらにいるのは辛いんですもの。………」

両肩を張つて、うなじを垂れて、涙を止めるのに一生懸命になつてはいたけれど、光つた物が一滴てき膝の上に落ちた。

その八

要かなめはさつきからオブシーン・ブックのオブシーンである所以ゆえんのところを見付け出そうとしているのだが、彼の手にしている一巻のうちには第一夜から第三十四夜までが収めてあつて、菊版で三百

六十ページもあるのだから、なかなか捜すのに手間がかかる。挿絵で釣られても中味は案外平凡な話が沢山ある。「ユーナン王とドウバン聖者の話」、「三つの林檎りんごの話」、「ナザレの仲買人の話」、「黒き島に住む若き王の話」、——と、そう云う風に一々標題を漁あさっただけでは、どれが一番好奇心を充たすに足るものか見当が付かない。もともとこの本は今まで完全な歐洲語訳がなかったと言われる亜刺比亞アラビアの物語を、リチャード・バアトンが始めて逐字的に英語に移して、バアトン倶楽部クラブから会員組織で出版した限定版であつて、殆ど各ページ毎に附いている親切な脚注を拾い読みして行くと、彼には何の興味もない語学上の研究もあるけれども、中には亜刺比亞の風俗習慣に関する解説や、多少話の

内容のうかがわれる記載がないこともない。たとえば「大きく空^う洞^{つろ}になつてゐる臍^{へそ}は美しいものとされてゐるばかりでなく、幼児にあつては健^{すこ}やかに生い立つ兆^{しるし}であると思われている」と云うのがある。「二枚の門歯——但し上^{じやうがく}顎^{がく}部に限る、——の間

にほんのかすかな隙^{すきま}間のあるのを、亞刺比亞人は美しいと感ずるのである。どう云う訳か分らないが変化に対するこの種族特有の愛情であろう」と云うのもある。——

「王様お抱えの理髪師は高位高官の人間であるのが普通であつて、それは主権者の生命を指の間に預かる者だからと云う至極尤もな理由に依る。嘗^{かつ}て或る英国の淑女で、そう云う印度^{インド}の貴族的フィガ口の一人と結婚した者があつたが、彼女は夫の官職が何である

かを知るに及んで、がっかりして興がさめたと云う話がある」

「東方の回教国では、既婚者と未婚者とを問わず若い婦人の一人歩きを禁じていて、犯す者があれば巡査はそれを捕縛していい権

利がある。これは密通を防ぐのに有効な手段であつて、嘗てクリ

ミア戦争の時分に、英吉利、イギリス フランス、仏蘭西、伊太利等の士官が数百人コ

ンスタンチノーブルに駐屯ちゅうとんしていたことがあり、彼等のうち

には土耳其トルコの婦人を手に入れたと云つて得意になつた者も少くな

かつたが、実はその中に一人の土耳其人もいなかったに違いない

と私（バアトン）は信じる。彼等に征服された女は悉くギリシアことごと

人か、ワラキア人か、アルメニア人か、さもなければ猶太人ユダヤであ

る」

「このところはこの美しく物語られた美しい物語中での唯一の汚点で、レーンが此処を訳したために擯ひんせき斥されたのは一往当然なことである。……………」

要ははつとして、とうとう見付けたなど思いながら、急いでその注を読み下した。――

「……………レーンが此処を訳したために……………一往当然なことである。しかし此処でもその猥わいぎつ雑さは、われわれの古い時代の舞台のために書かれた戯曲（たとえばシェークスピアのヘンリー五世の如き）に比べてみて大した相違はないであろう。ましてこの夜話のような物語は、男女の席で朗読されたり暗あんしやう誦しようされたりするものではないのである」

要はこの注の附いている「バグダツドの三人の貴婦人と門番の話」と云うのを直ぐ読みかけたが、ものの五六行も進んだ時分に茶の間の方から足音が聞えて、そこへ高夏が這入つて来た。

「君、アラビアン・ナイトは後にしないか」

「どうしたんだい？」

と云いながら、要はソファから起きようともせず、残り惜しそうに開いたままの本を脚の上に伏せた。

「意外なことを聞いて来たんだよ」

「意外なことつて？……」

二三分間、黙つて高夏はテーブルのまわりを往つたり来たりした。葉巻の煙が、その歩いたあとに霞かすみのようなすじを曳ひいた。

「美佐子さんには何も将来の保証がないんだそうじゃないか」

「将来の保証が？……………」

「君も呑気のんきだが、美佐子さんも呑気過ぎる。……………」

「何だよ一体？ 藪やぶから棒でちよつと分りかねるんだが、……………」

「阿曾との間に、いつまでも愛情が変らないと云う約束はしてない。阿曾は恋愛と云うものは飽きる時もあり得るんだから、将来のことは約束出来ない」と云っているし、美佐さんもそれを承知だと云うんだ」

「ふうむ、……………そう云うことを云いそうな男ではあるんだがね。……………」

要はどうとうアラビアン・ナイトを思い切って、やっとソファか

ら身を起した。

「しかし、………僕は直接知らんのだからどうとも云えないが、………そんなことを云う男は不愉快だな。見ように依つては随分悪く取れなくもない」

「けども君、悪い奴なら女の機嫌きげんを取るようなことを云うだろうが、それをそう云わないところに正直さがありはしないか」

「僕はそう云う正直は嫌いだ。正直じゃあない、不真面目なんだ」
 「君の性質ではそうだろう。しかしどんなに思い合つた仲だつていつかは飽きる時が来る。永久に同じ愛情で通そうと云うのは無理なんだから、約束出来ないと云うのにも理窟はあるよ。僕が阿曾でもやっぱりそう云うかも知れんね」

「それじゃ飽きたらば又別れるでいいのかい？」

「飽きると云うことと、別れると云うこととは別さ。飽きたからって、又おのずから恋愛ではない夫婦の情愛が生ずると思う。大概の夫婦はそれでつながっているんじゃないか」

「阿曾と云う男が立派な人間でありさえすればそれでよかろう。けども飽きたからと云って放り出されたらどうなるんだ。その保証が附いていないんじゃないか」

「まさか、そんな悪い人間じゃあないだろうよ。………」

「一体、こうなる前に秘密探偵にでも頼んで調べたことがあるのかね？」

「秘密探偵に頼んだことはない」

「じゃ外の方法でも調べたかね」

「別に特に調べると云うようなことはしなかった。……そう云うことは僕は嫌いだし、つい面倒だもんだから、……」

「君と云う人にも呆れるな^{あき}」

高夏は吐き出すように云った。

「——相手はたしかな人間だと云うから、無論一と通り調べてあるんだと思つたんだが、それじゃあんまり無責任じゃないか。若しも色魔のような奴で、美佐子さんを欺^{だま}しているんだつたらどうするんだい？」

「そう云われると何だか不安になるけれどね。……しかし会つた時の感じでは、大丈夫そう云う奴じゃあないよ。それに僕は、

阿曾よりも実は美佐子を信じているんだ。美佐子は子供じやあな
いんだから、善い人間か悪い人間か見分けるぐらいの分別はある
だろう。美佐子がたしかだと云うんだから、それで安心している
んだ」

「そいつは余りアテにはならんね。女と云うものは^{りこ}伶俐なようでも馬鹿だからな」

「まあ、そう云うなよ、僕は成るべく悪い場合を考えないようにしているんだから」

「そう云うところが君は実にやりっ放しで、変な人だな。そう云う点を^{あいまい}曖昧あいまいにしておくから別れるのにも思い切りが悪くなるんだ」

「けど、………最初に調べりやあよかつたんだが、今になつちやあ仕方がないな」

要はまるで他人事ひとごとのように云い捨てながら、再びものうげにソファへ倒れた。

いったい阿曾と美佐子とのあいだにどれほどの情熱が燃えているものか、要には想像が付かないのである。それを想像することはいくら冷やかな夫であつても面白かろう筈はずはないので、ときどき好奇心の動くことはありながら、彼は努めてその臆測から眼を閉じていた。そもそもその起りはぎつと二年も前のことである。或る日大阪から帰つて来ると、ヴェランダで妻と相對している見馴みなれない一人の客があつて、「阿曾さんという方」と美佐子が簡単に

引き合わせた。と云うのは、夫は夫、妻は妻で、めいめい交際の範囲を作つて自由な行動を取ることがいつしか習わしになつたので、別にそれ以上の説明は必要でなかつたからだけれども、その頃彼女は退屈しのぎに神戸へ仏蘭西語の稽古けいこに行つていて、そこで友達になつたらしい話しぶりであつた。要には当時ただそれだけが分つただけで、その後妻の身だしなみが前よりは念入りになり、鏡の前に日々新しい化粧道具がふえて行くようになったことなどは、全く見落していたくらい無頓着むとんじやくな夫だったのである。彼が初めて妻の素振りに気が付いたのは、それから一年近くも過ぎてからだつた。或る晩彼は、額の上まで夜着をかぶつて寝ている妻が、かすかにすすり泣くのをきくと、長いことそのす

り泣きを耳にしながら明りの消えた寢室の闇を視つめていた。妻が夜中に嗚咽おえつの声を漏らすことは、それまでも例がなかった訳ではない。結婚してから一二年の後、次第に性的に彼女を捨てかけていた当座、かれはしばしば女心の遣やる瀬なさを訴えているこの声に脅かされた。そうして声の意味が分れば分るほど、可哀そうだと思えば思うほど、なおさら自分と妻との距離の遠ざかるのが感ぜられ、慰める言葉もないままに黙ってそれを聞きすごしたものであった。彼はこれから生涯のあいだ、何年となく夜な夜なこの声に脅かされることを思うと、もうそれだけでも独ひとり身になりたかったのであるが、いいあんばいに妻は段々あきらめてしまつて、それから数年来と云うものはついぞ聞かずに済んでいたの

にそれをその晩は久しぶりで聞いたのである。彼は最初は自分の耳を疑い、次には妻の心を訝あやしんだ。今更になつて何を彼女は訴えようとするのであろう。あきらめたように見えたのは実はあきらめたのではなく、いつかは夫の情なさけのかかる折もあろうかと長い歳月をこらえていたのが、とうとう待ちきれなくなつたのである。うか。彼は「何と云う馬鹿な女だ」と腹立たしくさえ感じながら、矢張昔のようにだまつてそれを聞き過した。が、そののち毎晩のようにすすり泣くのを止めないのが余りにも不思議なので、「うるさいじゃないか」と、一ぺん叱しかつてみたことがあつた。すると美佐子は彼の叱しつたをキツカケにして一層声を放つて泣いた。「堪か忍にして下さい、あたしあなたに今日まで隠していたことがあるの

よ」——と、その声の下から彼女は云った。それは要には意外でないことはなかつたけれども、同時に繫縛けいばくを解かれたような不意に肩の荷が除かれたような気安さを与えないでもなかつた。自分はやつとひろびろとした野原の空気を胸一杯に吸うことが出来る、——彼はそう思つたばかりでなく、その時蔭しとねに仰向けあおむになつて、實際ふかぶかと肺の底まで息を吸つた。彼女の愛は、今までのところでは心臓だけのものであつて、それ以上には進んでいないと云うことだつたし、彼もその告白を疑いはしなかつたけれども、しかしそれにしても道德的に彼の負いめを相殺そうさいするに事は足りた。彼女にそう云うものが出来たのは、自分が仕向けたからではないか、——そう考えると己おのれの卑劣とがさを咎とがめない

訳には行かなかつたが、正直のところ、いつかはこう云う時の来るのをひそかに望んでいただけであつて、そんな望みを口へ出したこともなければ、進んで機会を作つてやつた覚えもない。ただどうしても妻を妻として愛し得られない苦しさの余りには、この気の毒な、可憐かれんな女を自分の代りに愛してくれる人でもあつたらばと、夢のような願いを抱きつつあつたに過ぎない。しかも美佐子の性質を思うと、よもやその夢が事実にならうとは予期していなかったのであつた。妻も阿曾の事を打ち明けてから、「あなたにも恋人があるんじゃないの？」ときいた。今では彼女も彼が望むと同じようにそれを望んでいたのであろう。けれど要は、「僕にはそんな者はない」と答えた。彼が彼女に済まない事をしてい

るのは、妻には貞操を守らせながら自分は守っていないと云うこと、——「そんな者はない」にも拘かかわらず、ほんの一時の物好きと肉体的の要求とから、いかがわしい女を求めに行くと言うことだけだった。要に取つて女というものは神であるか玩具がんぐであるかの孰いずれかであつて、妻との折り合いがうまく行かないのは、彼から見ると、妻がそれらの孰れにも属していないからであつた。彼は美佐子が妻でなかつたら、或は玩具になし得たであろう。妻であるが故にそう云う興味が感ぜられなかつたのもあろう。

「僕はそれだけ、まだお前を尊敬しているんだと思う。愛するところとは出来ないまでも慰み物にはしなかつたつもりだ」と、要はその晩妻に語つた。「そりやあたしだつてよく分つてゐるわ。有り

がたいときえ思っているわ。………だけどあたしは、慰み物にされてでももつと愛されたかつたんです」妻はそう云つて激しく泣いた。

要は妻のその告白を聞いてからでも、決して彼女を阿曾の方へとそそのかすようにはしなかつた。ただ自分には妻の恋愛を「道ならぬ恋」であるとする権利はない、自分はそれが何処まで進展しようとも、是認するより仕方がないと云う意味を云つた。が、そう云う彼の態度が間接に美佐子をそそのかす働きをしたことは確かであろう。彼女の求めていたものは、そう云う夫の物分りのよさ、思いやりの深さ、寛大さではないのであつた。「あたし自分でもどうしていいか分らないで、迷っているのよ。あなたが止よせ

と云つて下されば今のうちなら止せるんです」と彼女は云つた。

もしその時に圧制的にでも、「そんな馬鹿なことは止せ」と云つてくれたらば、その方がどんなに嬉しかったであろう。「道ならぬ恋」だとは云われないまでも、せめて「為めにならないから」

とでも云つてくれたら、それだけで阿曾を思い切りもしたであろう。彼女の望んでいたものはそれであつた。自分をこうまで疎^{うと}んじている夫から、愛されようとは願つていなかったものの、どうにでもして自分の恋を抑えつけてもらいたいのが本心であつた。

しかし夫は「どうしたらいいでしょう?」と詰め寄つて行くと、

「どうしていいか僕にも分らない」と、ためいきをつくばかりであつた。そうして阿曾の出入りすることにも、彼女の外出が頻^{そとで ひんば}あつた。

繁んになり帰りがおそくなることにも、何一つ干渉もしなければ厭いやな顔も見せなかった。彼女は生れて始めて知った恋と云うものを、自分でどうにか始末するより道がなかった。

すすり泣きのこえがその夜の告白のあつたのちにもなおおりおりは寢室の闇にひびいたことがあつたのは、この石のようにつめたい夫から突き放されながら、さすが一途いちぢずに愛慾の世界へ身をおとし込む勇氣もなくて、思い余つた結果であつた。殊ことに男から手紙が来たり、何処ぞで会つて来たりした晩なぞには、夜じゅうしくしくと忍び音に泣くのが夜具の襟えりから洩もれつづけて、明け方になるまで止まなかつた。そして或る朝、「ちよいとお前に話がある」と要が彼女を洋館の階下の部屋へ呼んだのは、それから半年ばか

りも過ぎた時分だったであろうか。テーブルの上の水盤に支那水
 仙が活いけてあつて、電気ストーヴにあたっていたのを覚えている
 から、何でも冬の、美しく晴れた日のことだった。その前の晩も
 やはり夜通し泣きつづけて、彼女も要もほとんど寝られなかつた
 ので、さし向いになつた夫婦は孰どっち方も脹はれぼつたい眼をしていた。
 実は要はゆうべのうちにも口を切ろうかと思つたのだが、弘が眼
 をさます心配もあり、暗い場所だとそれでなくても涙を用意して
 いる妻が一層感傷的になりそうなので、わざとさわやかな朝の時
 間を選んだのであつた。「このあいだから考えていたんだがお前
 に少し相談があるんだ」と、彼が出来るだけ軽快な、ピクニツク
 にでも誘うような気楽な口調で切り出したとき、「あたしもあな

たに相談したいことがあるのよ」と、鸚鵡おうむ返しに美佐子もそう云つて、睡眠不足の眼のふちで微笑しながら煖炉だんろの前へ椅子を寄せた。そして互にその胸の中を打ち明けてみると、二人は大体同じような経過を辿たどつて同じような結論に達していた。とても自分たちは相愛し合うことは出来ない、互の美点は認めているし、性格も理解しているのだから、これから十年二十年を過ぎ、老境にでも入ったらば或は肌が合うようになるかも知れないけれども、そんなアテにもならぬ時を待ったところで仕様がないと夫が云えば、「あたしもそう思う」と妻が答えた。子供の愛ひに惹かされて自分の身を埋れ木にするのが愚かしいと云う考にも二人ながら行き着いていた。けれどそこまでは来ていながら、「別れたいのか」

と一方が問えば、「あなたはどうか？」と一方が問い返す。つまり
 執方も別れた方がいいのを知りつつそれだけの勇気がなく、ただ
 自分たちの弱い氣質を呪^{のろ}つては当惑している状態にあつた。

夫の腹の中を云えば自分の方から妻を追い出す理由はないし、積
 極的に出れば出るだけ寝ざめが悪いに違いないから、なるべくな
 らば受け身でありたい。自分はさしあたり誰と結婚したいと云う
 相手があるのでもないのだが、妻にはそれがあるのだから、妻の
 方から覚悟をきめてもらいたかつた。ところが妻の云い分は、夫
 にそう云う相手がなく、自分ばかりが幸福になるのでは別れづら
 い。自分は夫に愛してもらえなかつたとは云え、夫を無情な人だ
 とは思っていない。上を望めば切りのない話だが、ずいぶん世間

には不仕合わせな妻も多いことだし、それから見れば自分などは愛せられないと云うだけで外に不足はないのでありながら、その夫を捨て子を捨ててまでもと云うほどの気にはなりきれない。要するに夫も妻も、別れるならば自分の方が捨てられる側になることを願い、どっちも自分が楽な方へと廻りたかった。しかし私たちは子供でもないのに、何がそんなに辛いのだろう。理性のよしとするものを実行することが出来ないのは、何を恐れているのだろう。結局のところは過去のきずなを断ち切るだけのことではないか。その悲しみはただその刹那せつなのものであつて、多くの人の例を見れば、長いあいだにはだんだんうすらいで行くのである。

「僕たちは先のことよりも目前の別れが恐こわいのだね」と、夫婦は

語り合つて笑つた。

要は最後に、「では僕たちは自分たちにも分らないように極く少しずつ別れる手段を取ろうではないか」と云う提議をした。昔の人は離別の悲しみに打ち克かてないのは児女の情だと云うかも知れない。けれども今の人間はたとい僅わずかな苦痛にもせよ、もしそんなものを味あじわなわないで同じ結果が得られるならば、その道を取るのを賢いとする。自分たちは自分たちの臆病を耻はじるにはあたらないい。臆病ならば臆病のようにそれに適応した方策に依つて幸福を求めろがいい。そこで要はあらかじめ頭の中へ箇条書きにしておいた下のような条件を出して、「こうしてみたらどうか」と云つた。

一、美佐子は当分世間的には要の妻であるべきこと。

一、同様に阿曾は、当分世間的には彼女の友人であるべきこと。

一、世間的に疑いを招かない範囲で、彼女が阿曾を愛することは精神的にも肉体的にも自由であること。

一、斯^かくして一二年の経過を見、愛し合う二人が夫婦になつてうまく行きそうな見込みがつけば、要が主となつて彼女の実家の諒^{りようかい}解を得るようにし、世間的にも彼女を阿曾に譲ること。

一、それ故ここ一二年の間を彼女と阿曾の愛の試験時代とする。もしその試験が失敗し、両者のあいだに性格の齟齬^{そご}が発見され、結婚しても到底円満に行かないことが認められたら、

彼女はやはり従来の通り要の家にとどまること。

一、幸いにして試験の結果が成功し、二人が結婚した場合には、
要は二人の友人として長く交際をつづけること。

彼はそれを云い終ったとき、妻の顔色がちようどその朝の空のようにかがやきに充ちて来るのを見た。彼女は一言「有りがとう」と云った。その眼瞼まぶたからはほたりと嬉し涙が落ちた。ほんとうにそれは何年ぶりかで心の底からわだかまりが取れ、始めてほっと天日を仰いだと云う風であつた。妻のよろこびを知つた夫も同じように胸のつかえが下つた気がした。連れ添うてから長のとしつき奥歯に物の挟まったような心地でばかり過して来た夫婦は、皮肉にも別れ話の段になつてようよう互にこだわりがなく打ち解け

ることが出来たのである。

云うまでもなくそれは一種の冒険ではあるけれども、しかしそう云う風にして眼をつぶりながら次第に抜き差しのならないハメへ身を落し込んで行くのでなければ、夫も妻も別れる道はないのであつた。阿曾もそれには異存のあろう筈はなかつた。要は彼にその考を打ち明けたとき、「西洋ならばこう云うことはそうやかましい問題にもならない国があるでしょう。けれど日本の今の社会ではなかなかそうは行きにくいから、この計画を實行するには余程上手に立ち廻らなければならぬと思います。それには何よりもわれわれ三人が互にかたく信じ合うことが第一だ。どんなに親しい友達の中でもこの問題ではとかく誤解が起りやすい。われわ

れはめいめいずいぶんデリケートな関係に立っているのだから、互の感情を傷け^{きずつ}ないように、そして一人の不注意のために外の二人が窮地に陥ったりしないように、よくよく気をつけて行かなければならない。どうかあなたもそのつもりでいて下さるようにと念を押したが、その相談の結果として阿曾は成るべく要の家庭へは姿を見せないようになり、美佐子の方から「須磨へ行く」ことになったのであった。

その時以来要は二人の關係に文字通り「眼をつぶって」しまった。もうこれでいい、このままじつとしていれば自分の運命はひとりでにきまる。——彼は流れに身をまかせて、事の成り行きが運んでくれるところまで、素直に、盲目に、くつついて行くように

努める以外に、自分の意志を働かせようとしなかった。ただそう
なつてもなお恐ろしいのは試験時代の期間が過ぎて、いよいよと
云う最後の時が迫りつつあることだった。いかになだらかに、ず
るずるべつたり押し流されて行こうとしても、一度は別離の場
面を回避することは出来ない。見わたしたところ穏かなような船
路にも、或る一箇所つぶで暴風帯をくぐらなければならぬのである。
そこへ来た時は潰つぶつている眼をどうしても開けさせられるのであ
る。そう云う予感つぶは臆病な彼をますます一時逃れにさせ、やりつ
放しにさせ、横着にさせる結果となつた。

「君は一方では別れるのが辛い辛いと云う、そして一方ではそん
な無責任なことをしている、それじゃあだらしがなさ過ぎるな」

「だらしがないのは今に初まったことじゃあないさ。——しかし僕は思うんだが、道徳と云うものは個人々々で皆いくらかずつ違っていい。人は誰でもその性質に適するような道徳を作つて、それを実行するより外に仕方がないね」

「そりゃあその通りに違くないが、——で、君の道徳ではだらしのないのが善だと云うことになるのかね？」

「善ではないかも知れないが、生れつき決断力の乏しい者は強しいて性質にさからつてまでも決断する必要はない。そう云うことをしようとすると、徒らいたずらに犠牲が大きくなって、終局に於いて却つて悪いことが起る。だらしのない人間はやはりだらしのない性質に応じて進退する道を考えるべきだ。そこで僕の道徳を今の場合

にあてはめると、別れると云うことが終局の善なんだから、最後にそこへ行けさえすれば過程はどんなに廻りくどくつても差支えない、僕は実はもつとだらしがなくつても構わないと思つているんだ」

「そんなことを云つていると、終局の善に達するまでに一生かかつてしまふかも知れんぜ」

「ああ、僕は真面目にそれを考えたことがあるんだよ。西洋の貴族の間ではかんつう姦通は珍しくないという。しかし彼らの姦通というのは夫婦が互に欺き合つているのではなく、暗黙のうちに認め合つている場合、——つまり現在の僕の場合と同じようなのが多いんじゃないか。日本の社会が、許しさえすれば僕は一生この状

態をつづけていたっていいんだけれどな」

「西洋だつてそんな流儀は時勢おくれだよ、宗教の威力がなくなつてしまつてゐるんだから」

「宗教に縛られてゐるばかりじゃあない、やっぱり西洋人にして
も過去のきずなを余りに判然と断ち切るのが恐ろしいんじゃない
のかな」

「どうしようと君の勝手だが、僕はもう御免を蒙こうむるぜ」

そうにべもなく云い放ちながら、床に落ちたアラビアン・ナイト
を、今度は高夏が拾つた。

「なぜ？」

「なぜって、分り切つてるじゃないか。そんな曖昧な離縁話に他

人が口を挟みようはないじゃないか

「そりやあ困る」

「困るのは仕方がなからう」

「仕方がなくつてもとにかく君に逃げられちやあ困る。捨てておかれるとなお曖昧になるばかりだ。ね、後生だから頼むよ」

「まあ、まあ、今夜弘君を連れて東京へ行つて来るよ」

高夏は取り合わないで、そっけなくページを繰った。

その九

「うぐいすも、都の春にあいたけど、きは淀川よどがわへ上り舟のぼ、……

…」

お久はいと絃を三二下りにして地唄の「あやぎぬ」をうたっていた。

老人はこの唄が好きなのである。地唄と云うものは概して野暮なものであるのに、この唄には何処か江戸の端唄はうたのような意気なところのあるのが、上方に降参したようでも本来は江戸育ちである老人の趣味に合うのかも知れない。そして「上り舟、……」のあとの合いの手がいい。平凡なようだが、じつと身にしみて聞いていると淀川の水の音がひびくようだと云う。

「……きは淀川へ上り舟、ささえられたる北風に、身はままならぬ丸太ぶね、岸の柳に引きとめられて、歩みならわぬ陸地をも、上りつ戻り幾たびか、一と夜をあかす八軒家、雑魚寝ざこねをおこす網あ

嶋みしまの、告からすぐる鳥か寒山寺、………」

明け放たれた二階の縁からは船着き場に沿うた一とすじの路みちをへだててもう暮れがたの海のけしきが展ひらけていた。淡たんの輪わがよいの船であろう、「紀淡丸」と記した汽船が棧さんぼし橋を離れて行くのだが、四五百噸トシにも足らないほどの船体がぐるりと船首を向き変えるとき、入り江の岸が船尾と擦れ擦れになるくらいにもその港は小さいのである。要は縁側に座布団ざふとんを敷いて、港の出口をふさいでいる砂糖菓子のように可愛いコンクリートの防波堤を眺ながめた。堤の上の同じように可愛い燈籠とうろうにはもう灯がともっているらしいけれど、水の面はまだ浅黄色あせぎに明るく、二三人の男の燈籠の根もとにしゃがんで釣りを垂れているのが見える。別に絶景と云う

のではないが、しかしこう云う南国的な海辺の町の趣は、決して
 関東の田舎いなかにはない。そう云えばいつぞや常陸ひたちの国の平瀨ひらかたの港
 に遊んだ時、入り江を包む両方の山の出鼻に燈籠があつて岸には
 ずっと遊女の家が並んでいたのを、いかにも昔の船着場ふなつきばらしい
 感じだと思つたことがあるのは、かれこれ二十年も前だつたらう
 か。が、平瀨の麿はいたい頰たい的なのに比べたら、ここはさすがに晴れや
 かで、享樂的である。多くの東京人がそうであるように執方どちらかと
 云えば出不精の方で、めつたに旅行などしたことのない要は、一
 と風呂浴びて宿屋の欄干らんかんに倚よつてゐる浴衣ゆかたがけの自分の姿をか
 えりみると、ほんの海を一つ越えた瀬戸内せとうちの島へ渡つたばかりで、
 なんだか馬鹿にはるばると来たような心地がする。実を云うと、

出がけに老人が誘つた折には彼はそんなに気が進んではいかなかった。何しろ老人の計画と云うのは、お久を連れて淡路の三十三箇所を順礼しようとするのであるから、又してもアテられることであらうし、折角の老人の楽しみを邪魔するでもなし、遠慮した方がいいと思つたのに、「なに、そんな気がねには及ばない、私たちは洲本すもとに一日二日泊まつて、人形芝居の元祖である淡路浄瑠璃じょうろうりを見物する。それから順礼のいでたちになつて霊場廻りをするのだから、せめて洲本まで付き合いなさい」と、老人もすすめればお久も口を添えたので、この間の文楽座の印象もあり、その淡路浄瑠璃について好奇心が動いたのであつた。「まあ、酔興ね、それじゃあなたも順礼の支度をなすつたらどう」と、美佐子は眉まゆ

をひそめたが、可憐かれんなお久が伊賀越の芝居のお谷のようないじらしい姿になるさまを想うと、それと一緒に御詠歌をうたつて鈴を振りながら旅をしようという老人の道楽が、ちよつと羨ましくな
 いこともなかつた。聞けば大阪の通人なぞのあいだでは、好きな芸者を道連れに仕立てて、毎年淡路の島めぐりをする者が珍しくないと云う。そして老人も今年を皮切りにこれから年々つづけると云つて、日に焼けるのを恐れているお久とは反対にひどく乗り気になつていたのであつた。

「何とか云いましたね、今の文句は？『一と夜をあかす八軒家』か。——その八軒家と云うのは何処にあるんです」

べっこう色の水牛の撥ぼちを畳の上にお久が置いたとき、老人は宿の

浴衣の上へ、五月と云うのに藍あいみじん微塵の葛くずおり織あわせの袷羽織を引つかけて、とろ火にかけてある錫すずの徳利にさわってみては、例の朱塗りの杯を前に、気長に酒のあたたまるのを待っていたが、

「成る程、要さんは江戸っ児だから八軒家は知らないだろう」と云いながら、火鉢の上の銚ちようし子を取った。

「昔は大阪の天満橋の橋詰から淀川通いの船が出た。その船宿のあつた所なんだね」

「はあ、そうなんですか、それで『一と夜をあかす八軒家、雑魚寝を起す網嶋』ですか」

「地唄と云う奴は長いのは眠くなるばかりであまり感心しないもんだ。やっぱり聞いていて面白いのは、このくらいの長さの唄物

に限る」

「どうです、お久さん、何か今のようなのをもう一つ、……………」

「なあに、これのは一向駄目なんでね」

と、老人は傍から引き取って、

「年の若い女がやると、唄が綺麗になり過ぎていけない。三味線にしてももつときたなく弾ひくようになって、いつも云うことなんだけれど、その心持が呑み込めないで、まるで長唄でも弾くような気でいるんだから、……………」

「そないお云やすなら、あんた弾いてお上げやすな」

「まあ、いい。もう一つお前がやって御覧」

「かなわんわ、わてエ。……………」

お久は甘える子供のよう^いに顔をしかめて、つぶやきながら三の絃^{いと}を上げた。

全く彼女の身になったら口やかましいこの老人の枷^{とぎ}をするのも大概ではなからう。老人の方では眼にも入りたいほど可愛^みがって、遊芸の事、割^{かつ}烹^{ぼう}の事、身だしなみの事、何から何まで研^みぎをかけて、自分が死んだら何処へなりと立派な所へ縁^しづけられるように丹精をこめているのだけれど、そう云う時代おくれの躡^しつけが若い身空の女に取ってどれほどの役に立つであろう。見る物と云えば人形芝居、たべる物と云えば蕨^{わらび}やぜんまいの煮つけでは、お久も命がつづくまい。たまには活動も見たかろうし、洋食のビフテキもたべたいであろうに、それを辛抱しているのはさすがに京都生

れである、要はときどき感心もすれば、この女の心の作用を不
 思議に思うこともある。そう云えば老人は、ひところ投げ入れの
 活け花を覚え込ませるのに夢中であつたが、それがこの頃は地唄
 になつて、週に一度ずつ、わざわざ大阪の南の方に住んでいる或
 る盲人のけんぎよう検校もとの許まで二人で稽古けいこに行くのである。京都にも
 相当の師匠はあるのに大阪流を習うというのは、それにも老人の
 味噌みそがあつて、彦根屏風びやうぶ風の絵姿などからひねり出した理窟りくつで
 もあろうか、地唄の三味線というものは、大阪風に、膝へ載せな
 いで弾くのがいい。どうせ今から習つたのでは上手になろう筈も
 ないから、せめて弾く形の美しさに情趣を酌くみたい。若い女が畳
 の上へ胴を置いて、からだを少しねじらせながら弾いている姿に

は味わいがある、とそう云っては、お久の三味線を聞くと云うよりも眺めて楽しもうというのであった。

「さあ、そう云わないでもう一つどうぞ、……………」

「何にしましよ」

「何でもいいが、なるべく僕の知っているものにして下さい」

「そんなら『ゆき』がいいだろう」

と、老人は杯を要にさした。

「『ゆき』なら要さんも聞いたことがあるだろう」

「ええ、ええ、僕の知っているのは『ゆき』と『くろかみ』ぐらいなもんです」

要はその唄を聞いているうちに、ふと思ひ出したことがあった。

子供の時分、その頃の蔵前くらまえの住居と云うのは、今の京都の西陣
 あたりの店の構えと同じように、表通りは間口の狭い格子造りこうしに
 なっていて、奥の方が外から見たよりはずっと深く、幾間も幾間
 も細長くつづいている先にちよつとした中庭があり、廊下づたい
 にそこを越えて行くと、一番奥のどんづまりに又相当な離れがあ
 った、そこが家族の部屋になつていたのであるが、そう云う同じ
 間取りの家が右にも左にも並んでいたもので、二階に上ると、いたべ板
 塀いの忍び返しいの向うに、隣りの家の中庭が見え、離れ座敷の縁
 側が見えた。……だが、その時分の東京の下町は、今から思う
 と何と云う静かさだつたであろう。おぼろげな記憶ではつきりし
 たことは云えないけれども、あの頃ついで隣りの家の話声らしい

ものを聞いたおぼえがない。忍び返しの塀の向うは、まるで人なぞ住んでいないように、いつもしーんとしてカタリと云う物音一つするではなく、ちようどさびれた田舎の町の土族屋敷へでも行ったような佗わびしさであつた。ただいつ頃のことであつたか、そこからおりおり琴ことの音ねにつれてかすかに唄うこえが洩もれた。その声の主は「福ふうちゃん」と云う児で、器量よしと云う評判が高かつたから要も前から耳にしてはいたものの、それまで一度も顔を見たことはなかつたし、見たいと云う気もなかつたのを、或る日偶然二階から覗のぞいたとき、多分夏のたそがれであつたのだろう、縁側のしきいぎわ 闕あき 際ぎわに座布団を敷いて明け放された葭よしず簀すに背中をもたれながら、蚊柱の立つ夕闇の空を見上げているほの白い顔が、ちら

と此方を向いた。幼心にもその美しさに胸をつかれて凄^{すご}い物でも見たように慌^{あわ}てて首を引つ込めてしまったから、どう云う目鼻立ちであつたか纏^{まと}まつた印象は残らないながら、初恋と云うにはあまりに淡いあこがれに似た快感が、そののち暫く子供の夢の世界を領した。それは少くとも要の中にあるフェミニズムの最初の萌芽^{うが}だつたであらう。彼は今でもその時の彼女が幾つぐらいの歳^{とし}ごろであつたか見当がつかない。七つ八つの男の児に取つては、十四五の娘も二十^{はたち}歳前後の大人と変りなく見えるものだし、ましてや瘦^やせぎすの年増^{としま}のような姿をしていたその児の様子は、ずっと自分より姉に思えた。そればかりでなく、たしか彼女の膝の前には煙草盆^{ぎせる}が置いてあつて、手に長煙管^{ぎせる}を持っていたような気がする

のである。尤もその頃は江戸末期のいなせな風が下町の女に残つていて、もつと要の母なども暑い時分は腕まくりなぞをしたものだから、煙草を吸っていたことが大人であつたと云う証拠にはならないかも知れない。要の家は四五年してから日本橋の方へ移つたので、彼が彼女を垣間見たのは後にも先にもたつた一度だつたけれど、でもそれからには琴のしらべと唄のこえとに一としお耳をそばだてるようになって、彼女が好んで繰り返すのが「ゆき」と云う曲であることを、母から聞いた折があつた。それは琴唄ではあるが、時には三味線に合わせてもうたう。東京ではあの唄のことを上方唄と云うのだと、母が教えた。

そののち彼はその「ゆき」の唄をふつつり耳にしなかつたので、

忘れるともなく忘れるままに十何年かを過ごしてから、ひととせ
 上方見物に来て祇園ぎおんの茶屋で舞妓まいこの舞いを見た折のこと、久しぶ
 りに又その唄を聞くことが出来ていいしれぬなつかしさを覚えた。
 舞いの地をうたつたのは五十を越えた老妓だったから、声にも一
 と通りさびがあつたし、三味線の音色も鈍く、ものうく、ぼんぼ
 んという渋いひびきで、老人がきたなく唄えと云うのはああ云う
 味を求めるのである。あの老妓のに比べれば成る程お久のは綺
 麗ごとに過ぎて含蓄がない。けれど昔の「福ちゃん」も矢張美し
 い鈴のような声でうたつたのだから、要に取つては若い女の肉声
 の方がひとしお思い出をそそのるのである。それにあのぼんぼんと
 云う京風の三味線よりは、お久が弾いている大阪風の三味線の、

調子の高いひびきの方がいくらか琴の音をしのばせるよすがにもなる。ぜんたいこの三味線は棹さおが九つに折れて胴の中へ這入はいってしまう別製のもので、お久と一緒に遊山ゆうざんに行くとき、老人はこれを欠かさず持つて歩くのであるが、宿屋の座敷でならまだしも、興に乗じると街道の茶店の腰掛でも、満開の花の下でも、いやがるお久を無理に促して弾かせると云う風で、去年の十三夜の月見の晩なぞ宇治川を下る船の中でやらせたのはいいが、そのためにお久よりも老人の方が風邪かぜをひいて、あとで非常な熱を出したりしたことがあった。

「さあ、今度はあんたお唄いやしたら、……………」
そう云ってお久は老人の前へ三味線を置いた。

「要さんは『ゆき』の文句の意味がよく分るかね」

と、何気ない体で^{てい}三味線を取って調子を低く直しながら、内々老人は得意の色をつつむことが出来ないのである。東京時代に一節の素養があるせいか、地唄のけいこはほんの近年のことだけでも、わりに巧者に弾きもすれば、唄いもして、しろうとが聞けば、とにかく一種の味わいがあった。そして当人もそれを少からず自慢にしている、いっぱしの師匠のように^{こごと}叱言を云うのが、なおさらお久は助からなかった。

「さあ、いったい昔の唄の文句と云うものは、ぼんやり心持は分るような気がしますけれど、文法的に云つたらば殆ど^{でたらめ}出鱈目じゃあないんですかな」

「そうだよ、全く。……昔の人は文法なんかは考えない。ぼんやり心持が分る、——その程度で沢山なんだね。そのぼんやりとしているところに却って余韻があるんだね。たとえばこんな文句がある、——」

と、老人はすぐ唄い出しながら、「……『今は野沢の一つ水、澄まぬ心の主にもしばし、すむは由縁ゆかりの月の影、忍びてうつす窓の内』……それからあとが『広い世界に住みながら』となるんだが、これは男が女の許へ忍んで来るところなんだ。そいつを露骨に云わないで、『すむは由縁の月の影、忍びてうつす窓の内』と、わざと余情を持たせてあるのがいいじゃないか。お久なんぞはこう云う意味を考えないで唄っているから心持が現れない」

「成るほど、伺ってみるとそう云う意味になるかも知れませんが、それを分つて唄っている人は幾人もありはしないでしよう」

「分らない人には分らないでいい、分る人だけが分つてくれる、と云つた態度で作つてあるのが床ゆかしいと思うね。何しろ昔は大概盲人が作つたんだから、それだけにひねくれた、陰気なところがあるんだよ」

酔わないと唄う気になれないと云う老人は、今がちょうど唄いごろの酔い心地であるらしく、自分も盲人のように眼をつぶつてあとをつづけた。

年寄りの癖の早寝早起きで、まだ宵の口の八時と云うのにもう老人は床を敷かせてお久に肩を揉もませながら眠りに就いたが、廊下

を一つ隔てた部屋に引き取った要は、酒の勢いで無理にも寝入ると布団を被^{かぶ}つてみたものの、いつもの宵つ張りに馴らされた眼がそう容易にはまどろまないで、長いあいだうとうととしていた。本来ならば彼はこのように一人で一室を完全に占領して眠るのが好きであつた。折角安らかに寝ようと思つても同じ座敷に妻が枕を並べていて、例のしくしくとしゃくり上げたりすると、せめて気がねのない所でぐつすり眠りを貪^{むさぼ}りたさに、一と晩どまりで箱根や鎌倉へ出かけて行つては、それこそほんとうに心置きなく、日頃の疲れを十分に伸ばして体を休ませたものであつた。それがこの頃は夫婦が無関心になり切つてしまつて互の存在を意に介しなくなつた結果、同じ部屋でも平気でめいめいが安眠するような

修業が出来、自然一泊旅行に出かける必要もなくなったのであるが、暫くぶりでひとりで寝てみると、廊下を越えてきこえて来る老人夫婦の忍びやかな話ごえの方が、今の妻よりはずっと眠りの妨げになった。と云うのは、さし向いになるとお久に物を云う老人の調子が、まるで別人のように優しく、こわね 声音までが変つてしまつて、——それもはつきり云うならいいけれど、向うでは又要に遠慮があるのであろう、ひそひそとあたりをはばか 憚るように、さも睡たそうに、半分口のうちに、「ふんふん」と甘えるように云うのである。そこへ持つて来て、ぱたん、ぱたん、お久が足腰を揉もんでいる音が枕もとへ響いて来て、それがなかなか止みそうもない。老人が何かくどくど云うのに対して、お久の方は言葉少な

に「へえへえ」と聞いているらしく、ときどき「何々どす」と答えるそのどすと云う語尾だけがぼんやり聞き取れる。要は他人の夫婦仲の睦まじいむつのを見ると、自分たちの身に引きくらべてその幸福が羨ましくもあり、他人事ながら嬉しくもあつて、決してイヤな気は起さないのが常だけれど、この老人の場合のように三十以上も歳の違つた組み合わせのこう云う様子を見せられるのは、予め覚悟あらかじしていたとは云え、やっぱり多少迷惑でないことはない。まして老人が自分の肉身の親であつたら、さぞかし浅ましい気がするであらうと、美佐子がお久を憎む感情が今更分つて来るのであつた。此方こつちは寝られないままにそんなことを考えているうち、老人は間もなく眠りついたらしく、すうすうと云う寢息が聞えた

が、忠実なお久はそれからもまだ按摩あんまの手を休めないで、ぱたん、ぱたんと云う音がようよう止んだのは十時近くであつただろうか。彼はしよざいなさに、向うの部屋の電燈が消えた頃に自分の部屋へ明りをつけた。そして寝ながら端書を書いた。一枚は弘に宛て、絵端書へ簡単な文句を記したものの。一枚は上海シャンハイの高夏へ宛てて、これも出来るだけ簡単に、鳴門なるとの海の景色の横へ細字で七八行にしたためたもの。――

その後そちらの御起居いかが如何。

こちらは君に逃げられてしまつて、あのまま今以て曖昧あいまい模糊もこ。

美佐子は相変らず須磨へ出かける。僕は京都の老人のお供で淡路へ来ている。そして大いに見せつけられている。美佐子はお

久さんを悪く云うが、しかし中々親切なもんだとアテられながら感心している。

カタが附いたら知らせるが、今のところいつになるやら全く不明。

その十

「お早うございます、よろしゅうございますか、——」
と、廊下に立ち止まって声をかけると、

「ええ、構いません、さあさあ」

と云うので、表の座敷へ這入ってみると、宿の浴衣ゆかたに市松の伊達だて

巻姿まきで鏡の前にすわりながら、鬚まげのあたまを梳櫛すきぐしで撫なでている
 お久ひさの傍そばに、老人はビラを膝の上に載せて、老眼鏡のケースを開
 けたところである。晴れ渡った海はじーっと視つめると瞳ひとみの前が
 黒ずんで来るほど真まつ青さおに和ないで、船の煙さえ動かないような感
 じであるが、それでも時たまそよ風を運んで来るらしく、障子の
 破れが紙鳶たこの呻うなりのように鳴って、膝の上のビラがかすかにお
 られる。

内務省免許 淡路源之丞大芝居

洲本町物部常盤橋詰ときわばし

三日目出物

しょうつし
生 写 朝がほ日記

□初幕宇治ノ里 螢ほたるがり狩ノ段

□明石舟別レノ段

□弓ノ助屋敷ノ段

□大磯揚屋ノ段

□摩耶まやケ嶽たけノ段

□浜松小屋ノ段

□戎屋徳右衛門宿屋ノ段

□道行みちゆきノ段

太功記十段目 (追抱)

お俊伝しゅん兵衛 (追抱)

(追抱)

吃ども又また平へい

大阪文楽 豊竹呂太夫

一人前五拾錢均一 但シ

通券御持参ノ方ハ参拾錢

「お前、『大磯揚屋の段』と云うのを見たことがあるかい？」

「何の狂言どす、それは？」

「朝顔日記だよ」

「見たことおへん。——そんなところおすやろか」

「だからさ、こう云う所は文楽あたりじゃあめつたに出さないん

だと見えるね。次には『摩耶ヶ嶽の段』と云うのがある」

「そら、深雪みゆきがかどわかされるとこと違いますか」

「ふん、そうかそうか、かどわかされて、それから浜松の小屋になる。——とすると『真葛ヶ原の段』と云うのがありやしなかつたかい？……ねえ、お前、……」

「……………」

光の反射が座敷の四方をきらりと一と廻りした。お久が梳櫛を口にくわえて、一方の手の親指を右の鬢びんのふくらみの中へ入れながら、合わせ鏡をしたのである。

要かなめは実はまだこの女のほんとうの歳を知らなかった。老人の好みで、風通だとか、一楽いちらくだとか、ごりごりした鎖のように重い縮ちぢ

りめん
 緬の小紋だとか、もう今の世では流行はやらなくなつてしまつたものを五条あたりの古着屋だの北野神社の朝市などから捜して来ては、その埃ほこりくさいぼろのようなのをいやいやながら着せられて、地味に地味にと作つていたので、いつも二十六七に見えるのだけれど、——そして老人との釣り合い上、聞かれればそのくらいに答えるように云いふくめられているらしいけれど、——鏡を支えた左の手の、指紋がぎらぎら浮いている桜色の指先のつやつやしさは、あながち髪かみの油のせいばかりではなからう。要は彼女彼女のこう云う姿を見せられるのは始めてであるが、薄着の下にほぼ在りどころが窺うかがわれる肩かたや臀しりのむっちりとした肉しし置きは、この上品な京生れの女には気の毒なくらい若さに張り切つて、二十二三

——と云う歳頃をはつきり語っているのである。

「それから『宿屋の段』のあとに『道行の段』がありますね。——

「ふん、ふん」

「朝顔日記の道行きと云うのは初耳ですが、しまいに深雪の思いがかなって、駒沢と旅でもするんですか」

「いや、そうじゃない、わたしはこりやあ見たことがある。——

——ほれ、『宿屋』の次が大井川の川留めで、あれから深雪が川を渡って、駒沢のあとを追いなから東海道を下るんだよ」

「道行きの相手はいないんですか」

「いや、それがほら、川留めの所へ国もとから駈^かけ付けて来る何

助とか云う若党があつたね、——」

「関助どすやろ」

もう一度鏡がきらりと光つて、癖直しの湯を入れた金盥かなだらを片手に、お久は立つて廊下へ出た。

「そうそう関助、——あれが附いて行くことになる、つまり主従の道行きだな」

「もうその時は深雪は盲目めくらじゃあないんですね」

「眼があいちまつて、もとの侍の娘になつて、綺麗ななりをして行くんでね。千本桜の道行きに似ているちよつと花やかないもんだよ」

芝居はこの町はずれの空地に小屋がけを拵こしらえて、そこで朝の十時

ごろから晩の十一時、——どうかすると十二時過ぎまでやって
いる。とても初めから御覧になるのは大変だから、日の暮れから
がちようどよろしゅうございますと宿の番頭がそう云うのを、い
いえ、わたしはこれが目的で来たんだから、朝御飯をすましたら
直きに出かけます、お昼と晩はこの重箱に用意して貰いましょう
と、それを楽しみの一つにしている老人は例の蒔絵まきえの弁当箱を預
けて、幕の内に、玉子焼に、あなごに、牛蒡ごぼうに、何々の煮しめに、
……と、おかずの注文までやかましく云つて、それが出来て来
ると、

「さあ、お久や、支度をしな」

と、急せぎ立てるのであった。

「ちよつと、此処ここをきつうに締めとおくれやす」

ごわごわした、折り目から切れて行きそうな地のしつかりした八反あわせの袷あわせのうえに、これも相当に硬張こわばつたものらしく袈裟けさのようにざくざくする帯を、云われないうちに締め直しにかかつていたお久は、そう云いながら老人の方へ結びめを向けた。

「どうだね、このくらいかね？」

「へえ、もうちよつと、………」

前のめりになろうとするのを腰で粘って受け止めているお久のうしろで、老人は額に汗を浮かした。

「どうも此奴は突つ張っているんで、締めにくいったらない。：

………」

「そないお云やしたかて、あんたが買うておいでたんやおへんか。わてエかてかなわんわ、しんどうて。……」

「だがいい色をしていますな」

と、同じようにうしろに立ちながら、要は感嘆の声を発した。

「何と云う色だか、この頃の物にはあんまり見ないじゃありませんか」

「なあに、やつぱり萌黄もえぎの系統なんで、今の物にもないことはないんだが、こう色がさめて古くなつたんで味が出たのさ」

「何ですか、物は？」

「繻珍しゅちんだろうね。昔の織物は何でもこの通りごりごりしている、

今のはどんな物だつて大概人絹が這入つてゐるんだから、……」

乗り物で行くほどでもないのでめいめいが重箱や折詰の包を提げながら出かけたが、

「もう日傘がいりませんなあ」

と、お久は照りつけられるのを恐れて手をかざした。日はそのうすい手のひらの撥ばちだこのある小指の肉を傘の紙ほどに赤く透して、暗く翳かげっている顔が日のあたっている頤あごの先よりも一層白い。どうせ今度は真っ黒に焼ける、傘なぞ持って来ないがいいと云われながら、手提げの底へ忍ばせて来たアンチソラチンを出がけにそつと、顔、襟えり、手頸てくび、足頸あしにまで塗っているのを見た要は、この京女が絹ごしの肌をいたわる苦心をいじらしくも笑止にも感じたが、道楽の強い老人はこまかいことに気が廻るようできて、自分

がこうと云い出したら案外そう云う思いやりが乏しいのである。

「あんた、早う行かんと十一時どすえ」

「ふん、まあちよつと待ちな」

と、ときどき老人は骨董屋の前で立ち止まる。

「ほんまに今日はええお天気どすな」

と、要と一緒にそろりそろり先へ行きながら、お久は晴れわたつた空を仰いで、

「こう云う日には摘み草がしとうて、………」

と、不平らしく口のうちで云った。

「全く、芝居よりは摘み草に持って来いと云う日だ」

「何処ぞこら辺に蕨わらびやつくしの生えてるとこおすやろか」

「さあ、この辺は知らないが、鹿ヶ谷しし たにの近所の山にいくらだってあるでしょう」

「へえ、へえ、たあんと生えています。先月は八瀬やせの方まで摘みに行って、露ふきのとうを仰山採って帰りました」

「露のとうを？」

「へえ、——露のとうがたべたいお云やすけど、京都では市場へ行たかておへん、だあれもあの苦いもんようたべる人おへんよつて」

「東京だつてみんながみんな食べる訳じゃありませんがね。——それでわざわざそいつを摘みに行つたんですか」

「へえ、これぐらいの籠かごに一杯、——」

「摘み草もいいが、田舎の町をぶらぶら歩くのも悪くないですな」
青空の下を真つすぐ伸びている一とすじ路の町通りは、往来の人影が先の先まで数えられるほど朗らかに、たまにすれちがう自転車のベルの音さえいのかである。別に特長のある町ではないが、関西は何処へ行っても壁の色がうつくしい。老人の説だと、関東は横なぐりの風雨が強いので、家の外側はみな板がこいの下見したみにする。しかもその板がどんな上等な木を使っても直きに黒くよごれてしまうから全体が非常にきたない。トタン屋根にバラツクの今の東京は論外として、近県の小都会など、古ければ古いなりに一種のさびが附く筈はずであるのに、ただもうすすけて陰気なばかりだ。そこへ持って来てたびたびの地震や火事で、焼けた跡に建て

られるのは北海松かいらまつや米材べいざいの附け木のように白つちやけた家か、
 アメリカアメリカの場末へ行ったような貧弱なビルディングである。たと
 えば鎌倉のような町が関西にあつたとしたら、奈良ほどには行か
 ないとしても、もっと落ち着いた、しつとりとした趣があるう。
 京都から西の国々の風土は自然の恵みを授かることが深く、天の
 災わざわいを受ける度が少いので、名もない町家や百姓家の瓦どべいや土塀どべいの色
 にまで、旅人の杖をとどめさせるに足る風情ふぜいがある。殊に大都会
 よりも昔の城下町くらいな小さな都市がいい。大阪は勿論もちろん、京
 都でさえも四条の河原があんな風に変つて行く世の中に、姫路、
 和歌山、堺、西宮、と云つたような町は、未だいまに封建時代の倂おもかげを
 濃く残している。……………

「箱根や塩原がいいなんて云ったって、日本は島国の地震国なんだから、あんな景色は何処にでもある。大^{だい}毎^{まい}が新八景を募った時に『獅子岩^{ししいわ}』と云うのが日本じゆうに幾つあつたか知れないそうだが、実際そんなものだろうよ。やっぱり旅をして面白いのは、上方から四国、中国、——あの辺の町や港を歩くことだね」とある四辻を鍵^{かぎ}の手に曲っている佗^わびた荒壁の塀の屋根の、丸瓦の上からのぞいているうつぎの花を眺^{なが}めたとき、要は老人のこの言葉をおもい出した。淡路と云えば地図の上では小さい島だし、そのこの港のことだから、多分この町は今歩いて一本道で尽きるであろう。ここを何処までも真つすぐに行く^と川の流れへ出る、人形芝居はその向う河岸の河原でやっているのだと、番頭は

云っていたから、川まで行けば家並やなみが終つてしまうのだろう。旧幕の頃には何と云う大名の領地であつたか、無論城下と云うほどのものではなかつただろうが、町はその時分の有様とそう變つてもいまいやうに思える。いつたい都市の装よそおいが近代的になりつつあると云うことは、国の動脈を成すような大都会に於ける現象であつて、そんな都会は一つの国家にそう沢山はあるものではない。亜米利加のような新しい土地は別として、古い歴史を持つ国々の田舎の町は、支那しなでも欧羅巴ヨーロッパでも、天災地変に見舞われないう限り文化の流れに取り残されつつ、封建の世の匂においを伝えているのである。たとえばこの町にしても、電線と、電信柱と、ペンキ塗りの看板と、ところどころの飾り窓とを気にしなければ、西

鶴の浮世草紙の挿絵さしえにあるような町家を至る所に見ることが出来る。軒の垂木たるきまでも漆喰しっくいで包んだ土蔵作りの店の構え、太い角材を惜しげもなく使った頑丈がんじょうな出格子でごうし、重い丸瓦でどつしりとおさええた本葺ほんぶきの葺いらか、「うるし」「醤油」「油」などと記した文字の消えかかっている櫺けやきの看板、土間の突きあたりに吊つつてある屋号を染め抜いた紺暖簾のれん、——老人の云いぐさではないけれども、そう云うものはどんなに日本の古い町に情趣を与えているか知れない。要は青空をうしろにして白く冴さえている壁の色に、しみじみ心が吸い取られるような気がした。それはあたかもお久の腰に巻かれている繻珍の帯と同じことだ。澄んだ海辺の空気の中で長いあいだ風雨に曝さらされ、自然につやを消された色である。

ほつかりと明るく、花やかでありながら渋みがあつて、じつと見ていると胸が安まるようになる。

「こう云う昔風の家は奥が真つ暗で、格子の向うに何かあるやらまるで分りませんね」

「一つは往来が明る過ぎるんだね、この辺の土はこの通り白ツちやけているから。……」

ふと要は、ああ云う暗い家の奥の暖簾のかげで日を暮らしていた昔の人の面ざしおもを偲しのんだ。そう云えばああ云う所にこそ、文楽の人形のような顔立ちを持った人たちが住み、あの人形芝居のような生活をしていたのであろう。どんだろの芝居に出て来るお弓、阿波あわの十郎兵衛、順礼のお鶴、——などと云うのが生きていた世

界はきつとこう云う町だったであろう。現に今ここを歩いているお久なんかもその一人ではないか。今から五十年も百年も前に、ちようどお久のような女が、あの着物であの帯で、春の日なかを弁当包みを提げながら、矢張この路を河原の芝居へ通ったかも知れない。それとも又あの格子の中で「ゆき」を弾いていたかも知れない。まことにお久こそは封建の世から抜け出して来た幻影であつた。

その十一

淡路の人に云わせると人形浄瑠璃はこの嶋が元祖であると云う。

今でも洲本から福良へかよう街道のほとりの市村と云う村へ行けば、人形の座が七座ほどある。昔はそこに三十六座もあつたくらいで、俗にその村を人形村と呼んでいる。いつの時代のことであつたか、都を落ちて来てこの村に居を構えた公卿が、有りのすさびに傀儡くぐつを作りそれを動かしたのが始めて、有名な淡路源之丞あわじげんのじょうと云うのはその公卿の子孫であるそうな。その一家は今日でも村の旧家として通り、立派な邸やしきに住んでいて、この島だけでなく、四国路や中国路まで興行に出かけるのであるが、しかし座を持っているのは源之丞の一族ばかりではない。大袈裟おおげさに云えば一村ごとく義太夫語りか、三味線弾ひきか、人形使いか、太夫元たゆうもとかでない者はなく、それらの人々は農繁期には畑へ出て働き、百姓

の仕事が暇になる季節にそれぞれ一座を組織して島の此処こゝ彼処かしこを打つて廻る。だからこれこそほんとうの意味での、純粹に郷土の伝統から生れた農民芸術であると云えよう。芝居は大概年に二回、五月と正月とに催されるので、その時分にこの島へ渡れば、洲本、福良、由良ゆら、志筑等しずきの町をはじめ、至る所の在所でやっている。大きな町では常設の小屋を借りることもあるけれど、普通は野天に丸太を組んで藪むしろで囲いをするのであるから、雨が降れば入り掛けになる。そう云う訳で淡路にはずいぶん熱心な人形氣違いが珍しくなく、その道楽が昂こうじると、一人で使うことの出来る小さな指人形を持って町から町を門かどづ附けして歩き、呼び込まれれば座敷へ上つてさわりの一とくさを語りながら踊らせて見せると云う

ようなのもあり、人形を愛するあまりには家産を蕩^{とう}尽^{じん}するのは愚か、ほんとうに癡狂する者さえもある。ただ惜しいことにそれほど郷土の誇りもだんだん時勢の圧迫を受けて衰微に向いつつある結果、古い人形が次第に使用に堪^たえなくなるのに、新しい首^{かしら}を打ってくれる細工人がいなくなつた。今人形師と名のつく者は阿波の徳島在に住んでいる天狗久^{てんぐひさ}と、その弟子の天狗弁^{てんぐべん}と、由良の港にいる由良亀^{ゆらかめ}との三人しかないが、そのうちほんとうに腕の出来ている天狗久は、もう六十か七十になる爺さんで、もしこの人が死んでしまえば永久にこの技術は亡びるであろう。天狗弁は大阪へ出て文楽の楽屋を手伝っているけれど、仕事というのは昔からある人形の直しをしたり、胡粉^{ごこん}を塗りかえたりするくら

いに過ぎない。由良亀も先代の男はいいものを作ったが、今の代となつてからは理髪師か何かを本業として、その片手間に矢張つくろいをするだけである。芝居の方では新しいものが得られないから、古い首かしらを出来るだけ手入れをして使う。それで毎年、盆と暮とには、方々の座の破損した人形が修繕のために人形師の所へ幾十となく集まつて来るので、そう云う時に行き合わせれば、こわれた首の一つや二つは安く譲つて貰もらえると云う。

そんな話を何処くわからか委しく調べて来た老人は、「今度はどうしても人形を手に入れる」と力んでいた。実はこのあいだ文楽で使ひふるしたものを譲り受けるようにいろいろ手を廻したのがうまく行かないで、「淡路へ行けば買えますよ」と、人に教えられた

のだそうである。そして順礼の道すがらには、芝居を見て廻るばかりでなく、由良の港の由良亀を訪い、人形村の源之丞の家に行き、帰り道には福良から船で、鳴門なるとの潮を見て徳島へ渡り、天狗久にも会つて来ようと云うのである。

「要さん、何とのどかなもんじゃあないか」

「のどかですねぇ、実に。——」

要は小屋がけの中へ這入るとそう云つて老人と眼を見合させた。

のどか、——全く此処ここの感じは「のどか」の言葉で尽きている。

いつであつたか四月の末のあたたかい日に壬生みぶ狂言を見に行つた

とき、お寺の境内のうらうらとした春の気分が棧敷さしきにいてもうつ

とり睡ねむけを催して、遊んでいる子供たちのガヤガヤ云う話声や、

露店で駄菓子やお面を売っている縁日商人のテント張りがびいどろのように日に光るのや、その他いろいろの雑音が舞台で演ぜられてゐる狂言の、間伸びのした悠ゆうちよう長はやな囃しと一つに融けて聞えて来る中で、ついとろとろと好い心持に眠りこけては、又はつとして眼をさます。二度も三度も、とろとろとしてははつと眼をさます。……その同じ事を何度か繰り返すのであるが、眼をさます毎に舞台を見ると、さっきの狂言がまだ続いていて、悠長な囃しが依然として聞え、棧敷の外は相変わらず日がうらうらとテント張りに光っていて子供たちがガヤガヤ遊んでおり、長い春の一日はいつになつても暮れることは知らないかのように、……昼寝をしながらまとまりのない夢のかずかずを幾つともなく夢みて

はさめ、夢みてはさめしたかのように、………太平の御代みよの有り難さと云おうか、桃源とうげんの国と云おうか、久しぶりに浮世を離れたのんびりとした心持になって、こんなことは幼い時分に人形町の水天官すいてんぐうで七十五座のお神楽かぐらを見た以来であると思つたが、この小屋掛けの中の気分はちようどあれと同じである。屋根にも四方にも蕙むしろが張つてあるとは云うものの、蕙と蕙との合わせ目が隙す間きまだらけで、見物席に日光の斑点はんでんが出来、ところどころに青空が見えたり河原の草のすいすいと伸びたのが覗のぞいていたりして、あたりまえなら煙草の煙で濁っている筈の場内の空気が、げんげやたんぽぽや菜なの花の上を渡つて来る風で野天のようにカラリとしている。場席の平土間にあたる所は地べたへごぎを敷いた上に

坐布団が並べてあつて、村の子供たちが駄菓子や蜜柑みかんをたべながら芝居の方はそつち除のけに、そこを幼稚園の運動場のようにして騒いでいる様子は、やはり里神楽さとの情趣と変りはない。

「成るほど、これは又文楽とは大分違うね」

三人は弁当の包みを手に持ったまま暫く足も踏ふみ込めないで、子供たちの跳ちようりよう梁りようするのをぼんやり立って眺めていた。

「とにかく始まつてはいるんですな、人形が動いていますから。」

要の眼には、その幼稚園騒ぎの向うにチラチラしている光景が、弁天座で見た浄瑠璃劇とは種類の違つた、一つのお伽とぎ噺ばなしの国

——何か童話的な単純さと明るさを持つ幻想の世界——で

あるように映った。舞台には一面に朝顔の模様のついた友禪ゆうぜんの幕が垂れていて、多分序幕の螢狩りのところであろう、駒沢らしい若い侍の人形と、深雪らしい美しいお姫様の人形とが、船の上で扇をかざしながら膝をすり寄せてうなずき合ったり、ささやいたりしている。場面から云えば艶えんな所とであるけれども、太夫の声も三味線のひびきも一向場内に徹とおらないので、ただその可愛い二人の男女の動くのばかりを見ていると、文五郎などが使うような写実的な感じではなく、人形たちも村の子供と一緒になって、無邪気に、あどけなく、遊んでいるかのようなのである。

お久は棧敷にしようと云うのを、人形芝居は下から見ると云う意見の老人は「ここがいいね」と殊ことさら更土間とへ席を取ったの

で、若葉の萌もえる頃ではあるが、据わっているとうすい坐布団をへだてて地べたの湿気と底冷えとが感ぜられる。

「おいどがちみとうてかなわんわ」

と、お久は臀しりの下に布団を三枚も入れながら、

「なあえ、こないなとこにおいやしたら毒どすえ」

と、しきりに棧敷に変わることすすめるけれど、

「まあまあ、こう云う所へ来てそんな贅ぜいたく沢を云うもんじゃあない。ここで見なけりや矢つ張り情が移らないから、つめたいのは辛抱するさ。これも話の種だあね」

と、老人は取り上げるけしきもない。しかしそう云う当人も冷えて来るのがこたえたと見えて、錫すずの銚子をアルコールの炉であた

ためながら、直ぐもう酒を始めるのであった。

「御覧、この辺の人たちはみんなわれわれのお仲間だね、ああして重箱を持って来ている。——」

「なかなか立派な蒔絵のがありますね。中に這入っているものも、玉子焼きだの海苔のりまき巻だの似たようなものばかりじゃないですか。

この辺では始終こう云う芝居があるんで、弁当のおかずも自然と一定しているんじゃない」

「この辺に限ったことじゃあないさ。昔はみんなああだったんで、大阪あたりじゃつい近年までその習慣が残っていたあね。今でも京都の旧家なぞだと、お花見なんかには小僧に弁当と酒を提げさせて出かけて行くのがたくさんある。そうして向うでちろりを借

りてお燗かんをつけて、余った酒は又壘びんに入れて持つて帰つて酒さかしおに使うと云うんだが、實際ありやあいい考だね。江戸つ児に云わせるると京都の人はしみツたれだと云うけれど、出先でまずい物を喰くうよりその方がいくら伶俐りこうだか知れない。第一材料が分つているから安心してたべられる」

見わたしたところ、追ひ追ひ客が詰まつて来た土間の彼方あちこち此方こちには、思い思いに輪を作つて小さな宴会が始まつていた。日が高いので男の客は少いけれど、町の女房らしいのや娘らしいのがめいめい子供たちを連れて、中には乳呑み児を抱いたりして、彼処あそこに一とかたまり、此処ここに一とかたまりと云う風に、ところどころに陣を取つては、舞台の芝居には頓とんじやく着やくなく、重箱のぐるりにま

どいしながらたべているので、その賑にぎやかさ、騒々しさと云つたら
 ない。ここの小屋でも煮にこ込みのおでんと正宗ぐらいは売つていて、
 それで酒盛りを開くのもあるが、大部分の人は皆相当にかさのあ
 る風呂敷包みを持参している。明治初年の飛あすか鳥山へでも行つたな
 らば、花見時には定めしこんな光景が見られたであろう。要は蒔ま
 絵きえの組重などと云う物を時代おくれの贅沢品だと思つていたのに、
 ここへ来て見て始めてそれが盛んに実際に用いられているのを知
 った。成るほど漆うるしの器の感じは、玉子焼きや握り飯の色どりとい
 かにも美しく調和している。中に詰まっている御馳走がさもおい
 しそうである。日本料理はたべる物でなく見る物だと云つたのは、
 二の膳ぜんつきの形式張つた宴会を罵ののつた言葉であろうが、この花や

かな、紅白さまぎまな弁当の眺めは、ただ綺麗であるばかりでなく、なんでもない沢庵たくあんや米の色までがへんにうまそうで、たしかに人の食慾をそそる。

「冷えるところへ持つて来て、酒が這入ったもんだから、………」と、老人はさつきから二度も三度も小用を足しに立つて行つた。が、誰よりも困つているのはお久で、実は場所柄が場所柄だから、なるべくそんなことがないように出がけに済まして来たのだけけれど、気にするとなお催すものだし、蕙の下から背すじの方へ冷めたさが這い上つて来るのに加えて、いけぬ口ながら二つ三つ老人の相手をしたり、重箱の物を摘まんだりしたのが覷てきめん面にき利いて来たのである。

「何処どす?.....」

と云つて、一度彼女は立ち上つたが、

「お久さんにはとても駄目ですよ」

と、要が戻つて来て顔をしかめた。聞けば困いのしてない所へ肥こえおけ桶が二つ三つ並べてあつて、男も女も立ちながら用を足すのだと云う。

「わてエ.....どうしよう?.....」

「いいやな、お前、見られるのはお互様だあな」

「それかて、立つたなりで出来ますかいな」

「京都ではよく女がそうしているじゃないか」

「あほらしい。まだそんなことしたことおへんえ」

何処かその辺まで行ったらうどん屋か何かあるだろうと云われて出て行ったお久は、それから小一時間もして帰って来た。町まで行って、うどん屋の前も、めし屋の前も通り過ぎてみたけれど、何だか這入りにくくもあり、何処の店も薄気味が悪そうなので、とうとう宿屋まで歩いてしまつて、帰りは俵くるまで戻つて来たと言うのである。それにしてもここに来ている若い娘や女房たちはどうするのだろうか、みんなあの桶へ行くのだろうかと、余計な心配をしているうちに、やがて三人のうしろの方で迷惑なことが始まつた。——子供を抱いたかみさんが、土間の通り路で着物の前を開けさせて、水道の栓せんを抜いたような音をさせているのである。「こいつはちつと野蛮過ぎる。弁当をたべている鼻先はひどい」

と、老人もこれには参つたという顔つきである。

舞台の方では見物席の落花狼藉らつかろうぜきをそ知らぬ風で、何人目かの太

夫が床ゆかへ上つていた。要は昼の酒が利いたのと、周りの噪そうおん音が

激しいのとで上氣したせいか、ただチラチラと眼に映るものを感じ

ているだけに過ぎないのだが、それでいて決して退屈でもなけ

れば耳触りでもない。この快感はあたかも明るい湯槽ゆぶねの中で、肌

はこころよいぬるま湯に漬かつているのに似ている。あたたかい

日に布団にくるまつてうとうと朝寝坊をする、——そののん

びりした、ものういような、甘いような気分にも似ている。ぼん

やり眺めていたあいだに、いつのまにか明石あかしの舟別れの段が済み、

弓之助の屋敷も、大磯おおいその揚屋も、摩耶まやヶ嶽の段も済んでしまつ

たらしく、今やっているのは浜松の小屋のようだけれど、日はまだ容易にかげりそうないもなく、天井を仰ぐと蕙むしろの隙間すきまから今朝来た時と同じ青空が機嫌きげんのよい色を覗のぞかせている。こう云う折には芝居の筋なぞそう気に留める必要はない。ただうつとりと人形の動くのを視つめていれば沢山である。そして見物人たちのガヤガヤ云うのが、一向邪魔にならないのみか、いろいろの音、いろいろの色彩が、万華鏡まんげきようを見るように、花やかに、眼もあやに入り乱れながら、渾然こんぜんとした調和を保っているのである。

「のどかですなあ。——」
と、要かなめはもう一ぺんその言葉を繰り返した。

「しかし人形も思いの外だよ、深雪を使っているのなんぞはそう

下手へたでもないじゃないか」

「そうですねえ、もう少し原始的なところがあつてもいい筈ですねえ」

「こう云うものは何処でやつても大体型がきまつてるんだな、義太夫の文句にvariがない以上、手順が同じになる訳だから」

「淡路特有の語りかた、と云うようなものはないんでしうか」

「聞く人が聞くと、淡路浄瑠璃と云つていくらか大阪とは違うんだそうだが、わたしなんかには分らないね」

一体、「型には箆はまる」とか「型にとら囚とらわれる」とか云うことを、芸

道の墮落のように考える人もあるけれども、たとえばこの農民芸術の所産である人形芝居にしてからが、とにかくこれだけに見ら

れるというのは畢ひつきよう竟「型」があるためではないか。その点で
 でんでん物の旧劇は民衆的であると云える。どの狂言にも代々の
 名優の工夫に成る一定の扮装ふんそう、一定の動作——所謂いわゆる「型」
 が伝えられているから、その約束に従い、太夫の語るチョボに乗
 って動きさえすれば、しろうとたちでも或る程度までは芝居の真ま
 似事ねごとをすることが出来、見物人もその型に依つて檜舞台ひのきぶたいの歌舞
 伎役者を連想しながら見ていられる。田舎の温泉宿などで子供芝
 居の余興があつたりするとき、教える方もよく教え、覚える方も
 よくまあこれだけに覚えたものだと感じることがあるけれど、
 めいめいが勝手な解釈をする現代劇の演出と違つて、時代物は依
 りどころがあるだけに却かえつて女子供にも覚え易やすいのかも知れない。

活動写真などのなかつた昔は、やはりそれに代るような便利な方法があつたのである。取り分け僅わずかな設備と人数とで手軽に諸所を興行して歩ける人形芝居は、どれほど地方の民衆を慰めたであらう。こうして見ると旧劇と云うものはずいぶん田舎の隅すみずみ々々にもまでも行きわたつて、深い根底を据えていることが察せられる。

要は朝顔日記の中では誰でも知っている宿屋の段と川留の段とを見たことがあるだけで、「ひととせ宇治の螢狩り」とか「泣いて明石の風待ち」とかいう文句に聞き覚えはあるけれど、その螢狩りや舟別れやこの浜松の小屋の段やを見るのは初めてであつた。しかしこの物語は時代物のようであつて、時代物に特有な不自然

に入り組んだ筋や、残酷な武士道の義理責めなどが少くつて、世話物のように素直に明るく、軽い滑稽こっけい味さえも加えてすらすと運んであるのがいい。いつ頃を背景にしたものか、ほんとうにあつた事柄かどうか、駒沢と云うのは熊沢蕃山ばんざんをモデルにしたのだと云うような話を聞いたこともあるが、なんだか徳川時代よりも一と時代前の戦国か室町ごろの物語を読むような所がある。

男が女に催馬楽さいばらを贈つたり、女がそれを琴で唄つたり、浅香あさかと云う乳母がお姫様のあとを追つて苦勞をしたりするのなどは、平安朝のようでもある。それでいて実際に遠いかというのに、一方では可なり通俗味もあり写実味もあつて、現にこの場へ出る浅香の順礼姿と云い、彼女のとなえる御詠歌といい、この辺の人には極きわ

めてしたしみ深いもので、今でも浅香のような姿であの歌を唄いながら行く女を往々町で見かけることが珍しくないのを思えば、関東の人が浄瑠璃劇を見るのと違って、西国の人は案外自分の身辺に近い事実のように感ずるのであろう。

「いや、これは朝顔日記なんでいけないんだね」

と、老人は何を思い出したのか突然云った。

「玉藻たまもの前まえとか、伊勢音頭いせおんどとか、ああ云う物はなかなか大阪とは違つていて面白いそうだよ」

なんでも文楽あたりでは残忍であるとかみだらであるとか云う廉かどで禁ぜられている文句やしぐさを、淡路では古典の姿を崩くずさず、今でもそのままにやっている、それが非常に變つていと云う話

を老人は聞いて来たのであった。たとえば玉藻の前などは、大阪では普通三段目だけしか出さないけれども、此処では序幕から通してやる。そうするとその中に九尾びきつねの狐が現れて玉藻の前を喰くい殺す場面があつて、狐が女の腹を喰い破つて血だらけな脇はらわたくわを咬くえ出す、その脇には紅い真綿を使うのだと云う。伊勢音頭では十人斬ぎりのところで、ちぎれた胴だの手だの足だのが舞台一面に散乱する。奇抜な方では大江山の鬼退治で、人間の首よりももつと大きな鬼の首が出る。

「そういう奴を見なけりやあ話にならない、明日あしたの出し物は妹いもせ背山やまだそうだから、こいつはちよつと見物みものだろうよ」

「ですが朝顔日記だつて、通しで見るのは始めてのせいかな僕には

相当面白いですよ」

要には人形使いの巧拙なぞ細かいところは分らないが、ただ文楽のと比較すると、使いかたが荒つぽく、柔かみがなく、何と云つても鄙ひなびた感じのあることは免れられない。それは一つには人形の顔の表情や、衣いしやう裳の着せ方にも依るのである。と云うのは、大阪のに比べて目鼻の線が何処か人間離れがして、堅く、ぎごちなく出来ている。立たて女形おやまの顔が文楽座のはふつくらと円みがあるのに、此処のは普通の京人形やお雛ひな様のそれのように面おもな長で、冷めたい高い鼻をしている。そして男の悪役になると、色の赤さと云い、顔立ちの気味の悪さと云い、これは又あまりに奇怪至極で、人間の顔と云うよりは鬼か化け物の顔に近い。そこへ持つて

来て人形の身の丈が、——殊にその首が、大阪のよりもひとときわ大きく、立役たちやくなぞは七つ八つの子供ぐらいはありそうに思える。淡路の人は大阪の人形は小さ過ぎるから、舞台の上で表情が引き立たない。それに胡粉ごふんを研みがいてないのがいけないと云う。つまり大阪では、成るべく人間の血色に近く見せようとして顔の胡粉をわざとつや消しにするのだが、それと反対に出来るだけ研とぎ出してピカピカに光らせる淡路の方では、大阪のやりかたを細工がぞんざいだと云うのである。そう云えば成る程、此処の人形は眼玉が盛んに活躍する、立役のなぞは左右に動くばかりでなく、上下にも動き、赤眼を出したり青眼を吊つったりする。大阪のはこんな精巧な仕掛はありません、女形おやまの眼なぞは動かないのが普通

ですが、淡路のは女形でも眼瞼まぶたが開いたり閉じたりしますと、この島の人は自慢をする。要するに芝居全体の効果から云えば大阪の方が賢いけれども、この島の人たちは芝居よりもむしろ人形そのものに執着し、ちやうど我が兎を舞台に立たせる親のようないつくしみを以て、個々の姿を眺めるのであろう。ただ気の毒なのは、一方は松竹の興行であるから費用も十分に懸けられるのに、此方こっちは百姓の片手間仕事で、髪かみの飾りや着附けがいかにも見すばらしい。深雪でも駒沢でもずいぶん古ぼけた衣裳を着ている。しかし古着好きの老人は、

「いや、衣裳は此処の方がいいよ」

と云って、あの帯は昔の呉ご結ごうだとか、あの小袖こそでは黄きはち八丈じようだとか、

出て来る人形の着物にばかり眼をつけて、さつきからしきりに垂す涎いぜんしている。

「文楽だつて以前はこんな風だつたのが、近頃派手になつたんだよ。興行のたびに衣裳を新調するのもいいが、メリンス友禅や金き紗んしゃちりめんみたいなものを使われるんじや、打ち壊ぶこわしだね。人形の着附は能衣裳のように古いほど有難味がある」と、そう老人は云うのである。

深雪と関助との道行きのあいだに長い一日もとうとう暮れて、その幕がすんだ時分には囲いの外はすっかり暗くなつていた。昼間のうちは殺風景だつた小屋の中もいつしかぎつしり客が詰まつて、さすがに芝居の夜らしい気分である。ちやうど晩飯の刻限なので、

一層さかな小宴会が彼方あつちでも此方こつちでも初まっている。度ぎつい電球が裸のまままでところどころに吊つてあるから明るさも明るいまぶが、眩まぶしいことも非常に眩まぶしい。それに舞台の照明と云うのが、脚光もなければ特別な装置があるのでなく、同じ裸電燈が天井から垂れているばかりなので、やがて太功記十段目が開くと、人形の顔の胡粉が一度にきらきらと反射し出して、十次郎も初菊もまともに見ることが出来ないような奇観を呈した。しかし太夫はだんだん本職に近いような上手なのが床ゆかに上る。それを一方の棧敷から、「どうだ、わしの村の太夫はうまいもんだろう、みんな静かに聞いてくれ」と、同じ村の人らしいのが声援すると、「己おれの村の何々太夫はもつとうまいぞ、好い加減に引っ込んでくれ」

と、一方の棧敷から罵声ばせいを飛ばす。酔った勢で見物人の大半がめいめい執方どっちかへ味方をして村と村との競争が夜が更ふけるほど激しくなる。さわりの美しい文句へ来ると、どうする連がいろいろの言葉で半畳を入れる。そしてしまいには「あんまりじゃぞえ！」と、みんなが一緒に泣き声を出して感心する。おかしいのは人形使いで、これも晩酌に一杯飲んだあとらしくぼうつと眼のふちを赤くしながら使っているのはいいのだが、女形を使う男などは佳境に入ると自分も人形に釣り込まれてへんな身振りをする。それが、文楽あたりでもやることだけれども、ここのは毎日野良で働くのが本業の人たちだから、どす黒く日に焼けた顔に肩衣かたぎぬを着けたのが、又その上をほんのり桜色に染めて、さもいい気持そう

にしなを作るばかりでなく、「あんまりじゃぞえ！」を浴びせられると、いと絃に乗って表情までもして見せる。人形の型にも追い追いと奇抜な手が出て、朝顔日記に失望した老人を喜ばせるようなしぐさがある。太功記の次のお俊伝兵衛では猿廻しの与次郎が寢床の中へ這入ろうとする時、一旦戸締りをした格子を開けて家の前の道傍みちばたに蹲踞うずくまりながら小便をする。そこへ何処からか一匹の犬が現れて、与次郎の禪ふんどしを咬くわえてぐいぐい引つ張つて行くのである。

大阪下りと云う触れ込みで、番附に大きく名を出している呂太夫の「吃どもまた又」が始まったのは十時過ぎだったが、それから間もなく見物席でえらい騒ぎが持ち上った。紺の詰め襟えりの服を着て五六

人の仲間と一緒に車坐になって飲んでいた土方の親分風の男が、いきなり土間に立ち上って棧敷の客に「さあ来い」と云いながら喧嘩けんかを買って出たのである。なんでもその前から、見物席が大阪の太夫ということに反感を持つらしい土地ツ兎と、そうでないものとの二派に分れて弥次やじを飛ばしながら、大分おだやかでない形勢になっていたところへ、一方の棧敷から誰かが何か云ったのがその親分の癩しやくに触ったものだに見える。「さあ、野郎、出て来い」と今にも棧敷へ飛びかかろうとする剣幕に、「まあまあ」といつて仲間の者が一度にみんな立ち上ってその男をおさえつける。男はますます威丈いたけだか高たかに、仁王立ちになって怒号しつづける。外の見物がああの男をどうかしると騒さわぎ出す。おかげで折角の真打ちの

語り物がとうとう滅茶々にされてしまった。

その十二

「じゃあかなめ要さん、行って来るからね」

「御きげんよろしゅう。まあ、まあ、ほんとに、お天気つつくのが何よりです。…………お久さんも日に焼けないようにして、……………」

「ふ、ふ」

と、笠の内で茄子なすび歯びばが笑って、

「奥様によろしゅう云うとおくれやす」

朝の八時頃、神戸行きの船が客を乗せている棧橋のところで、
要は二人の順礼姿と袂たもとを分つことになった。

「どうぞお気をおつけなすつて。——いつごろお宅へお帰りになりますか?」

「さあ、——三十三箇所を残らず廻つちやあ大変なんで、いい加減にするつもりだが、——とにかく福良から徳島へ渡つて、それから帰ります」

「お土産は淡路人形ですな」

「うん、そう。そのうちには是非京都へ見に来て貰もらいましょう、今度こそいいのを手に入れるから」

「ええ、ええ、いずれにしても月末時分に一ぺんお邪魔に出るか

も知れませんが、ちよつとあの辺にいつでもあるんです」

岸を離れて行く船の上から、要は陸に立っている二人の方へ帽子を振った。

迷故めいこ三さん界がい城じょう

悟故ごこ十じつ方ぼう空くう

本来ほんらい無む東とう西さい

何処かしよ有う南なん北ぼく

—— 笠の四方にそう筆ふで太ぶとに記してある文字が、だんだん小さ

く読めないようになる。お久がしきりに杖をかざして帽子に答え

ているのが見える。ああして笠を被かぶった姿を遠くから眺ながめたところでは、三十以上歳としが違つてもそれこそ「本来東西なし」で、い

い夫婦づれめおとの順礼のようではないか。——要はそんなことを考
えながら、やがてかすかな鈴の音をあとに立ち去つて行く二人の
うしろかげを見送つていた。「はるばると運ぶ歩みは頼もしやのり法
はなの華さく寺をたずねて」と、ゆうべ宿の主を師匠に、二人が一生
懸命けんめいに稽古けいこしていた御詠歌の文句が思い出された。老人は昨日、
これとお経の読みかたとを習うために惜しいところで妹背山いもせやまの
芝居を切り上げて、九時から十二時近くまで熱心に教わつていた
ので、要もお附合ついに節をおぼえてしまったのである。彼にはそ
の歌の節廻まわしと、白羽しろはぶ二重にじゅうの手て甲こうに同じ脚絆きゃはんを穿はいて、上り
がまち框かまちで番頭に草履わらじの紐ひもを結んで貫つていたお久の今朝のいでたちと
が、かわるがわる心に浮かんだ。最初はほんの一と晩のつもりで

附いて来たのが、二晩になり三晩になったのは、人形芝居が面白
 かったからではあるが、かたがた老人とお久の關係に興味を感じ
 たせいでもある。歳を取ると、なまじ理窟が分つたり神経が働い
 たりするような女は、うるさくて厭いやになるのである。やはり人
 形を愛するように簡単に愛し得られる女がいいのであろう。要は
 自分にその真似まねが出来ようとは思わないながら、何のかのと物の
 分つた顔をして年中ごたごたをつづけている自分の家庭を顧みる
 と、人形のような女を連れて、人形芝居のような扮装ふんそうで、わざ
 わざ淡路まで古い人形を捜しに来る老人の生活におのずからなる
 安樂境のあることが感ぜられて、あんな心持になれたらばとも思
 うのであった。

今日も申し分のない天気ではあるが、こんな時分に遊山ゆうざんに出かける閑人ひまじんはあまりいないと見えて、遊覧船風にゆつくりと仕立てである特等の客室は、二階の西洋間の方も階下の日本室の方もガラシとしてゐる。要は手提げ靴かばんにもたれて畳に両脚を投げ出しながら、海の光が人気のない天井へぎらぎら波紋を走らせるのを眺めていたが、瀬戸内の春のなごやかさはその薄明るい船室に青く映つて、ときどき通り過ぎる島かげから、花の匂いが潮の香と共に忍びやかに襲つて来るようである。おしやれと旅馴れないので一日二日の旅行にも着換えを用意して出た彼は、帰りは和服で通していたのを、ふと或る事を思いついて誰もいないのを幸いに急いでグレイ・フランネルの背広に着換えた。そして、それから

何時間かを過した後に頭の上でガラガラいかり錨を巻き上げる音が聞えるまで、うとうと眠り通してしまった。

船が兵庫の島しまがみ上へ着いたのはまだ昼前の十一時ごろであつたが、

要は真つ直ぐ家へは帰らずに、オリエンタル・ホテルの食堂で三

四日振りに脂あぶらつこい物を昼食に取り、食後にベネデイクティンの

一杯を二十分もかかつてゆつくりと飲んでから、その浅い酔いの

さめきれぬうちに山手のミセス・ブレントの家の前で車を降りて、
持っていた蝙蝠傘こうもりがさの握りの端で門の呼び鈴よりんのボタンを押した。

「いらつしやいまし、この鞆は？——」

「今船から上つたんだ」

「どちらへ？」

「二三日淡路へ行つて来た。——いるかい、ルイズは？」

「まだ寝てるかも知れませんよ」

「おかみさんは？」

「おります、彼処あそこに。——」

ボーイの指さす廊下の突きあたりの、裏庭へ下りる階段のところに、此方こちらへ背中を向けたままミセス・ブレントは腰かけていた。

いつもは声を聞きつけると、二十三四貫はありそうな太った体をもてあつかいながら、ずしりずしり二階を降りて来て、おあいその一つも云うのであるのに、今日はどうしたのか振り向きもしないで庭を見ている。開港当時に建てられたかと思われる、天井の高い、ひっそりと暗い、間取りのゆったりした家で、昔は立派な

洋館だったのに違くないのが、久しく手入れをしないままに化け物屋敷のように荒れているけれど、廊下から見るとその雑草の生い茂った裏庭にも五月の青葉の明るさが充ちて、逆光線を受けているかみさんの灰色のちぢれ毛を、一とすじ二たすじ銀色に透き徹とよらせている。

「どうしたんだい、おかみさんは？ 彼あすこ処で何を見てるんだい？」

「へえ、今日は機嫌が悪ござんしてね、さつきから泣いているんですよ」

「泣いている？」

「へえ、ゆうべ国もとから弟が死んだと云う電報が這入はいったもんですから、すっかり力を落しちまって、——可哀そうに、今日

は朝から好きな酒も飲みやあしません。何とか云つてやつて下さい」

「今日は」

と、要は彼女のうしろに寄つて声をかけた。

「どうしたの？ マダム。弟が死んだと云うじゃないか」

庭には紫の花をつけた大きな梅せんだん檀の樹があつて、その樹の蔭の

じめじめしたところに、雑草と交つて薄荷はっかが沢山生えていた。羊

の料理を拵こしらえたりポンチ酒を作つたりする時にその葉を使うのだ

からと云つて、蔓はびこるままにしてあるのだが、白いジヨウゼツトの

ハンケチを顔にあてながら黙つて地べたを視みつめている彼女は、

薄荷の匂いがしみたかのように眼のふちを赤くしていた。

「ねえ、マダム、………たいへんあなたを気の毒に思います」

「有りがとう」

幾重かの深い皺しわに囲まれた、皮のたるんだ眼の中から涙が光の点線になってきらきらと落ちた。西洋の女は泣き虫だと云うことを聞いていたものの、こんなところを見るのは初めての要は、悲しい歌のしらべでも耳に馴れない外国のものはその悲しさが異様に強く感ぜられるのと同じように、妙にしみじみと哀れさがこたえた。

「弟は何処で死んだのかね？」

「加奈陀カナダで」

「いくつになるの？」

「四十八か、九か、それとも五十か、多分そのくらいになつていたでしょう」

「まだ死ななくてもいい歳なのに。——それじゃあなたは加奈陀へ行かなけりやならないんだらう？」

「いいえ、止める、行つたつて仕様がなないんだから」

「その弟と何年会わなかつたんです」

「もう二十年ばかりになります、——千九百九年に、ロンドン倫敦にいた時会つたのが最後でした、手紙は始終やりとりをしていましたけれど。……」

弟の歳が五十だとすると、このかみさんは今年幾つになるのであろう。考えてみれば要が彼女を知つてからでもすでに十年以上に

なる。まだ横浜が地震で今のようにならなかつた時分、彼女は山手と根岸とに邸やしきを構えて、いつも両方に女を五六人ずつは置いていた。神戸のこの家もその頃から別荘のようになっていたばかりでなく、そういう出店を上シャンハイ海や香港ホンコンあたりにも持って、日本と支那とを股またにかけてときどき往つたり来たりしながら、ひとしきりは可なり手広くやっていたのに、それがいつのまにか、彼女の肉体のおとろえると共に商売の方もだんだん振わなくなつてしまつた。世界戦争から此方こつち、日本の外国商館は次第に内地の貿易商に仕事を取られてぼつぼつ本国へ引き上げてしまふし、観光客にも昔のように馬鹿なお金を使うようなのが来なくなつたのが悪いんだと、当人は云うのだが、あながちそればかりが不振の原

因ではないであろう。要がはじめて知った時分には、彼女は今ほどもうろく耄碌してはいなかった。生れは英吉利のイギリスヨークシャアで、何とか云う女学校を出て、立派な教育を受けたと云うのを自慢にして、日本に十何年もいながらどんな時にも日本語は一と言もしやべつたことがなく、大概な女たちが植民地英語しかしやべれない中で彼女一人が正確な英語を、それも殊ことさばら更むずかしい単語や云い廻しを使い、フランス仏蘭西語もドイツ独逸語も流暢りゆううちように話した。そしてさすがに女将株の貫目もあり、活気もあり、何処やらにまだうぼざく姥桜らの色香さえもあつて、西洋人と云うものは幾つになつても若いものだと思心させたのに、そののち少しずつ気が弱くなり、記憶力が乏しくなり、女子供にも押しが利かなくなつてから、急に

目に見えて年を取るようになったのである。以前はお客をつかまえて、昨夜は何処の国の侯こうしやく爵やくがお忍びでいらしたなどと法ほ螺らを吹いたり、英字新聞をひろげながら母国の東洋政策を論じて煙に巻いたりしたものだけれど、この頃ではほとんどそう云うヤマ気はなく、ただうそをつく癖だけが病氣のようになってしまつて、直すぐに底の割れるようなことばかりを云う。あの威勢のよかつたかみさんが、どうしてこんなになつたのか不思議な気がするが、恐らく酒のせいなのだろうと、要はそう思うことがあつた。實際頭の働きが鈍くなつて、体がぶくぶく膨れるのと一緒に、彼女の過すウイスキーの量はますます増して行く一方で、酔つても昔はしまりがあつたのに、今では更にたわいがなく、朝からせいせいと

息を切らせているし、ボーイの話では月に二三度は人事不省になると云うし、血圧の高い人間の標本のような恰好をして、いつばつくりと行ってしまいかも知れないのである。そんなふうだから、世間の景気不景気に拘かかわらず、此処の家が繁昌する筈はずはないので、気の利いた女は借金を踏み倒して逃げてしまふ、コックやアマは酒の上り高をくすねる、一時は英領植民地あたりから純粹の金髪種が入れ代り立ち代り来ていたこともあつたのが、この二三年は合の児か露西亜人ロシアばかりになつてしまつて、それも一時に三人以上揃つてゐることはないのであつた。

「マダム、………悲しいのは無理もないが、そう泣いてばかりいて体にさわつたらいけないじゃないか。いつものあなたにも似合

わない、元氣を出して酒でも飲んでみるといい。人間はあきらめと云うことが肝心だから。……………」

「有りがとう、ほんとうに親切に云つて下さつて有りがとう。だけれどもあたしには一人しかない弟なんです。……………それは誰だつて一度は死にます。……………どうせ死ぬにきまつています。……………それは分つていますけれども、……………」

「そうだとも。……………ほんとうにそうだとも。……………そう思つてあきらめるより仕方がないんだ。……………」

歳を取つて誰にも相手にされなくなつた宿場の茶屋の芸者などで、馴染なじみでもない客をつかまえてくどくどと身の上の不幸を訴え、安価な感傷に陶醉したがるようなのがある。ここのかみさんのも

つまりはそれで、悲しいのには違いなからうが、人からやさしく云われたさに思わせぶりなポーズを取ったり、芝居じみたセリフを使ったりしているので、平素のうそをつく癖がこう云う時にもその感慨を誇張させずには措おかないのであろう。しかしそれにも拘わらず、この象のように大柄な外国の老婦人の歎きにはなんだか心が動かされる。田舎芸者の安いなつぽい涙と同じものでありながら、愚かにもその感傷に引き込まれて自分までが眼がしらのうるむような感じになる。

「済みません、ほんとうに、………ひとりで泣いていればいいのに、あなたまで悲しくさせてしまつて。………」

「なあに、そんなことは何でもない。それよりあなたこそ体を大

事にしなければいけないよ、一人の弟が死んだからと云つて自分も病氣になつていい訳はないんだから。……」

相手が日本の女だったらこんな齒の浮くような言葉が口から出る筈はないと思うと、要は我ながら馬鹿々々しくもあり耻はずかしくもあつた。一体どうしたと云うのかしら？ ルイズのことばかり考へて来たのに不意を打たれたせいかしらん？ それとも陽氣の加減かしらん？ 自分は嘗かつて今の言葉の半分もの優しさのある日本語で、妻をでも亡くなった母親をでもいたわつたことはなかつたのに、英語と云うものは悲しい国語なのかしらん？……

「何をしてたの、マダムにつかまつてたんじやないの？」

と、二階へ上るとルイズが云つた。

「うん、弱ったよどうも。……僕はああ云うしめっぽい話は嫌いなんだが、泣かれてみると逃げようにも逃げられないで、……」

「ふ、ふ、大方そんなことだろうと思つてたのよ。来る人来る人をつかまえて一ぺんは泣かないと済まないんだから」

「それでもまさか、泣くのはうそじゃないんだらうな」

「そりやあ弟が死んだんだから、悲しいのは悲しいでしょう。……あなた、淡路へ行つたんだつて？」

「うん」

「誰と？」

「女房の親父と、親父の妾めかけと、三人づれで、……」

「ふん、誰の妾だか分つたもんじやない」

「なあに、ほんとうだよ、尤もその妾に少々惚ほれていることは事実なんだが、………」

「そんなら何しに此処へ来たのよ？」

「仲のいいところを見せつけられたから、聊いささか鬱うつ憤ぷんを晴らしに来たのさ」

「御挨拶だわね、………」

知らない者が若しこの会話を部屋の外にいて聞いたとしたら、しやべっている女が栗色の断髪に茶色の瞳をした種族であろうとは、誰が想像するであろう。それほどルイズは日本語を巧みに話すのである。要かなめはこの頃でも、しやべりながらふと眼をつぶって、そ

の声の調子と、アクセントと、言葉づかいだけを耳にしていると、ちようど田舎の小料理屋で酌婦を相手にしている場面が浮かぶのである。ただ外国人の悲しさにはその発音に何処か東北訛りのよなまうなひびきがあつて、それでいて云うことが恐ろしく巧者であるだけに、方々を渡り歩いた擦れすつ枯らしの女給の言葉になつてゐることを、当人は夢にも知らないらしい。が、ともかくも暫くその声を聞いた後に再び眼を開いて室内を見ると、何と云う思いがけない光景であろう、彼女は化粧台の前の椅子にもたれて、満洲朝の官服に似せた刺ししゅう繡のあるパジャマの上うわぎ衣だけを、ようようしり臀と擦れ擦れに着ている下はパンツの代りに脛すね一面のお白粉しろいを穿いた脚の先へ、仏蘭西型の踵かかとの附いた浅黄色の絹の上パントウフル靴を、

その爪先を二艘そとうの可愛い潜航艇へさきの舳そうのように尖らしているのである。そう云えばこの女は脛ばかりでなく、殆ど全身へうすくお白粉を引くらしい。要は今朝も風呂から上つてそれだけの支度をするあいだ三十分以上も待つていなければならなかつた。彼女自身に云わせれば母親の方に土耳其人トルコの血が交つてしていると云うことで、その肌の色の白はくせき皙せきでないのを隠そうためにしているのだが、実を云うと要を最初に惹きつけたものはその何処やらに濁りを含んだ浅黒い皮膚のつやであつた。「君、この女なら巴里パリへ行つたつて相当に踏ふめるぜ、こんな女が神戸あたりにうろついでいようと
 は思わなかつた」と、或る時彼に案内された仏蘭西がえりの友達
 は云つた。その時分、——と云うのは今から二三年まえ、要は

日本人でありながら特別に出入りを許されていた横浜時代のよしみを思つてふとこの家を訪ねた折に、彼女は波蘭土ポーランドの生れだと云つて外の二人の女と一緒にシヤンパンのふるまいにあずかるべく挨拶に出て来たのである。彼女ははまだ、神戸へ来てから三月にはならないと云つていた。戦争で国を追われて、露西亞にも居、満洲にも居、朝鮮にも居、そのあいだにいろいろの言葉を覚えたとかで、外の二人の露西亞生れの女とは自由に露西亞語で話した。「巴里へ行けば私は一と月で仏蘭西人と同じようにしやべつてみせる」と自慢をするだけのものはあつて、語学は彼女の恵まれた才能であるらしく、三人のうちでこの女のみがかみさんのブレント夫人や、ヤンキーの酔っ払いなどを向うに廻して、英語でテキ

パキ渡り合うことが出来たのである。けれど彼女が日本語をまで
 それほど自在にあやつろうとは！ バラライカやギタルラを伴奏
 しながらスラヴの唄をうたう口から、安来節やすぎや鴨緑江おうりよつこう節を寄
 席せ芸人に劣らぬ節廻しで聞かせるほど、それほど悪達者であろう
 とは！ いつも英語でばかり話していた要が、それを知って驚か
 されたのはつい最近のことなのである。どうせこう云う種類の女
 は自分の過去を正直に云うものでないことは承知していたが、そ
 ののち彼は彼女がほんとうは朝鮮人と露西亜人との混血児である
 ことをボーイから聞いた。彼女の母は今でも京けいじょう城に住んでい
 て、ときどき手紙を寄越すと云う。なるほどそれなら鴨緑江節の
 上手なことも、語学の習得の早いこともうなず頷かれる。ただ本人の話

したいろいろのうその中で、初めて会った時に歳を十八だと云つたのは、或はそれだけがひよつとすると本当に近いのかも知れない、なぜなら実際に見たところでも今年でせいぜい二十ぐらゐの若さにししか思えないし、容貌のわりに云う事やする事が早熟なのは、そう云う数奇さつきな生い立ちをした多くの少女に逃れられない運命であるから。

別に何処と云うきまつた巢もなく困つてある者もない要には、日頃妻から得られないものを充たしてくれろと云う点では誰よりも一番好みにかなつたせい、知り合つてから今日までの二三年のあいだと云うもの、いつもの移り気な性分にも似ずこの女に依つて最も多くひと独り寝のあじきなさを慰められて来たのだが、彼はそ

の理由として、日本人をめつたに入れない家であるのが隠れ遊びに都合がよいこと、茶屋へ行くよりも時間や費用が経済であること、女と自分自身とを動物として扱うときに、外国人同士の方が互に耻はじを忘れやすく、それだけあとで気が病めないこと——などを、もし人に聞かれれば挙げたであろうし、自分でも努めてそう信じて来たのである。しかしこの女を「四肢ししと毛なみの美しい獣けもの」として卑しめ去ろうとする意志の下には、その獣身に喇嘛らま教の仏像の菩薩ぼさつに見るような歡喜が溢あふれているところをなかなか捨て難く思う心が、案外強く根をおろしている事実を、我ながら苦々しくさえ感じていた。一言にして云うとこの女は、ホリーウツドのスタアどもの写真と、たまには鈴木伝明でんめいや岡田嘉子よしこの肖像

なぞを所嫌わずピンで留めてある薔薇色の壁紙に包まれた中に住んでいて、彼の味覚と嗅覚きゆうかくとをよろこばすためにペディキュールをした足の甲へそつと香水を振っておくだけの、ゲイシャ・ガールには思いも寄らない用意と親切とを尽すのである。彼は必ずしも面つらあてにそうした訳ではないが、美佐子が須磨へ出かけた留守に「ちよつと神戸へ買い物に行つて来る」と、身軽な運動服のいでたちで出て、夕方頃には元町あたりの商店の包みを提げながら戻つて来るのを常としていた。こう云う遊びは貝原益軒の教に従つて、——然しながらその教とは反対な趣味の上から、——午後の一時か二時頃の日の高い間を選んで、帰り道に一ぺん青空を見た方が後味がさっぱりとするし、全く散歩の気分を以て

終始することが出来るのを、経験に依つて要は知つていたのである。ただ困るのはこの女のお白粉の移り香が特別に強く、体に沁しみ着いて離れないのみか、着ていた洋服はもちろんのこと、自動車へ乗ればその箱の中へ一杯に籠こもるし、家へ帰ると部屋じゅうが臭くなることだつた。彼は自分のみそかごとを美佐子がうすうす気づいているといないとに拘あだわらず、仇あだし女の肌の匂いを知らせることは、たとい名ばかりの夫婦にもせよ、妻への礼儀に欠けていると思つていた。有りていに云えば、彼の方でも美佐子の口にする「須磨」と云うのが果してほんとうの須磨であるのか、それとももつと近い所に適当な場所を見つけてあるのか、ときどき好奇心を感じることにはあるにしてからが、強しいて知ろうとは欲しな

いし、なるべくならば知らないで済むことを願っているのと同じように、自分がいつ何処へ行くと云うことは曖昧あいまいにして置きたかった。そしてそう云う心づかいから、女の部屋で服を着る前にいつもボーイに風呂を立てさせたものであったが、そのお白粉はべっとり鬢びんつ付け油のように粘り着くたちのものだと見えて、余程ごしごしこすらなければ、洗つても洗つても落ちないのであった。彼はしばしばこの女の全身の甘皮あまかわが、自分の肌へ肉襦じゅばん袴はかまのようにつつぽり被さってしまった気がして、それを残らず洗い落すのに多少の未練を感じながら、やっぱり自分が思ったよりも彼女を愛していることを意識しないではいられなかった。

「プロジツト！ ア、ヴォートル、サンテ！」

と、二つの国の言葉で云いながら、彼女はうすい瑪瑙めのう色にかがやくグラスへ唇をつける。この女はいつもこうして、此処の家には碌ろくなシャンパンはないと云う口実の下に、自分がこつそり買い込んで置くドライ・モノポールを三割も高く売りつけるのである。

「あなた、あの話考えてくれた？」

「いいや、まだ、………」

「でもどうしてくれるのよ、ほんとうに？………」

「だからさ、そいつがまだだと云ってるんだよ」

「ちよッ、いやんなっちゃうなあ、いつでもまだまだだだって。」

——この間あなたに話したでしょう？ あたしの方は千円でもいいのよ」

「聞いたよ、そいつは」

「じゃあ何とかしてくれない？ 千円ぐらいなら考えてみるって云ったじゃないの」

「云ったかしらん、そんなことを」

「うそツつき！ だから日本人は嫌いだって云うんだ」

「お気の毒様、どうも日本人で相済みません。いつかのあの、日光へ連れて行ってくれた^{アメ}米利加^{リカ}のお金持はどうしたんだい？」

「そんな話をしているんじゃないわよ。あなたほんとうに思ったよりもしみツたねえ！ ゲイシャ・ガールにならいくらだつて出す癖に」

「冗談じゃあない、僕をそんなお金持だと思ってるのが間違いな

んだよ、千円と云えば大金だからな」

彼女はけいぼう 房の口説くぜつにいつもこの手を出すのである。はじめはマダムに二千円の借りがあるから、それを立てかえて一軒家を持たしてくれろと云っていたのが、この頃は少し様子をかえて、さしあたり千円出してくれさえすれば残りは証文にしておくからと云うようになった。

「ねえ、あなたあたしが好きなんじゃないの？」

「うん、……………」

「ちよつと！ そんな気のない返辞をしないで、もつと真面目に聞いて頂戴！ ほんとうに惚れてる？」

「ほんとうに惚れてる」

「惚れてるなら千円ぐらい出したらいいわよ。でなけりや優待して上げないわよ。……………さあ、どっち？……………出すか出さないか？……………」

「出す、出す、出すと云つたらいいじゃないか、怒るなよそんなに、……………」

「いつ出す？」

「今度持つて来る」

「今度こそきつとか？ うそじゃないか？」

「僕は日本人だからなあ」

「ふん、畜生！ 覚えてるがいい！ 今度お金を持つて来なけりや絶交してやるから！……………あたしいつまでもこんな卑しい商売

をしてるのが厭いやだから頼むんじゃないの。ああ、ああ、ほんとに、なんてあたしは不仕合わせなんだろう。……」

それから彼女は新派の俳優そっくりの口調になって、さも哀れつぽく涙ぐんだ眼に物を云わせて、いかにこの稼業が自分のような人間には堪たえられないかと云うことを説明したり、一日も早く娘が自由の身になれるのを待ちこがれている母親の境涯を訴えたり、滔とうとう々として天を怨うらみ世を呪のろう言葉をつらねる。彼女はここへ来る前には女優をしていたことがあるから、ステージ・ダンスならエリアナ・パヴロヴァあたりには負けなくらいな腕がある、要するにこんな所にいる女とはたちが違う、自分のような才能のある者をこうして置くのは勿もったい体たいない話だ、巴里やロス・アンジエ

ルスへ行つても立派に一本立ちが出来るし、堅儀な方面ならこれだけ語学の天分があつたら重役の秘書にでもタイピストにでもなれる、だから自分を救い出して日活の撮影所か、外国の商館へ紹介してくれる、そうして貰えれば月々の物は百円か百五十円も補助してくれたら沢山だと云うのである。

「あなた今だつて一遍来れば五十円や六十円は使うじゃないの。それを考えたらいくら得だか知れやしないのに」

「だって、西洋人を女房に持つと、月千円はかかると云うぜ。君のような贅ぜいたく沢たくな女が百円や百五十円でやって行けると思ふのかい」

「ええ、行ける、きつとあたしならやって行ける。会社へ出たら

自分で百円は稼かせげるんだから、そうしたら二百五十円になるじゃないの。まあ、見てて御覧よ、立派にやっつて見せるから。——あたしだってもうそうなたら余計なお小遣こづかいをねだったり、着物を持えたりしやしないんだから。こんな商売をしているからだけど、あたしを贅ぜい沢な女だと思つたら大した間違いなんだからね。憚はばかりながら家を持たしたらあたしぐらい几帳面で、無駄づかいをしない女はないんだからね」

「だけでも、借金は立て換えた、そのままぷいと西シベリアへでも逃げて行かれたらそれつきりだぜ」

そう云うと女は心外な表情をして見せて、口く惜やし紛まれに寝台の上で地団太を踏む。要はそれが面白さに交まぜつ返しているようなも

のの、一時は多少の好奇心を動かしたこともないではなかった。どうせこの女のことだから困ったところで長つづきはしないであろうし、冗談ではなくハルピンあたりへどろんをするのが落ちであらうが、此方も寧ろむしその方が背負しよい込みにならないでいいかも知れない。彼にはそんなことよりも、実は妾宅を構える手続きが事務的にひどく億劫おつくうな気がした。女は普通の日本建ての借家でいい、家具さえ洋風にしてくれたらと云うのだけでも、建てつけのガタピシする狭くるしい部屋に這入って、歩きたびごとにもくもくふくれ上る畳を踏みながら、散切り頭ざんぎに浴衣ゆかたがけでいられたりしたら、——そしてうわべだけでもせよ、今までの贅沢が打って變つて、急に几帳面に、妙なところで所帯持ちをよくされ

たりしたら、——と、そう思うと何だかお座がさめるのであつた。しかし女の口説き工合で、いい加減にあしらつていゝうちにいつか冗談が本当にならないものでもなく、そうなればそれで、ずるずるに引き擦られて行きかねないのだが、彼女の愁訴はあまり芝居が多すぎて、慄じれたり怒つたりすればするほどもますます滑稽になるのである。窓と云う窓には鎧よろい戸どがおろしてあるけれど、その隙間からさし込んで来る初夏らしい真昼のあかりが、色ガラスを透して来たような赤味を帯びてどんより物の輪廓りんかくを縁取ふちどりつている部屋の中で、この満身にお白粉を塗つた歡喜かんぎ天の肉体が薄桃色に染めかえられ、東北なまりのセリフを云うごとに手を挙げ臀を振る様子は、まことに哀れと云うよりも賑にぎやかに勇ましく、

要はその踊りを見たいためにわざといつまでも気を持たせているのであった。そしてどうかすると、断髪に赤い体であばれている姿を眺めながら、この恰好で紺の腹掛けを掛けさせたらとんと金太郎そのままだと思つたと、ぷつと吹き出したくなつたりした。

ボーイは彼の云い附けた通りキツチリ四時半に風呂を沸かした。

「今度はいつ？」

「多分来週の水曜あたり、……………」

「じゃ、ほんとうにお金を持って来てくれる？」

「分つた、分つた」

扇風器の風を湯上りの背中へ浴びながら、彼は自分でもその現金さに呆れるくらい、へんに冷淡に、そそくさとパンツへ脚を通し

た。

「きつとだわね？」

「きつと持つて来る」

そう云いながら握手をする時、「きつともう来ないぞ」と心の中では云うのであった。

きつともう来ない、——ボーイに門を開けさせて、表に待つている車の中へ身をひそめながら、いつでも彼は帰りがけにこの決意を堅めて、扉の隙間から接吻を送っている女の顔へ心ひそかに永久の「さよなら」を投げるのであるが、奇妙なことにそれが三日とつづくことはなかつた。三日がやがて五日となり、一週間となるあいだに、再びこの女に会いたい思いが馬鹿々々しいくらい

萌^{きざ}して来て、ずいぶん無理な繰り合わせをしてまで一途に飛んで来るのである。会う前の恋いしさと会つての後の胸ぐるしき、——そう云う心の変りかたはこの女の場合に限つたことではなく、芸者と馴染んでいた時分にも少しは覚えのあることだけれども、しかしこんなに冷熱の度が激しいと云うのは、ひつきよう畢 竟 生理的の原因に依るからなので、それだけルイズは酔わせかたの強い酒なのであろう。要ははじめ、彼女の言葉を信じさせられていた頃には、今の日本の青年たちが大概そうであるように、その西欧の生れであると云うことに或る特別な幻想とあこがれを抱いていた。思うにこの女のいいところは、そんなお客の心理を心得て、常に注意してその肌の生地^{きじ}を見せないことと、そうしていれば彼女の

うそがほんとうとして通用する程度の姿態を持つていることにあ
 るので、要も実は、その浅黒い皮膚の色には今以て魅惑を感じな
 がら、たとい人工的であつても矢張白^{はくせき}皙の肉体が醸^{かも}す幻想を破
 りたくないような気がして、ついぞ一度もそのお白粉を剥^はがさせ
 たことはなかつたのである。彼の頭には「巴里へ行つてもこの女
 なら相当に踏める」と云つた友達の評価が案外深く記憶されてい
 た。彼は車に揺られながらまだ移り香がかすかに残つてゐる右の
 てのひらの匂いを嗅^かいだ。そのたなごころに沁^しみ着いたのは、ど
 う云う訳か風呂から上つた最後までも匂つてゐるので、この頃は
 わざとそこだけ洗わないようにして、なまめかしい秘密を手の中
 へ握つて歸るのであつた。

「今度こそほんとうにこれつきりだろうか、もう二度と行かずにいられるだろうか」

と、彼はそんなことを考えてもみた。今の自分は誰に遠慮をする必要もないのであるが、彼にはへんに道徳的な、律義りちぎなところがあるせいであろうか、青年時代から持ち越しの、「たった一人の女を守って行きたい」と云う夢が、放蕩ほうとうと云えば云えなくもない目下の生活をしていながら、いまだに覚め切れないのである。妻をうとみつつ妻ならぬ者に慰めを求めて行ける人間はいい、もしも要にその真似まねが出来たら美佐子との間にも今のような破綻はたんを起さず、どうにか弥縫びほうして行けたであろう。彼は自分のそう云う性質に誇りも引け目も感じてはいないが、正直なところそれは義

理堅いと云うよりも寧ろ極端な我がままと潔癖なのだと、自分では解釈していた。国を異にし、種族を異にし、長い人生の行路の途中でたまたま行き遇あつたに過ぎないルイズのような女にさえも肌を許すのに、その惑わ溺くの半分をすら、感ずることの出来ない人を生涯の伴はん侶りよにしていると云うのは、どう思っても堪えられない矛盾ではないか。

その十三

拝復

先日は失礼致候せうろう。あれより予定の通り阿波あの鳴門徳島を経て去

月二十五日歸洛きりく、二十九日御差立の貴札昨夜披見致候きざつ ひげん。誠に誠に思いの外の儀、美佐こと素もとより不束ふつつかながら日頃左様なる不所存者のようには養育不致いたさず候処、俗に魔がさしたと申すにや、拙老此この歳に及び斯かかる憂きことを耳にいたし候は何の因果かと悲歎やる方なく候。第一親の身として其許そこもとに対しても御詫わびの申様も無之これなく、深く耻入はじり申候。

既に御申越の如き事態に差迫り候ては、今更兎角とかくの執成とりなしは御聴入れも可無これなかるべく之、重々御立腹の段察さつしり入候え共、聊いささか存じ寄りの儀も有之これあり、近日美佐子同道ごじゆらいくだされまじくそうろう御入来被下間敷候哉や、然しかる上は拙老より篤とくと本人へ申聴かせ何卒なにとぞして料簡を
入替えさせ度たく、万一改かいしゆん俊不致候わば如何様いかようにも成敗つかまつ可

仕るべく、もし又本人に於て向後を屹度相慎しみ候節は、幾重にも御

勘弁願上候。

実は執心の人形ようよう手に入り申、帰来早速御案内申上度と
存じながら肩の凝りを休め居候折柄、御状に接し茫ぼうぜん然ぜん自失、
とんと興おこざめ申候。折角巡礼の御利益も無之、却かえて仏罰を蒙こうむり
候ことかと老人の愚痴のみ出いで候。

尚なほ々なほ明日にも御入洛待上候。先まずそれ迄は現状を維持被なされ成そ
候様うらうよう、此儀くれぐれも御願申上候。

「……………『斯かかる憂きことを耳にいたし候は何の因果かと悲歎や
る方なく』か、困ったなども、……………」

「何と云つておやりになつたの？」

「出来るだけ簡略には書いたんだけど、重要な点は洩もらさなかつた積りだ。この事は僕にも責任があり、僕自身の希望でもある、つまり五分々々と云う点によくよく念を押したんだが、……」

「こう云つて来るのはあたしには分つていたんだけど、……」

でも要には意外であつた。手紙で諒りようかい解を求めべき性質のものではないし、それでは誤解が起り易いから、直接行つて話してくれたらと云う美佐子の希望は尤もであり、自分もそれに越したことはなかつたのだが、一と先ずあらましを云つてやつて、日を置いてからと云う氣になつたのは、不意に老人を驚かすことはいかに忍び難いのと、ついこの間も一緒に呑のんき氣な旅をしながら噫おくび

にも出さずにいたことを、何としても面と向つて切り出す顔がないからであつた。殊にこの返事にもあるように、先はさき一途に人形を見に来たと思つて、直ぐその手柄話になるであらう。そうしたらいよいよ出鼻を挫くじかれる。それに要は、老人の過去の経歴から見て実はもう少し分つてくれるように予想していた。口では旧式な思想の持ち主のようなことばかり云うものの、それはああ云う人に有りがちな一種の気取り、趣味なのであつて、ほんとうはもつと融通も利くし、近頃の世相や風潮にも風馬牛ではない筈である。それが此方こつちから云つてやったことをその通りに読んでくれないのみか、「重々御立腹の段察入候え共」とか「御詫びの申様も無之」などと書いて来ると云うのは、あんまり見当が違い過ぎる。

あの文言をそのまま素直に取ってくれたら「深く耻入る」筋はないのだし、なるたけ気の毒な思いをさせまいと注意して書いたつもりであるのに、矢張一往は恐縮した挨拶をするのが礼儀と云うものであろうか。

「僕はこの手紙には大分掛け値があると思うね。こう云う昔風な文体を使えば内容だつて旧式にしなければ映りが悪いから、こいつも趣味で書いているんで、お腹の中はこれほど悲歎やる方ないんでもないと思うよ。折角人形を飾って嬉しがろうとしていた矢先を、癩しやくに触ったぐらいなんじゃないか」

美佐子はそんなことはどうでもいい、とうに超越していると云う風に、やや青ざめた顔を、全く無表情に落ち着かしていた。

「どうする、お前は？」

「どうすると云って……………」

「一緒に行くか」

「あたしイヤだわ」

その「イヤ」と云う言葉をさもイヤらしく彼女は云った。

「あなたが行って話して来て頂戴よ」

「けどもこう云って来てるんだから、とにかくお前も行かないじやなるまい。僕は、会ってさえしまえば案ずるよりは生むが易いやすと思っっているんだ」

「話が分つてから行くわよ。お久なんぞのいる所でお談義を聴かされるのは真っ平だから」

二人は珍しくも面と向つて互の眼の中を視詰めながら話しているのであるが、そのぎごちなさを隠そうとして殊更つけつけと物を云いながら細巻の金口きんぐちを輪に吹いている妻の様子を、夫はいささか持てあまし気味に眺めていた。妻は自分では意識していないようだけれども、いつとはなしに顔や言葉でする感情の表わし方が昔と變つて来ているのは、多分阿曾との對話の癖が出るのであろう。要はそれを見せられる時、彼女が最早や此処の家庭の者でないことを何より痛切に感じない訳には行かなかつた。彼女の口にする一つの単語、一つの語尾にも「斯波」と云う家の持ち味がこびり着いていないものはないのに、それが夫の眼の前で新しい云い廻しに取り変えられて行きつつある、——要は別離の悲し

みがこう云う方面から襲つて来ようとは思ひ設けてもいなかつたので、もう直ぐ後に迫つて来ている最後の場面の苦しさが今から予想されるのであつた。だが考えれば、嘗て自分の妻たりし女は既にこの世にはいないのではないか。今さし向いに据わつて居る「美佐子」は全く別な人間になつて居るのではないか。一人の女がいつしか彼女の過去にまつわる因縁を離脱してしまつたこと、—— 彼にはそれが悲しいので、その心持は未練と云うのとは違うかも知れない。そうだとすれば苦に病んでいた最後の峠は気が付かないうちに通り越してしまつたのかも知れない。……

「高夏は何と云つて来たんだ」

「近々にまた大阪に用があるんだけど、こつち此方が何とか極まるま

では行きたくない、行っても御宅へは伺わないで帰るって、……
……」

「別に意見は云つて来ないのか」

「ええ、………それからあの、………」

美佐子は縁側に坐布団を敷いて一方の手で足の小指の股を割りながら、煙草を持った方を延ばして臯月さつきの咲いている庭の面へ灰を落した。

「………あなたには内証にして置いてもよし、云うなら云つても構わないって書いてあるんだけど、………」

「ふん？」

「実は自分の独断で、弘には話してしまつたって云うの」

「高夏がかい？」

「ええ、……………」

「いつのことなんだ」

「春の休みに一緒に東京へ行つたでしょう、あの時に」

「何だつて又余計なことをしやべつたんだろう」

わざわざ京都の老人にまで知らせてやつた今になつても、まだ子供には云いそびれつつ過していた要は、さてはそうだったのかと思つと、それを今日まで鶺鴒うの毛ほども感づかれないようにして、いた幼い者の心づかいが、いじらしくも不憫ふびんでもある一方、あまりのことに小面憎こづらにくい心地さえした。

「しやべる積りではなかつただけけれど、ホテルへ泊まつた晩に

ベッドを並べて寝ていると、夜中にしくしく泣いているもんだから、どうしたのかと思って聞いてみたのが始まりなんですって。

………」

「そうしたら？」

「手紙だから委くわしいことは書いてないけれど、お父さんとお母さんとは事に依ると別々に住むようになる、そしてお母さんは阿曾さんの家に行くかも知れないと云ったら『そんなら僕はどうなるんです』って聞かれたんで、『君はどうにもなりはしない、いつでもお母さんに会えるんだから、家が二軒になったつもりでいたらいんだ。どうしてそうするのかと云う訳は、大人になれば自然と分る時が来る』って、それだけ云っただけなんですって」

「それで弘は納得したのか」

「なんにも云わないで泣きながら寝てしまったんで、明くる日どうかと思ひながら三越へ連れて行つてやると、前の晩のことは忘れたように何を買つてくれ彼を買つてくれと云うもんだから、子供と云うものは実に無邪気だ、これなら安心だと思つたと云うんですの」

「だが、高夏が話すのと僕が話すのとは違ふからな。——」

「そうそう、それから、——そんなに子供に話すのが辛ければもうその必要はないじゃないか、独断で済まなかつたけれど、君等のために僕がその難関を突破して置いてやつたからつて、——」

「そうは行かんさ、僕はすべらじやああるけれども、そんなキマリの付かないことは嫌いなんだ」

しかし要がその難関を乗り越える仕事を最後の最後まで延ばしているのは、この場になってさすがにそれを口に出しては云えないけれども、いまだに事の成行きがどう変化するか分らないと云う一縷^るの望みを一寸先の未来に托しているのもあつた。妻は強気でいるようなものの、そのひた向きな感情の裏には一と入脆^{しもろ}い弱気が心の根を喰^くつていて、ほんのちよつとした物のはずみに泣きくずおれてしまいそうに思える。そうなることを執方^{どっち}も恐れているが、現にこうして相對している今の場合でも、話の持つて行き

よう次第で千里の彼方に飛び去つたものが一瞬のうちに帰つて来ないものでもない。要は彼女が今日になって老人の裁断に任せるだろうとは夢にも予期していないながら、もしそうなつたら自分もそれに従うより外にないと云うような、希望ともあきらめともつかないものが何処か胸の奥の方に潜んでいるのを、我から不思議にも疎ましくも感じた。

「それではあたし、——」

妻はこれ以上向い合っていることに不安を覚えたのであろう、いつもの時間が来たことをそれと察して貰うために茶筴筒ちやだんすの上の時計に眼をやつて、襲われたように立って着物を着換え始めた。「あれきり御無沙汰ぶさたしているが、近いうちに僕も一ぺん会つてお

くかな」

「ええ、——京都へ行く前になさる？　後になさる？」

「向うの都合はどうなんだ」

「明日にも御入洛待上候と云うんだから、京都を先になすつたらどう？　此方へやって来られると面倒だし、それにその方が極まつてからなら、自分ばかりでなく母にも会つて戴くと云つていますから」

「お前、そこに高夏の手紙はないのか」

恋人の許へ急ぐべく身支度をしている「一人の女」を、むしろ可憐な眼を以て眺めていた要は、廊下へ出て行くそのうしろかげを呼び止めて云った。

「あれをあなたに見せるつもりで何処かへ置き忘れてしまったのよ、帰つて来てからでよくはなくなつて？ —— 尤もさつき話したようなことなだけれど」

「いや、見つからなければどうでもいいんだ」

妻が出かけてしまったあと、要はビスケットを一と握りつかんで犬小屋の方へ降りて行つて、二頭の犬に代る代る餌えさを与えたり、じいやと二人でブラシをかけてやつたりしたが、暫くすると茶の間へ戻つてぼんやり畳に寝そべっていた。

「おい、誰かいなか」

と、お茶を入れさせようとして女中を呼んでみたけれど、部屋に引つ込んでいると見えて返辞をしない。弘もまだ学校から帰らな

いし、家の中は森閑しんかんとして何だか一人取り残されたように静かである。仕方がない、又ルイズにでも会いに行こうか。——彼はそう思つてみて、こう云う時にいつもきまつてそんな気になる自分自身が、なぜだか今日は哀れな男に感ぜられた。たかが相手は一人の娼婦に過ぎないのに、もう二度と行かないの何のと云うむずかしい決心をして、それに囚とらわれるのも馬鹿々々しいと云う風に思い直しては、結局会いに行くことになるのが常であったが、実はそんなことにも増して、妻が出かけて行つたあとの邸の中のガランとした感じ、——障子や、襖ふすまや、床の間の飾りや、庭の立ち木や、そう云うものが有るがままにありながら、俄にわかに家庭が空虚にされてしまったようなら淋しさ、——それが何より

堪え難かつた。いったいこの家は前の持ち主が建てて一二年にしかならないものを、関西へ移つて来た年に買い取つたので、この八畳の日本間はその時建て増したのであるが、毎日見馴れて気が付かないでいるうちに、そう念を入れて拭き込みもしなかつた北山の杉や梲とがの柱が年相応のつやを持ち出して、これからそろそろ京都の老人の気に入りそうな時代が附いて来るのである。要は寝ころびながら今更のようにそれらの柱の光沢を見、八重山吹の花が垂れている床の間の春かすがじよく日卓を見、しきい闕の向うに、戸外のあかりを水のように映している縁側の板を見た。妻がこのごろのあわただしさの中にありながらなおときどきは四季の風情ふぜいを座敷に添える心づかいを忘れないのは、いくらか情勢で繰り返しているのだ

としても、やがてこの部屋にあの花までがなくなってしまう日
を想うと、名ばかりの夫婦と云うものにも、朝夕眼に沁みる柱の色
と同じようなつかしきがある。……

「お小夜、タオルを熱くして絞って来てくれ」

と、要は立つて女中部屋の方へ聞えるように云った。そしてその
場でセルの単衣ひとえの両肌を脱いで、汗ばんだ背中をきゅつきゅつと
擦こすつて、出しなに妻が揃えておいた背広服に着かえてから、着物
と一緒にふところから落ちた京都の老人からの手紙を拾って上衣
の内隠しへ収めた。が、紙入れの中を見たがったり、「これは芸
者から来たんじゃないの」などとポケットの物を引つたくるル
イズの癖を思い出して、鏡台の抽出ひきだしの、底に敷いてある新聞紙

の下へ入れようとすると、何か가가さがさと手に触った。美佐子がそこへ高夏の手紙を挿し込んで置いたのである。

「読んでもいいのかしらん？」

手には取ったものの、封筒の中を直ぐに引き抜くのは躊躇せられた。こう念入りに隠してあるのを妻が置き忘れる筈はない。

言葉に窮してああ云ったので、読まれることを好んでいないに違いないのだ。読んだところで妻への言訳は立つのであるが、下らぬ隠し立てをしたことのない彼女がそれを自分に読ませまいとしたことに、何かしら中味の不吉さが予想された。――

才手紙拝見シマシタ。

モウ好イ加減キマリガツイタ時分ダト思ツテイタノニ、せんだつ先
 達^て淡路カラ絵端書ヲ貫ツテマダソンナコトカト驚イタ次第デ
 ス。ダカラ今度ノアナタノオ手紙デハ驚キマセン。……………

そこまで見ると要は洋館の二階へ上つて、ゆっくりあとを読みつ
 づけた。

……………ケレドアナタノ決心ガ真ニ最後ノモノデアルナラ、一日
 モ早イ方ガヨクハナイデスカ。實際此^{ここ}処マデ来テシマツテハ外
 二道ハナサソウデス。僕ハツクツク、斯^{しば}波君モ我ガ儘^{まま}ダガアナ
 タモ我ガ儘ダ、今日ノ事ハ二人ノ我ガ儘ガ当然招イタ報イダト

云ウ感ヲ深くシテイマス。アナタガ僕ニ泣キ言ヲ云ウノハイイ、シカシソノ泣キ言ヲ、——アナタ自身ハ泣キ言ノ積リデハナイカモ知レナイガ、——何故僕ニ云ウ代リニ夫ニ向ツテ云ワナイノカ、ソレガアナタニ出来ナイト云ウノハ、世ニモ不幸ナ人ガアレバアルモノダト思ツテアナタノタメニいっき一掬ノ涙ナキヲ得マセン。事実ソレナラ夫婦デハイラレナイ。「夫ガアマリ自由ヲ与エテクレタノガ恨メシイ」トカ、「阿曾ト云ウ人ヲ知ラナケレバヨカッタ、知ツタノヲ後悔シテイル」トカ、モシソノ心持ノ幾分ヲデモアナタガ直接斯波君ニ表白スル事ガ出来タラ、——夫婦ノ間ニセメテソレダケノ素直サガアツタラ、——ト、ソウ云ツタトコロデ今更愚痴ニ聞エマスカラ、最早ヤ

何事モ申シマスマイ。オ手紙ノコトハ勿論斯波君ニハ云イマセ
ンカラ安心シテイラツシヤイ。徒^{いた}ラニ悲^たシミヲ増サセルニ過ギ
ナイノナラ知ラセルノハ無駄ナノダカラ。僕コウ見エテモ必ズ
シモ木石^{ぼくせき}漢^{かん}ニ非ズ、芳子ノコトナド思イ出シテ感慨無量ナル
モノアリ、唯何処マデモソウ云ウ感情ヲ後ニ残シテ斯波ノ家ヲ
去ラナケレバナラナクナツタアナタノ不仕合ワセヲ歎クノミデ
ス。何^{なに}卒^とコノ上ハ新シイ恋人ト幸福ナ家庭ヲ持ツテ過去ノ悲
シミヲ忘レルヨウニ、ソシテ再ビ同ジ過チヲ繰リ返サヌヨウニ
シテ下サイ。ソウスレバ斯波君ダツテ「氣ガ楽ニナル」デハナ
イデスカ。

アナタハ誤解シテイルヨウダガ僕ハ決シテ怒ツテイルノデハナ

イノデス。タダ僕ノヨウナ頭ノ大ザツパナ者ガ、アナタ方ノ複
 雑ナ夫婦関係ノ渦中ヘ飛ビ込ムノハソノ任ニ非ズト考エ、アナ
 タ方自身デカタヲ附ケルマデ遠ザカツテイルノヲ賢明ダト信ジ
 タノデス。実ハ大阪ヘ行ク用モアルノダガ、ソレデ出発ヲ差シ
 控エテイマス。行ツテモ今度ハ寄ラナイデ帰ルカモ知レナイカ
 ラ悪ク思ワナイデ下サイ。

ソレカラ、僕ハアナタ方ニ隠シテイタコトガアリマス。ト云ウ
 ノハ、イツゾヤ東京ヘ行ツタ時弘君ニ話シテシマツタノデス。
 ……ソウ云ウ訳デ、結果ハ案外ヨカッタト思ウノデスガ、ソ
 ノ後弘君ノ様子ニ変ツタ点ガアルカドウデスカ。僕ノ所ヘハ時
 々手紙ヲクレルケレドモアノ晩ノコトニハ一言モ触レテナイ。

中々伶俐りこうナ子供デス。ナドト胡麻ごま化スノデハナイガ、余計ナオ
 セツカイヲシテ悪カツタラ詫あやマリマス。シカシ私ひそカニ思ウノニ、
 却かえツテ僕ガソウシタ方ガ「氣ガ楽ニナリ」ハシナイデスカ。：
 …アナタノ今ノ良人おととノコト、及ビ弘君ノコトハ、御依頼ガナク
 トモ親戚ノ一人トシテ、親子ノ性質ヲ最モ良ク理解シテイル友
 人トシテ、及バズナガラ出来ルダケノ事ハスル積リデスカラ、
 決シテ心配シナイデ下サイ。多分二人トモ打撃ニ堪エテヤツテ
 行ケルト思イマス。ドウセ人生ハ平坦ナ道バカリデハナイ。男
 ノ児ニハ苦勞ガ藥デス。斯波君ニシタツテ今マデ苦勞ガナサ過
 ギタンダカラ、一遍グライアツテモイイ。ソウシタラ我が儘ガ
 直ルカモ知レナイ。

デハ左様ナラ。当分才目ニ懸リマセンガ、イズレアナタガ新夫
人トナラレタ暁ニ改メテ拝顔ノ機会ノアルコトヲ望ミマス。

五月二十七日

高夏秀夫

斯波美佐子様

侍女

高夏としては珍しく長い手紙であった。要はそれを読んでしま
うと、人気のない部屋で心に油断があつたせいか、知らず識らず涙
が頬ほおを濡ぬらしていた。

その十四

きようはお客がお客なので床の間に活いけた姫百合ひめゆりの花の向きを気にしながら、お久は今朝からときどきそれを直していたが、四時が少し廻った時分に門の青葉をくぐつて来るパラソルの影を、二た間を隔てた伊予すだれの此方から眼に留めると、そのまま立つて縁側を降りた。

「見えたかえ」

と、昼寝のあとを庭で蓑虫みのむしを退治していた老人は、うしろに庭下駄の音を聞きつけて云った。

「へえ、お越しになりました」

「美佐子も一緒か」

「そうらしおす」

「よし、よし、お前は茶を入れな」

そう云い捨てて飛び石づたいに枝折戸しおりどから表へ廻ると、

「やあ」

と、気軽に声をかけた。

「さあ、まあ、お上り。暑かっただろう、さぞ、……………」

「ええ、朝のうちに出来ればよかったです、ちようど日中になつてしまつて、……………」

「そうだろうとも、たまに天気になつたと思うと、まるで今日あたりは土用のようだ。さあ、さあ」

と云つて先へ立つて行く老人のあとから玄関を上つた夫婦は、新芽の緑を反射している籐とうの網代あじろのひいやりとしたのを足袋たびの底に踏みながら、家じゆうに焚たきしめてあるらしいほのかな草実そうじつの匂かいを嗅かいだ。

「そうそう、お茶よりも先に手拭てぬぐいだつた。つめたいのを一つ絞つておいで」

若葉の繁みで土庇どびさしの外が小暗いばかりになつている座敷の、わざとすずしい端はしぢか近な方へ席を取つてほつと一と息入れている夫婦のけはいから、それとなく何かを見て取ろうとした老人は、汗ばんだ顔に庭の青葉を映している要の様子に気が付いて云つた。

「つめたいのより熱いお湯ゆで絞つた方がええことおへんか」

「うん、そうだったな。………要さん、まあ羽織でもお取り」

「ええ、ありがと。この辺は昼間から蚊がいますな」

「ええ、ええ、『本所ほんじょうに蚊がなくなれば大晦日おおみそか』と云うが、

ここのは藪やぶツ蚊かなんだからなかなか本所どころじゃあない。蚊やり線香を焚くといいいんだが、うちでは除虫菊を炮烙ほうろくへ入れてく

すべることになっているんでね」

要が予想していた通り老人はこのあいだの手紙のようでもなく、

いつもに変わらない機嫌きげんのよさで、此処へ来るなりふさいでいる美

佐子の顔色には頓とんじやく着なく語るのであった。お久も事のあらま

しは聞いているのに違いなかるうが、例のおつとりと、音も立てずに運ぶものを運んでしまうと、何処へ行ったのか、すだれ越し

に透かされる部屋と云う部屋には姿も見えない。

「ところで今日は、泊まつて行つてもいいんだろうね」

「ええ、……………どうともきめずに来たんですけれど。……………」

要は始めて妻の方へ眼を向けたが、妻はその言葉を撥ね返す如くに云つた。

「あたし帰るわ、早く話して下さらなくって？」

「美佐子、お前は彼方あっちへ行つておいで」

しずかな部屋に、ぽんと吐月峰はいつきの音が鳴つた。そして老人が二服

目の刻みを詰めて、雁首がんくびの臀しりで煙草盆の火をさぐっているあい

だに、美佐子は黙つて席を外して、二階の梯子段はしごだんを上つて行つ

た。下でお久と顔を合わすのが厭だったのである。

「困ったことになりましたね、どうも、……………」

「御心配をかけて相済みません。実は今までは、こう云う事にならないでも或は済むかと思っておりますましたもんですから、……………」

「今になつては済まないんですか」

「ええ、大体手紙で申し上げたような訳なんです。……………勿論あれだけではお分りにならないところもあるかと存じますけれど、

……………」

「なあに大凡^{おおよ}そは分つています。しかしこりやあ要さん、私に云わせると、一体あなたが悪いんだね」

はつとした要が何か云おうとするハナを抑えて、老人はすぐに後^{かぶ}を被せた。

「いや、悪いと云うと穏やかでないが、つまり私の考じやあ、あなたがあんまり物を理詰めを持って行き過ぎたんじやないか。何も当節のことだから、女房を一人前の男なみに扱うのもようがしようが、なかなかそれが思い通りには行かないもんでね。早い話が、あなたは自分に資格がないからと云う訳で、試験的に外の夫を選ばせた。こりやあどうして出来ないことだ。口で何のかのと新しがりやを云ったってそれだけ公平にはやれるもんじやない。……」

「そう仰つしやられると、何とも僕は申し上げようも……」
「いや、要さん、私は皮肉を云っているんじやないですよ。ほんとうに感じ入っているんですよ。これが一と昔前だったら、あ

なたがたのような夫婦は世間にいくらもあつたんで、私なんぞが
 現にその通りだつたんだが、……いやもう、一年や二年どころ
 じゃあない、五年も女房の傍そばへ寄り付かなかつたくらいなもんだ
 が、それでもそう云うものだと思つて済んでいたんで、考えてみ
 りやあ今の世の中は大そうむずかしくなっていますよ。しかし女
 と云うものは、試験的にもせよ、一度脇そへ外れてしまうと、途中
 で『こいつはしまった』と気が付いても、意地にも後へ引つ返す
 ことが出来ないようなハメになるんで、自由の選択と云うことが、
 実は自由の選択にならない。——ま、これからの女はどうか知
 れないが、美佐子なんかは中途半ばな時勢の教育を受けたんだか
 ら、新しがりは附け焼き刃なんでね」

「その付け焼き刃は実は僕も御同様なんで、お互にそれが分つて
いるもんですから、別れることを急いでいるような訳なんです。

とにかく今の道徳が正しいと命ずることなんですから」

「要さん、こりゃあ此処だけの話だが、美佐子のことは私に任せ
て下さるとして、あなたの方にはもう一度考え直して下さる余地
はないんですかい？——何とも私には理窟は云えない、歳を取
ると事ことなか勿れ主義になるせいだろうが、性が合わなければ合わな
いでいい、長い間には合うようになる。お久なんかも私とは歳が
違うんで、決して合う訳はないんだが、一緒にいれば自然情愛も
出て来るし、そうしているうちには何とかなる、それが夫婦と云
うものだと考える訳には行かんもんかね。尤もそりゃあ、一旦不

義をしたのだからと、そう云われりやあ是非もないが、……」

「そんな事は問題にしていやしません、僕が許したんですから、

『不義』と仰つしやつて下すつては、美佐子が可哀そうなんです」

「けれども不義はやつぱり不義だね、そうなる前にちよつと私に答えてくれたらよかつたんだが、……」

要は老人の えんきよく 婉曲な批難に無言で報いるより外はなかつた。申

し開きの道はいくらもあるが、その道理の分らない老人ではない、分つていながらそれを口にした言葉の裏に、親としての悲しい愚痴の含まれているのが、刃向えないような気がした。

「いろいろ僕も手を尽さなかつた所はあると存じます。ああもすればよかつたと思うこともないではないんですけれど、今では後

の祭ですし、それに何より美佐子の決心が堅いんですから、……」

いつの間にか土庇の外からさしている日の光が弱くなつて、部屋の隅々すみずみに暗い蔭が作られていた。老人は上田紬つむぎの万筋まんすじの単衣ひとえの下に夏痩せやのした膝ひざ頭がしらをそろえて、団扇うちわで蚊遣りかやの煙を追いつつながら、思いなしか眼ぶたをしばだたいているのは、除虫菊むせに咽むせんだのかも知れない。……

「これは成る程、あなたの方を先にしたのは私の出ようがまずかった。——要さん、とにかくなんにも云わないで、私に美佐子を二三時間預けては下さるまいか」

「お預けしてもとても無駄だと思ふんですが、………実は当人に

してみますと、お話があるのが辛いつらと云うので、僕だけをお願い
 に出るようにと云つて、そんなことから、とうにもお伺いする筈
 のところが段々におくれておつたんですが、今日でも連れて来ま
 すのに随分骨を折らせたんです。行くことは行くが、自分の決心
 は最早や動かないものとして、申し上げることは全部僕から申し
 上げ、お話があれば伺つてくれると云うような訳なんでして、
 ……」

「しかし要さん、仮りに娘が不縁になろうと云う場合だ、私と
 したらそう簡単に済ませる筈のもんじゃないがな」

「それは僕からも再々云い聴かせておるんです。ただ何としても
 興奮しております際はあり、お父さんと衝突したくないからし

て、僕が本人の代理として御承知を願うように計らつてくれると申すのが本意なのです。が、いかがでしょう、何なら此処へ呼びましたんでは？」

「いや、何か支度もしてあるようだが、私はこれからあれを連れて瓢亭ひょうていへでも行つて来ましょう。ねえ、あなたには別に、異存がお有りじゃあないんでしょう」

「ですが、あれが素直に承知しますかどうかですか。……………」

「ええ、分つてます。私が本人にそう云います。いやだと云やあそれまでだけれども、ここの所は年寄の顔を立ててお貰い申したいね」

要がもじもじしているひまに老人は手を鳴らしてお久を呼んだ。

「あのうな、南禅寺へ電話をかけておくれでないか、——二人で行くから、静かな座敷を取っておいてくれるように」

「お二人さんでおいきやすの？」

「折角腕によりをかけたんだろうから、お客を残らず^{さら}浚^{さら}って行っちゃあ気の毒だと思つてな」

「そしたら残つておいやすお方が気の毒やおへんか、いつそのことみんなでおいきやすな」

「御馳走^{ちそう}は何が出来るんだい？」

「なにもおへんえ」

「甘子^{あまご}はどうした？」

「空揚げにしよう^{おも}思^{おも}てますけど、……………」

「それから？」

「若^{わか}鮎^{あゆ}の塩焼」

「それから？」

「牛蒡^{ごぼう}のしらあえ」

「まあ、要^ささん、肴^{さかな}が悪いが、ゆつくり飲んでいて貰いましょう」

「貧乏^{くじ}鬮^{くじ}お引きやしたなあ」

「なあに、板前が瓢亭以上ですから、たんと御馳走になりますよ」

「じゃあ、おい、着物を出しといとくれ」

そう云つて老人は二階へ上つた。

どう説きつけられたのか、「年寄りの気にさからつては無事にま

とまりのつくべきものも壊れてしまうから」と途^{みち}々^{みち}たしなめら

れて来たのが腹にあつたのでもあろうか、美佐子は十五分もすると不承々に父親と一緒に降りて来て、廊下に立ちながらそつと顔を直してから、一と足先に表へ出た。

「さあ、じゃあちよいと行つて来ますよ」

と、紗しやの宗匠頭巾ずきんを被つた、宝井其角きかくと云ういでたちで奥から現れた老人は、玄関まで送つて出たお久と要とにそう云い残すと、白足袋の足に利久を穿はいた。

「お早うお帰り」

「いや、お早くもないかも知れない。——要さん、美佐子にも云つて置いたんだが、今夜は泊まつて貰もらいますよ」

「いろいろどうも御厄介どつちになります、僕は執方どつちになりましたも

差支えはありません」

「お久や、わたしの蝙蝠こうもりを出して貰おう、大分蒸して来たようだが、この塩梅あんばいじゃあ又雨だな」

「そしたら、車でお行きやしたら？」

「なあに、じきそこだ、歩いたって訳あないさ」

「行いとおいでやす」

と、お久は送り出しておいて、すぐに手拭い浴衣ゆかたを持って要のあとから座敷へ行つた。

「お風呂が湧わいてますよって、今の間に一と浴びおしやしたら？」
「有り難う、折角だけれど、どうしようかな、風呂へ這入ると臀しりが落ち着いちゃうんでね」

「どうせお泊まりやすのんやろ？」

「さあ、それがどうなるか分らないんです」

「そう云わんとまあお這入りやす。おいしい物おへんよつて、せいぜいお腹減しといとおくれやす」

要はこの風呂へ這入るのは久し振りだった。上方に普通な長州風呂と云う奴で、一人の体が満足には漬つからないくらい小さな釜の、周りの鉄の焼けて来るのが東京風のゆつくりとした木製の湯ゆ槽ぶねに馴なれた者には肌ざわりが気味悪く、なんだか「風呂へ這入つた」と云う心持がしないのに、まして湯殿がおそろしく陰気な建て方で、高いところに無む双窓そうまどがあるだけだから昼間でも厭いやにうすぐらい。自分の家でタイル張りの浴室にばかり這入りつけてい

るせいにか穴蔵へでも入れられたようで、その上丁子ちようじを煎せんじてあ
るのが、垢あかだらけに濁った薬湯くすりゆのような連想を起させるのであ
る。美佐子などは、あのお湯は丁子の匂いで胡麻化してあるので
幾日目に換えるのだから分らないと云つて、すすめられると体よく
逃げたものであつたが、主の方は又「うちの丁子風呂」と云うの
を自慢にして、客への御馳走と心得ているらしかった。老人の
「雪隠せついん哲学」に依ると、「湯殿や雪隠を真つ白にするのは西洋
人の馬鹿な考だ、誰も見ていない場所だからと云つて自分で自分
の排泄物はいせつが眼につくような設備をするのは無神経はなはだも甚しい、す
べて体から流れ出る汚物は、何処どこまでも慎しみ深く闇に隠してし
まうのが礼儀である」と云うのであつて、いつも杉の葉の青々と

したのを朝顔に詰めるのはいいとして、「純日本式の、手入れの届いたかわや廁には必ず一種特有な、上品な匂いがする、それが云うに云われない奥床おくゆかしさを覚えさせる」と云うような奇抜な意見さえあるのだが、雪隠の方はともかくも、風呂場の暗いにはお久も内証で不便をかこつことがあつた。彼女の話だと、丁子も近頃はエッセンスを売っているから、その一二滴を垂たらしさえすれば済むものを、矢張昔風に実の干したのを袋に入れて、湯の中へ漬けておかなければ老人が収まらないのだと云う。

「肩流しておくれやすんやけど、あんまり暗おすので、前とうしろと間違えたりおしやしてなあ」

要はお久のそんな言葉を想い出しながら、柱にかけてあるぬかぶく糠

袋ろを見た。

「お加減はどうどす？」

と、焚きき口の方でお久らしい声が云った。

「結構です。それより誠にすみませんが電氣をつけて貰えませんか」

「ほんに、そうどしたなあ」

しかし点ともされた電燈と云うのが、それもことさらそうしてあるのに違いない豆ランプ程の球であるから、ひとしお陰気で暗さが増したような気がする。要は流しに出ていると体じゆうを藪蚊やぶかが喰うので、ざっとシャボンも使わずに汗を洗い落してから丁子の湯の中に浸りきっていたが、そうしていても蚊は相変らず首の周り

へ襲つて来る。中はそんなに暗いだけけれど、無双窓の櫺子の外
 はまだうす明るく、楓かえでの青葉が日中よりは却かえつて冴さえて織り物の
 ような鮮あざやかな色のぞを覗かせている。なんだか辺鄙へんぴな山の湯にでも
 来たようで、老人がよく「うちの庭ではほととぎすが聞ける」と
 云つていたのを思うにつけ、こう云う時に啼なかないものかなと耳
 を澄ましたが、聞えるものは何処か遠くの田圃たんぼの方で雨を呼んで
 いる蛙かわずの声と、わーんと云う蚊の啼きごえばかりである。それに
 しても今頃瓢亭の座敷にいる親子は、何を話しているだろう。老
 人は婿むこに対してこそ遠慮があるものの、あの口ぶりから察すると
 恐らく娘には圧制的に出るのではないのか。要はそんなことが多
 少は心にかかりながら、どう云うものか二人を送り出してしまつ

てからは何となく気が軽くなって、こうして風呂に漬かっている
此処の家が、すでに第二の妻を迎えた自分の新居であるような愚
かしい空想が湧くのであった。思えばこの春からしきりに機会を
求めては老人に接近したがったのは、自分では意識しなかったと
ころの外の理由があつたのかも知れない。そういう途方もない夢
を頭の奥に人知れず包んでいながら、それで己れを責めようとも
戒しめようともしなかつたのは、多分お久と云うものが或る特定
な一人の女でなく、むしろ一つのタイプであるように考えられて
いたからであつた。事実要は老人に仕えているお久でなくとも
「お久」でさえあればいいであろう。彼の私ひそかに思いをよせてい
る「お久」は、或はここにいるお久よりも一層お久らしい「お久」

でもあろう。事に依つたらそう云う「お久」は人形より外にはないかも知れない。彼女は文楽座の二重舞台の、瓦燈がとうぐち口の奥の暗い納戸なんどにいるのかも知れない。もしそうならば彼は人形でも満足であろう。

「ああ、お蔭様でさっぱりしました」

と、要はその声で自分の妄想を振り落すように云いながら、借り物の浴衣を湯上りの肌へ引つ掛けて戻つた。

「きたのうて心こころ悪わるおしたやろ」

「なあに、丁子風呂もたまには変つていていいですよ」

「けど、お宅のお風呂場みたいに明あうしたら、あてえ等よう這入りまへん」

「どうしてです」

「あないに何処も彼処も白おしたら晴れがましおしてなあ。……

…あんさんとこの奥様おくさんみたい綺麗きれおしたらよろしおすけど。…

……」

「へえ、そんなにうちの女房は綺麗かしらん？」

要は眼の前まへにいない人に軽い反感あざけと嘲りの心こころもちを含めて云いな

がら、すすめられるままに杯を受けて器用ほに乾した。

「さ、一つ差上げましょう、……」

「そうどすか、そんなら戴きます」

「甘子がなかなか結構です。……とところでこの頃は地唄はどう

です？」

「あんなもん、しんき臭くそおしてなあ。……………」

「この頃はやっていないんですか」

「してることはしてますけど、……………奥様は長唄どすやろ」

「さあ、長唄なんかとうに卒業しちまって、ジャズ音楽の方かも知れない」

春慶塗しゅんけいぬりの膳ぜんの上に来る蛾がを追いながらお久がおおいでいくれる団扇うちわの風を浴衣に受けて、要は吸い物椀わんの中に浮いているほのかな早松茸さまつだけの匂いを嗅いだ。庭の面は全く暗くなりきつて、雨蛙の啼くのが前よりも繁しげく、かしがましく聞える。

「あたしも長唄けいこしてみとおす」

「そんな不料簡を起すと、叱しかられますぜ。お久さんのような人に

は地唄の方がどのくらいいいか知れやしません」

「そら、地唄習うのもよろしおすけど、お師匠はんがやかましおして」

「たしか大阪の、何とか云うけんぎよう検校さんじゃあなかつたんですか」

「へえ、——それよりも内のお師匠はんの方がなあ、……………」

「あははは」

「かなしまへんどす、講釈ばつかり多おして、……………」

「あははは、……………年を取ると誰しもみんなあなるんですよ。

そう云えばさつき風呂場にあつたんで思い出したんだが、相変らずぬかぶくろ糠袋を使うんですね」

「へえ、御自分はシャボンお使いやすけど、女は肌が荒れていかんお云やして、使わしとおくなはれしません」

うぐいすくん
「鶯の糞はどうしてます？」

つこ
「使てます、一向に色は白うなれしまへんどすけど」

二本目の銚子ちようしを半分ほどにして、あとはあつさり茶漬にしてから、食後に枇杷びわを運んで来たお久は、玄関の方で電話のベルが鳴るのを聞くと、剥きかけた実をギヤマンの皿の上へ置いて立つたが、

「へえ、……………へえ、……………よろしおす、そない申しときます。

……………」

と、電話口でうなずいていたのが、直きに戻って、

「奥様も泊まる云うとおいやすさかい、もうちよつとゆつくりして行く云うてどすえ」

「そうですか、帰ると云っていたんだけれど、……泊めていたくのは久し振りのような気がしますね」

「ほんに、あれから長いことどすなあ」

しかし要が美佐子と二人で一つ伏戸ふしどに寝ると云うのも随分「長いこと」ではあった。尤も二三箇月前に弘が東京へ行っていた折、何年振りかに二人ぎりて二た晩か三晩を過したことがあるにはあるけれど、その時の経験では、全く合い宿の旅客のように平気で枕を並べながら、互に何のかかわりもなく安眠することが出来たほどにも、凡そ夫婦らしい神経が麻痺まひしてしまっているのである。

老人が今日はしきりに泊めることを主張したのは、恐らくそれが予定の計画だったのであろうが、その折角の心づかいを要は多少迷惑には感ずるものの、殊更それを避けようとするほど気が重くなりもしない代りには、今更何の足しになろうとも思えなかつた。「えらく蒸しますね。風がぱったりなくなつてしまつた。……」

要は消えかかつた蚊やりの煙の真つすぐに立ちのぼる土^{どびさし}庇の外を仰いだ。止んだのは庭の面の風ばかりではない、お久もおおぐのを忘れたように、手にある団扇をじつと動かさずにいるのである。

「うつとしおすなあ、雨どすやろか？」

「そうかも知れない、……さつと一と降り来るといいんだが、

……」

そよともしない青葉の上には、雲ぎれのしたところどころに星のにじんでいるのが見える。虫が知らせるとでも云うのか、ちょうど今頃、父親の説諭に反抗している妻のいちぢず一途な言葉のはしはしが聞えて来るような心地がする。要はその時、妻より一層強気な決意がいつしか自分の胸の奥にも宿っていることをはつきり感じた。

「何時でしょう」

「八時半頃です」

「まだそんなもんですか。静かですねえ、この近辺は」

「はよ早おすけど、横におなりやしたらどうです？ そのうちにお帰

りやすやろさかい、……」

「電話の模様じゃあ話がなかなか手間が懸るんじゃないんですかね」

要はひそかに老人よりもお久の意見を聞きたい気がした。

「何ぞ本でも持って来まひよか」

「有り難う、……お久さんはどんな物を読むんです？」

「なんやかや草双紙みたいなもん持つておいでてこれ読めお云やすけど、そんな古臭いもん読まれしません」

「婦人雑誌はいけないんですか」

「あんなもん読む暇あつたら手習いせえてお云やす」

「お手本は？」

りゆうしゆんじよう

「柳春帖」

「柳春帖？」

「それから池凍帖、——お家流の本どす」

「なる程。——それでは何か、その草双紙でも拝借しましょう」
 「名所図会はどうどす？」

「そんなものもいいかも知れない」

「そしたら彼方あっちへおいでやすな、離れの方にもうちやんと支度し
 とおすえ」

廊下づたいに、お久は先へ立つて行つて、茶の間の水屋の前を通
 ると、隣りの六畳の間の方ふすまの襖を明けた。暗いのでよく分らない
 が、中には蚊帳かやが吊つつてあるらしく、まだ戸締りのしてない庭か
 らすうツと流れ込む冷めたい空気に萌黄もえぎの麻の揺られるけはいが

察せられる。

「風が出て来たようやおへんか」

「急にひいやりして来ましたね、もう直き夕立がやって来ますぜ」
蚊帳の裾がさらさらと鳴ったのは、風ではなくてお久が中へ這入ったのだった。そして手さぐりでスウィッチを捜して、枕もとの行燈あんどんの中に仕込んである球をともした。

「もうちよつと明あかい球持つて来まひよか」

「なあに、昔の本は字が大きいから、これでも結構読めるでしょ」

「雨戸明けといてもよろしおすやろ、あんまり暑苦しおすさかい、

……」

「ええ、どうぞ。いい時分に僕が締めます」

要はお久が出て行ってしまふともかくも蚊帳の中に這はい入った。

広くもあらぬ部屋ではあるし、麻の帳とぼりで仕切られているので、二

つの蓐しとねが殆ど擦れ擦れに敷いてある。自分の家では、夏にはいつ

も出来るだけ大きな蚊帳を吊つて、出来るだけ離れて寝る習慣が

あることを思うと、この光景は異様に感ぜられなくもない。しよ

ざいなさに彼は煙草に火をつけて腹這いになりながら、萌黄の帷まく

の向うにある床の間の軸を判じようとしたけれど、何か南画の山

水の横物らしいとは思えても、行燈が中にあるせいか外はもやも

やと翳かげつていて、図柄も落らっかん欵もよく分らない。掛け軸の前の香こ

盆うぼんに染め付けの火入れが置いてあるので、始めてそれと気がつ

いたのだが、さつきから微かすかに香かっているのは大方あれに「梅が香く」が薰くんじてあるのであろう。ふと、要は床脇の方の暗い隅にほのじろく浮かんでいるお久の顔を見たように覺えた。が、はつとしたのは一瞬間で、それは老人の淡路土産の、小紋の黒餅こくもちの小袖そでを着た女形おやまの人形が飾つてあつたのである。

涼しい風が吹き込むのと一緒にその時夕立がやつて来た。早くも草葉の上をたたく大粒の雨の音が聞える。要は首を上げて奥深い庭の木の間を視つめた。いつしか逃げ込んで来た青蛙が一匹しきり、頻しきりにゆらぐ蚊帳の中途に飛びついたまま光つた腹を行燈の灯に照らされている。

「いよいよ降つて来ましたなあ」

襖ふすまが明いて、五六冊の和本を抱えた人の、人形ならぬほのじろい
顔が萌黄の闇の彼方あなたに据わった。

青空文庫情報

底本：「蓼喰う虫」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年10月31日発行

1969（昭和44）年2月10日20刷改版

1987（昭和62）年11月30日53刷

初出：「大阪毎日新聞 夕刊」

1928（昭和3）年12月4日～1929（昭和4）6月18日

「東京日日新聞 夕刊」

1928（昭和3）年12月4日～1929（昭和4）6月19日

※底本巻末の三好行雄氏による注解は省略しました。

入力：kompass

校正：しんじ

2019年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蓼喰う虫

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>